文芸川越

第45号　第4回 川越文芸賞

川　越　市

文芸川越

第四十五号

令和七年二月

時が人を結ぶまち川越

文芸川越

第 45 号

第四回　川越文芸賞受賞者

詩

川越文芸賞　小野　浩

川越文芸賞準賞　荻座　利守

同　中山　正夫

短歌

川越文芸賞　大島　秀子

川越文芸賞準賞　齊藤　洋子

同　鳴原　音羽

随筆

川越文芸賞　佐藤　智子

川越文芸賞準賞　豊田知枝子

同　橋本美恵子

俳句

川越文芸賞　野村　桂子

川越文芸賞準賞　新村　洋子

同　斉藤　秀子

川柳

川越文芸賞　時枝　利幸

川越文芸賞準賞　指宿　恒子

同　栗原　正歩

小説

川越文芸賞　宮澤　果奈

川越文芸賞準賞　成本　孝宏

同　井原　正人

表紙について

第71回　川越市美術展覧会
川越美術協会会長賞（洋画・彫塑）

『８月の柘榴』

８月の暑さにも負けず、秋の収穫にむけて実を熟しつつある柘榴（ざくろ）。

その様子を、柔らかな色合いと透明感により表現しました。

髙田　文雄　作

文芸川越

第四十五号

目次

川越文芸賞受賞者……2

詩

受賞作品……7
選考にあたって・編集を終えて……8

短歌

受賞作品……45
選考にあたって・編集を終えて……47

随筆

受賞作品……48
選考にあたって・編集を終えて……57

俳句

受賞作品……59
選考にあたって・編集を終えて……60

受賞作品……95
選考にあたって・編集を終えて……97

受賞作品……98
選考にあたって・編集を終えて……111

川柳
受賞作品……113
選考にあたって・編集を終えて……114
……121

小説
受賞作品……123
選考にあたって・編集を終えて……124
……177

市内文芸団体一覧……179
「文芸川越」（第四十五号）作品掲載者名簿……180
編集後記……183

カット
青柳謹一　犬神まみや
指宿恒子　鴨川満智子
吉良朴　髙野英次
山本久美子

編集委員

〈詩〉
天野　英
鈴木東海子
曲山　浩

〈短歌〉
荒川惠子
小峯綾子
曽根田恵美子

〈随筆〉
遠山昭雄
寺島悦恩
鈴木正幸

〈俳句〉
石田浩二郎
益子　聰
對崎フミ

〈川柳〉
寺本甚太
野本一史
三田地輝憶

〈小説〉
木ノ原小里
村上トシ子
河合いね子

詩

川越文芸賞

時の鐘

小野　浩

中院に枝垂桜咲いて
喜多院のソメイヨシノにささやく
蔵造りの町並みに春の訪れを告げる花々
泥棒橋あたりにも仄かな香りが

夜明けに響く一番鐘
あなたの音はいつもあたたかい
大切ないのちを見送った日も
そばにいて抱きしめてくれた

遠くから訪れる人にも
ここに暮らしている人にも

透き通った音色を
惜しみなく与えている

久しぶりにあなたの足元に立つと
よみがえってくる風景がある
手で突くのは今日が最後という日
突かせてもらった鐘つき堂の木の匂い

当たり前のことだと
思ってきたことが
かけがえのないことなのだと
思えるようになった日々

時の鐘　あなたは灯台
四百年の時を生き
明日を見据えて
今日も町を照らし続けている

川越文芸賞準賞

時の雫

荻座利守

微細な時の雨粒が
大気の網を伝って
落ちてくる朝

潰れるように重なった
記憶の重箱
その隅の継ぎ目に
透明な雫が染み込んでゆく

滲む雨滴が
浮かび上がらせるのは
懐かしさを象る

いくつもの顔や景色

めぐりゆく水に宿る
色とりどりの思い出が
煙雨に霞む遠景に
映し出されて

沈む灰色の朝に
温もりをまとった
光彩を与えてくれる

時の雫の贈りもの
冷たく濡れる
気圏に咲いた
追憶の波紋

川越文芸賞準賞

落葉（らくよう）

中山正夫

令和四年師走
夜来の風が吹いて　辺り一面に散った枯葉
いびつに反り返っている
通り過ぎる時
踏まれた落ち葉は乾いた音をたてて
形をなくしてしまう

広場を抜けて向かう先には
色あせた草叢がみえる
その中に数輪の花をつけたコスモスの
一叢をみつけた

まだ　咲いている

靴底から響いてくる音を聞いているうちに
今年逝ってしまった姉や兄の面影が浮かんできた
　　もう少し咲いていたかっただろうに

美容師を貫いた姉は
「あゝ　さっぱりした」と　お客さんに
言ってもらえるのが嬉しかった
大工だった兄には
子供の頃　学習机を作ってもらった

姉や兄の来し方を想いながら
二人が落としてきた言の葉を
今　拾い集めている

長生きのご褒美　平和な日々を

大嶋一恵

あれ
何をしようと思ったんだっけ
冷蔵庫の前でふと考える

少したって
ああそうだった　のどが渇いていたんだっけ

二度と戦争をしないという
人の世の最善の知性と知恵に守られて私は育った

思い出すとあっという間のような
長い長い時間だったような

かわいい孫にも恵まれ
赤いちゃんちゃんこを着て
奥にいるばあちゃんの年齢になった

もし私が言葉を忘れる日がきても
私の愛する人たちが
奇跡的な平和な日々の思い出とともに

戦争はしちゃいけないよ
ばあちゃんのばあちゃんが言っていたと
いつも心配していたよね

昔からそう言っていたよねって
みんなで笑ってほしい

平和への階段

ウッドマン

人類の歴史を紐解く時
戦争のない平和な
時代はなかった
それは今も続いている
人と人との争いを
喧嘩と言い
国と国との争いを
戦争と呼ぶ
いつも人間は憎み合い
罵り合っている
そこには愛情の
欠けらも見当らない

ただ戦うための
兵器を作り続けている
なぜ戦争が終わらないのか
なぜ平和が始まらないのか
もしも人間がこのまま
戦争を続けるのならば
いずれ神々の逆鱗に触れ
その判きにより
人間が防ぐことのできない
自然の猛威が荒れ狂い
戦争などできない
状態に陥るだろう

発情期

浮橋透徹

発情期の世界で踊る孤独な男女
どこにも交わらない世界へ　ようこそ

太鼓が高鳴る
手足がうごく
なかば流動的に

自由に委ねてみよう
ぞくぞくする未来
こころのなかのなにかを束ねた
夢ありし社会

プレート深く沈むように
すべてのときが止まる
いまこの瞬間へ　ようこそ

春の雪

大和友子

障子越しの窓明かり
春光の柔らかさ
五人囃子が奏でる旋律
弥生の白い贈り物

新梢に一面の雪化粧
つれなく映る
淡雪の眩しさ
白銀のハーモニー

塵を落として
宇宙の果てまで

調和を促し
ひと呼吸する

握りこぶしに滴れ
儚く消え失せる
つかの間の冬昂
春のおとずれ

秋 冬 春 夏

あいだ　澄

見上げた空には、希望が見えた
仰げば澄んだ秋の青空が広がる
夜空に、星の瞬きと、月の微笑みが優しい

心を凍らすほどの、冷たい冬が来て
白く息を吐きながら、耳を紅く染めて
ラジオ体操に夫と出向く
健やかな体と心を保つため
努力、努力、努力、だ
己の弱さと、戦いながら

桜の花の遠い空に、白い月が見え隠れして
時の経過を教えてくれる
芽吹きはじめた若葉が涼風に揺れてる
私は大きく深呼吸を…する
健やかな体と心を持つ、現在の私に
ありがとうの言葉を伝える

暑くて暑くて、下を向いて歩く
道のべの雑草が痛々しい
夕立が嬉しいね、軒下で雨宿りをした
小さな水たまりが出来て
小石を蹴ったら、優しい音がした

健やかで有れ、と言う願い
秋冬春夏、一年が過ぎた
巡る秋には、赤とんぼが見たい
希望は、膨らむ

夫婦越え

青柳謹一

節目ごとに峠を越えてきた
思い出をいっぱい荷物にして
妻と峠にたどり着く

ここは八十八歳　八十八峠だ
見下ろすと過去の道程が見渡せる
振り返れば分岐点ごとに右往左往したものだ
判断に迷ったり悩んだり　時には転落も
修羅場や葛藤をくぐり抜けてきた
こうして節目節目の峠で一息つく
景色を眺めるのも　野草の花をみつめるのも
野鳥の声を聞くことも

二度とこれない峠だから
二度と眺めることのできない風景だから

見上げればかすかに九十九峠が見える
真近のようで遠いのだ
すでに足腰は衰え　視力聴力は落ちた
だからゆっくり歩こう
転倒しないように
二度と歩けなくなるかもしれないから
二度とこの空気を吸えなくなるかもしれないから
いっぱい　いっぱい吸っておこう
「生きていて良かった」と思えるように
今日もこつこつと歩く
夫婦峠の風は老いの風だ
明日も風は吹くのだから

自動販売機

伊藤彰一

郵便ポストと
自動販売機が並んで立っていた
そう思って
老人がひとりやってきた

あるはずのポストがない
思わず隣の自動販売機に手を置いた

自動販売機が話し始めた
　旧型ポストは撤去されました
　新型ポストは千日堂わきの
　コンビニ前にあります

ベジチェックの結果
あなたは野菜不足です
野菜ジュースをお飲みください

老人の独り言
鎌倉佐弓の
「ポストまで歩けば二分
走れば春」の俳句が好きだった
これからは
「ポストまで歩けば二〇分
走れば息切れ」になりそうだ
老人は野菜ジュースを買わず
帰っていった

竹

平井正一

鬱蒼とした竹林の奥深くから
暗く翳った土壌の真下から
竹が生え初め　生え初め
地下に根を張り　真直ぐに伸び
ぐんぐん伸び　節をつけ　空を切り裂き
天を衝き　嗚呼！　その先は――

竹林を歩く／哲学の小径／
私は人生を振り返り
時折り空を見る
雲ひとつない青空を
激しかった時代

穏やかだった日々を・・・
竹・一本一本のように
しなやかに　強く生きて来たか？

竹林の下
哲学の小径を二つの影が歩む

言　葉

竹内京子

言葉は我々の心の代弁者
友を思う気持ち声に乗せ

ふさわしい時に語られた言葉は
言葉が不要なときに沈黙を守るのと同じく
黄金である
私達は日々大切で膨大な言葉に触れてる
言葉は「クスリ」にもなるが「リスク」でもある
心の思いを響かして声を顕す
友の心を揺り動かす真心と確信で
ポジティブな言葉を聞けば前向きな気持
ネガティブな言葉に触れれば後向きに

暗くなることが多く心を宿す
魂のこもった言葉は時空を超えて
人の心を鼓舞し生きる勇気を与える
その無限の力を信じて逆境の中の希望を持ち
価値創造の言葉を紡ぎ続けたい
人は誰でも言葉で色をぬる絵描さん
言葉は心であり、その人の
心の色が人々の心のカンバスに色を塗る
真実の言葉はいつも飾られることなく
かつ簡潔である人生の「羅針盤」として前進
21世紀の主役達民衆の一人に偉大な力がある
変革のかぎはいつの世も立派な人格として
尊敬して接し共に成長していきたい
老後の人生明るく生き生きと
魂を目覚めさせ光や喜びに挑戦

家族の未来

中島久美

始まりは旦那から
結婚式の次の日だった
私を　母ちゃんと呼んだ

十年後　父ちゃんは
私のことを
何と呼んでいるのか
今まで色々な呼び名があった
ふぅ
お相撲ちゃん　むかついた

息子は

三歳になる前から
母ちゃん
ママちゃん
久美ちゃん母ちゃん
そう呼ばせていたのは
父ちゃんでしたね

私は
ずーっと父ちゃんかなぁ？
いいえいいえ
呼び名が変わっても
愛を呼び合う家族でいようね

花のように

中島幸男

神はこの世に花の咲く草木を育てた
厳しい寒暑・風雨に耐えながらも
時がくれば必ず咲いてくれる花
小鳥は甘い声をからし飛んでくる
蝶もひらひらと舞いながら寄ってくる
花は毎年優雅な彩りをなびかせて
万物へ幸せな笑顔を魅せ付ける

人生の岐路に立つ冠婚葬祭には
いろいろな花が飾られ供えられる
花が輝き香りを発する神霊力は
人の心に勇気を生み歓喜を鼓舞する

悲哀の心にも優しく癒してくれる

花は毎年美しく咲こうと誓い
大地に確り根を張り枝葉を伸ばす
己も日々、念じて努力・精進し
花のようなエールを贈れる
心の広い豊かな人間になりたい

かっこいい女

中島　貴

新居町に住む袴田さんと
沼津市でプールデートすることにした

待ち合わせ場所は
新幹線の三島駅駅前ロータリー
喫茶　キャントピアＡ

会社はギリギリに出勤するが
デートの待ち合わせは
いつも３０分以上前には到着

その日も先にお店に入って

袴田さんが来るのを一服しながら待った
相棒はアイスコーヒー

お店の細い窓に
夏の強い日差しが差し込む
外はギラギラしている

窓の外を
白いコットンバッグを肩にかけ
颯爽と歩く女性が通り過ぎた

一瞬見かけただけだったが
かっこいい女だった

少しして店のドアが開いた
入ってきたのは袴田さんだった
肩には白いコットンバッグ

孫　達

曲山　茂

じいちゃんと四歳の男の子が家で遊んでいた
チャイムが鳴っていとこの子が遊びに来た

十歳の男の子と八歳の女の子
今までじいちゃんと遊んでいたが
じいちゃんはあっちい行けよとばかり
眼の色が輝き

おにいちゃんおねえちゃんに
興味しんしんで遊んでもらいたい
仲よく仲間に入れてもらいたく
そばに近づく

おねえちゃんは晴人に声をかける
従がいながら言うとおりにしている
とても楽しそうだ

おにいちゃんも晴人に声をかける

とにかく晴人は尊敬しているかのように
うなずいている

二人とも晴人を可愛いがっている
ずうっとずうっと仲良くしなさいね

じいちゃんはこのまま続くといいなと思う

おとしもの

酒井　真結子

かぷかぷ　ぶくぶく　ぽこぽこ
あわを出すとあがっていくよ
ぷくぷく　ぽわぽわ　ぽぽぽ

—ぴとり
水面にきれいなふわふわ
桜の花びらおちてきた
ぷかぷか　ぷかぷか　うかんでおよぐ
あめがあたっても、進んでく

—ぴちゃん
水面にひろがる模様

お空の水がおちてきた
ぴとぴと　ぴとぴと　いっしょにないて
あわがあたっても、気にしない

―ぽちゃん
水面の空をうごかし
小さな石がおちてきた
ぷくぷく　ぷくぷく　じめんの方へ
あわがあたっても、よけていく

―ぽとん
水面が大きくゆれて
赤い木の実がおちてきた
ぶくぶく　ぽこぽこ　しずんでく
あわがあたっても、止められない

今日もあわ出し遊んでる
今日は何がおちてくる？

おかえり

志村　奏

電車に乗って逢いにいく
「おふくろ」と呼ぶ弟と暮らす母
「おかあさん」と呼んでいた娘の
久しぶりの里帰り

カーブに差し掛かるたび列車は軋んで
笑っているような
泣いているような声をあげる
忘れていた記憶が私のなかで波のよう
行ったり来たりを繰り返す
この声はこころを押し殺し泣いていた
母の嗚咽

故郷が近づくにつれ
外気は冷たさを増して
駅に着くたび開くドアから
勢いよく風が吹き込んでくる

読みかけのページは開かれたまま
軋む列車の音を子守唄に
いつのまに眠っていたのだろう
逢うたびに小さくなる母は
夢のなかで私を見上げて
眩しそうに目を細め
おかえり　と笑った

母は娘の「おかあさん」に戻って
古い家で待っている
透き通った思い出を手土産に
もう乗り過ごさないようにと身構える

詩の川越文芸賞の選考にあたって

『文芸川越』四十五号は、各部門に川越文芸賞及び川越文芸準賞が設定されて第四回となり、五号ごとに定期的に賞を設定することになる。三十三号において市制施行九十周年記念号での川越文芸賞の選出によって文芸の向上と活性化がみられ多くの作品が寄せられて各部門との交流も行われたことが定期的な賞の設定になったのである。

本年の詩部門の応募は十八名である。三編集委員は各々五名の候補作品を推薦しその理由をあげたのは、次の六編である。この中から三篇を選出した。

小野浩「時の鐘」

見慣れた春の桜の季節に風景描写の中で届く鐘の音に懐しい記憶が蘇えってくるように、歩いた記憶は感受した記憶となり〈あたたかい音〉という表現の深度を全体的に広げる心理描写となり心を震わせるのである。ここに気持の成長が感受されており川越の街の特色の描写であるが希望を表示している。大事にしていた心情は暖かい心の中で持続しており言葉の選択に力量がみられるのである。

中山正夫「落葉（らくよう）」

身近かな人達の想い出が落葉の道を歩いている時に草叢のなかにコスモスの花が数輪みつけたことでよみがえる。冬になっても咲いている花を見て想いの言葉を手にしている繊細な描写の詩である。

荻座利守「時の雫」

細密描写の筆づかいで記憶の言葉を描写している。そこには透明の零が意識のなかで色彩をおびて心理的な明るみがある。遠景ではあるが実体のように確かな追想ともいえる。時の雨粒が感情の零が心に染み渡る詩である。

ウッドマン「平和への階段」

人類の歴史に平和な時代はと問う詩であり現代の世界の戦争は終らないのであろう。なぜ人間は戦うのであろうと考えさせられる詩である。

大嶋一恵「長生きのご褒美―平和な日々を」

日本では戦争はしないということが守られてきた戦後の日々を伝えていかなければと強い思いが込められている。

浮橋透徹「発情期」

自由とは何かと考えさせられる詩であり及び孤独とはを考えさせられる詩である。変化の激しい社会において行動することで解決することがあるかもしれないと考える詩。

審議の結果、委員全員一致で次のように決定した。

川越文芸賞　小野浩

川越文芸準賞　荻座利守

川越文芸準賞　中山正夫

社会の激化の中で、詩作を長期継続することにより自己の内部を深く洞察する作品が多くみられたのは収獲である。

詩の編集を終えて

本号の投稿作品は十八名である。前号と同数作品ではあるが、二十代と三十代の作品が見られなかったが十代の作品応募があった。どの文芸においても同様であるが持続することで書法の上達となるのである。

大和友子「春の雪」　美しい風景描写に音楽が響きわたる三月の雛祭りは女性達の希求の日常であり明かるく豊かな情感の贈り物を受けとれる詩である。

あいだ澄「秋冬春夏」　日本の四季の変化を優しい眼差しでとらえる心が自然の観察力の強度をささえており人間関係の親密さが漂よい健やかさが増加する詩である。

青柳謹一「夫婦越え」　長年歩いてきた風景は山あり谷あり峠ありで想い出も多くあり二人で歩く道は一人で歩く道とは同様ではなく空気さえ清々しいのである。丁寧な言葉が歩いてきた道程の確かさを伝えている詩である。

伊藤彰一「自動販売機」　日常における見慣れた風景の変化をユーモアのある言葉を知的センスのある俳句との対比で楽しく読める詩となっている。

平井正一「竹」　哲学の小径を歩いてきた作者の懐しさが竹の伸びる竹林で激しい時代を歩いてきた作者ならではの青空はいっそう澄み渡っていると詩が語っている。

竹内京子「言葉」　私達は言葉で伝達している人間であることを確認させられ作者は心優しく友を思う言葉で伝えることのできる信頼度のある言葉を発している詩である。

中島久美「家族の未来」　家族には色々な呼び名があるのだ。名前で呼ぶものだと思っていたが、それぞれの親しみ深い愛しい呼び名でいるといいのである。

中島幸男「花のように」　人生論のような書きだしともいえるが、現代において最も希求している意識といえるのである。その花たちも台風の多い年で苦心して咲いているように思えるが花の香りに優しく癒しのある日々である。

中島貴「かっこいい女」　小説のような書きだしで日常の風景から非日常への移行すると思えば作者の理想とする描写へと導びかれるような詩ともいえよう。

曲山茂「孫達」　このような家族の風景が日常的に見られるのは作者にとって幸運なできごとであろう。すでに、日本の日常では珍しいが率直な文体で詩にしている。

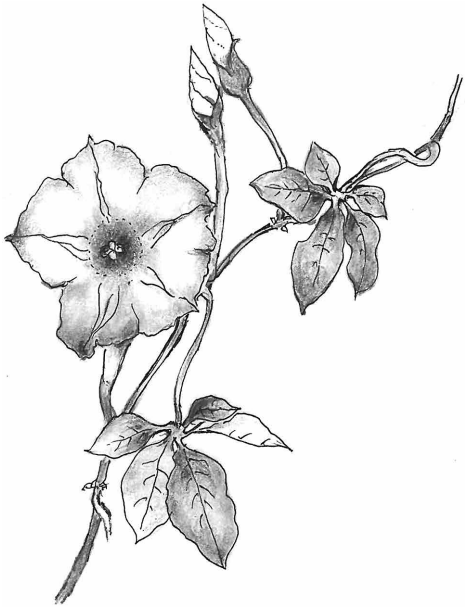
酒井真結子「おとしもの」　自然の豊かさのなかでやさしい音がやさしい言葉を伝えてくるのである。十代の詩は童話的な要素もあり気持がやさしくなる詩である。

志村奏「おかえり」　交感する心情によって呼び名が変化するのである。呼ぶことのできる人たちの幸福感が丁寧な言葉の選びと風景の優しさの中でより心情的に深度が増加し親頼あふれる詩になっているのである。

本年は変化の激しい社会状況であったが冷静に言葉に向き合う姿勢が感じられる作品が多くみられた。

（天野英　曲山浩　鈴木東海子）

短　歌



川越文芸賞

大島秀子

ラーゲリで父が作りて使いたる匙残
りおり何を食みしか

川越文芸賞準賞

齊藤洋子

ふりむけば遥か遠くに立ち竦む子は
抗えり菜の花の道

鳴原音羽

歯磨きはいちごあじからミント味た
だ僕だけの成人式だ

青木　潤

公園にゲートボールするシニアらのカラフルな服新緑に映ゆ

突然の姪の訃報に狼狽えて同じ質問何度もしたり

浅見章恵

事故の後十と二年生きし孫の顔の幼なし十六のまま

悲しみの向こう側にはパラダイスそう信じつつ我は生きなん

荒木秀子

思い出す「介護はあなたも行く道」と母看る我に言われし言葉

ＡＩの標的は人戦争がゲームのごとく行われるとは

飯野喜代子

ほのかなる菖蒲の香りに遠き日の母なつかしみ湯に浸りおり

木洩れ日の森に吊らるるハンモック今日は木の葉と小鳥が乗れり

石澤昌子

気をつけて歩くつもりが一瞬のゆるみありしか転びてしまう

踏切で転んだ我を助けくれる見知らぬ人に感謝溢れる

今澤カヅ子

養生とは季節に即し暮らすことと思えど季節に振り回される

甘酒を夏の飲み物と教えられ飲めばまことにのど越しよろし

岩澤邦雄

独居者に熱中症は恐ろしや娘の住まふ千葉に
静養
御料（ごりょう）など十三の村合併富里（とみさと）にかつて牧場水（すい）
瓜（くわ）のまちに

牛田すみ

雪降りてポストへ手紙をぬらさぬように小脇
にはさみて背を丸め行く
衣更着と言うに予報は夏日とは時候のあいさ
つ書くに戸惑う

遠藤洋

いい時間すごして居ると子に言わる夫と吾と
の大惚けぐらし
とてもいま惚けてなんぞは居られない寝た切
り夫と二人のくらし

大島秀子

母さんと声を掛けたき人が居る玉堂描く「彩
雨」の中に
ラーゲリで父が作りて使いたる匙残りおり何
を食みしか

注　ラーゲリ…ソビエト連邦の強制収容所

大野京子

米寿来し女性の役目歩み来て身をすりこぎに
し今日も終りぬ
嫁ぎたる時に持ちこし文机に座して人生振り
返り見る

小名木たか子

はて何を取りに来たかと立ち止まること多々
ありて老を認めむ
もの忘れ頻繁なるを子に言へば「俺もそうだ
よ」さらり流さる

金子　芙美子

ふんわりとねむの花咲く六月の風はこび来ぬ
遠き日の夢
風の中で誰かが歌っているようなとぎれとぎれの淡き思い出

叶　玲子

よろこびも憂ひも淡き卒寿にていかに生きんかこれからの時
初曾孫迎へて新年の卓かこむ老の愁ひの消ゆるひととき

唐沢　順子

すべき事数多あるけどやる気なし我は窓辺で居眠りており
友の娘は幼子二人残しままガンと闘い二年で逝きぬ

北澤　高子

小三の吾は母親にうながされ正座して聞く玉音放送
その夜から電燈おおう黒布をはずして部屋は明明となり

倉持　美香

噴水に架かった虹を渡ろうとびしょ濡れになる少女の姿
秋の夜金木犀の香を君に怖い思いをしませんように

黒須　恵

三歳の孫の直球ストライク「ばあばのオッパイ下がってるねえ」
ひとり待つ母の手術の長き刻スマホ開いて閉じては開く

小出い子

鎮魂の花火にも似てアガパンサス咲きゐる庭
に友を偲べり
生命(いのち)ありしものの哀しさ炎昼の道に十匹の蚯(みみず)
蚓干からぶ

古牧ゆき

リモートの画面の子らの声遠くトンチンカン
に苦笑いする
七人の曾孫の名前を順番にリハビリ替わりに
声出して言う

小峯綾子

背負ふものなくなりし今見上ぐれば弥勒菩薩
は笑み返さるる
気がつけば二時を廻れり京の夜友と語れり日
々の思ひを

齋藤悦子

甘酒のふつふつ熱き茶碗持ち今年の手帳読み
返す夜
絵馬に書く願いがもう一つあるという七五三
の孫遙かな未来

齊藤隆子

盛りなる藤の花房みごとなり木陰に憩ひその
香味はふ
姿見に腰を曲げたるわが姿出かける前に背筋
をのばす

齊藤洋子

ふりむけば遥か遠くに立ち竦む子は抗えり菜
の花の道
マスネーの『悲歌(エレジー)』聴きつつ久々にチェロの
音色に心ゆるぶも

佐々木　美千代

陽に褪せし六地蔵の帽子を新調す真っ赤な帽
子冬陽に映ゆる
冬枯れの田を耕作のトラクターエンジンの音
畔道で聞く

里村　広美

スカーフを友に贈れば首に巻き施設の寂しさ
紛らわし生く
園児らのピンクの帽子可愛いくてさくらの下
の会話聞きいる

佐野　節子

息子の押せる車椅子にて梅林へ老木咲きいて
元気をもらう
脳トレに「寿限無寿限無」を覚えんとリズム
とりつつ書きつらねゆく

鳴原　音羽

歯磨きはいちごあじからミント味ただ僕だけ
の成人式だ
思い出の少女時代に置いてきたツインテール
と白ワンピース

篠崎　より子

百合の花に雑草添えて活けたればそれぞれ個
として主張をなせり
ミサイルの発射ニュースを聞きながら草抜く
手止め上空仰ぐ

柴田　恵子

仕舞いたる冬物の中のセーターをまた取り出
せり花冷えの朝
ささやかな夢ふたつみつ裡に秘めひたすら生
きて傘寿に至る

曽根田　恵美子

病得てもはやこれ迄と退職す職歴五十年自ら
に閉づ
食欲のどうにも湧かず五キロ痩せ足裏までも
しわぶみ衰ふ

高見沢　登美子

空爆に荒れたる遠き国思うこの穏かな冬晴れ
の日に
公害に戦に荒れしこの地球労る如く冬陽かが
やく

１０４ｈｅｒｏ

夏過ぎて軽き風吹く夕暮れに向日葵ひとつほ
とと落ちたり
半袖の裾から滑り込んできた夏の終わりを告
げる涼風

中　川　俊　子

湧きあがる想いのありてヴェルディの「黄金
の翼」音量を上ぐ
朝まだき枕に聞こゆうぐいすのささ鳴き清か
雨あがりしか

長　澤　八千代

補聴器を耳の杖とし初夏の朝聴くなり鳥の
さえずり
届きたる友の新米すぐに炊き作業の労苦思い
味わう

中　島　勝　子

枯れて散る花のおわりは老いてゆく人思わせ
てまことはかなし
初夏の陽に干したる布団あたたかく今宵一夜
の眠りもうれし

中　添　三代子

ライカにて我を写せし叔父の手よ今は組まれて六文銭の上
出発の合図は野鳥（とり）の「シュパシュパ」で一年生は跳ねて登校す

野　原　喜代子

いそがしく過ぎしとし月何事もなき事われは幸せと思う
この春にたおれてきづく無理してる米寿までは散りたくないの

馬　場　成　子

こごまりて足拭きやれば病む夫は我が白髪（はくはつ）をそっと撫でたり
「ごめんね」と空のベッドに涙ぐむ夫の特養入所日の夜

福　田　智江子

手が届きそうな山並に囲まれて長閑（のどか）に暮らす
小浜の人ら
春の日に若狭の海の船上に酒井の殿の思いめぐらす

福　田　ふみ子

スーパーで二段重ねのカート押す親となりたる男孫に出会う
立ち止まりほのかなる香に仰ぎたり秋を知らせる木犀いずこ

藤　枝　杏　里

缶ジュース飲みきれないという君が指で弾いた日のしたたり
漫喫で明日の夢を語り合う「主演女優は君だといいね」

（注　漫喫…漫画喫茶店の意）

程島萬喜

甲高き百舌の鳴く声ききながら今朝の冷込み
被災地想う
よもぎ入れ孫と一緒に杵をもち搗きあげた草餅亡妻に供える

町田あや子

チューリップ世話する人に花摘まれ残りし茎
と葉すらり空指す
やぐら跡こわごわ立ちしCGは江戸時代の富
士見櫓の優美

溝呂木君子

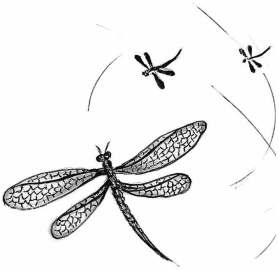
靖国へコロナをおして遺族会三年ぶりに正式
参拝
義父に逢ううれしさ胸にバスで行く遺族の仲
間と靖国参り

宮崎朝子

結婚し六十五年と米寿にてピンクの大きな胡
蝶蘭貰う
みどり児を胸に抱けばひい孫のじっと見つめ
る柔きまなざし

山田厚子

桜散る右岸と左岸寄り合ひて新河岸川に花筏
生す
賑はひし屋台たたまる花の寺カラス鳴く声ば
かり響かふ



川越文芸賞の選考にあたって　短歌の部

「文芸川越」第四十五号につきましては、川越文芸賞一首、準賞二首をもって表彰されることになりました。

今回も短歌の応募作品九十四首の中からこれらの賞を選することになり、短歌部門の編集委員三名がこの任にあたりました。

選考方法は、従来どおり全作品の中から各自が候補作品を持ち寄り、会議を重ね、一首ずつ丁寧に検討し、絞って最終的に各賞を決定させて頂きました。

以下、選考にあたっての合同評を記します。

「川越文芸賞」

ラーゲリで父が作りて使いたる匙残りおり何を食みしか

大島　秀子

父親がラーゲリ（シベリアの強制収容所）で自から作って使っていたという匙、それには色々の思いがあり、過酷な想像を絶する生活を強いられていた父の人生を思う時、作者の胸に去来する大きな大きな悲しみ、理不尽さ、諸々の思いが読みとれる心打たれる作品である。残すべき歌である。

「川越文芸賞準賞」

ふりむけば遥か遠くに立ち竦む子は抗えり菜の花の道

齊藤　洋子

美しい菜の花の道、振り向けば何かわけあってか立ち竦む子、そして抗う。複雑な親心がうかがえる。意味深い一首である。美しく咲いた菜の花の中故に、立ち竦む子の悲しさ、親としての作者の気持がより鮮明に表現された一首である。

歯磨きはいちごあじからミント味ただ僕だけの成人式だ

鳴原（しゃはら）　音羽（おとは）

いつも使用していた歯磨きをお子様用のいちご味から少し辛いミント味に変えた。ちょっとした挑戦だ。それを作者は成人式と言い切る。育ち行く若さと自我が眩しい。

短歌の編集を終えて

「文芸川越」第四十五号の編集を終えました。本年度の短歌部門への投稿数は四七名、昨年に比べ微増いたしました。高齢者の投稿が圧倒的に多い中、高校生の方の作品が総じて良い作品であったと思います。

文芸賞・準文芸賞以外の作品の中から優れた作品を次に記します。

○はて何を取りに来たかと立ち止まること多々ありて老を認めむ　小名木　たか子

○ふんわりとねむの花咲く六月の風はこび来ぬ遠き日の夢　金子　芙美子

○よろこびも憂ひも淡き卒寿にていかに生きんかこれからの時　叶　玲子

○噴水に架かった虹を渡ろうとびしょ濡れになる小女の姿　倉持　美香

○生命ありしものの哀しさ炎昼の道に十匹の蚯蚓（みみず）干からぶ　小出　い子

○半袖の裾から滑り込んできた夏の終わりを告げる涼風　104hero

○補聴器を耳の杖とし初夏の朝（あした）聴くなり鳥のさえずり　長澤　八千代

○こごまりて足拭きやれば病む夫は我が白髪をそっと撫でたり　馬場　成子

○漫喫で明日の夢を語り合う「主演女優は君だといいね」（注　漫喫…漫画喫茶店の意）　藤枝　杏里

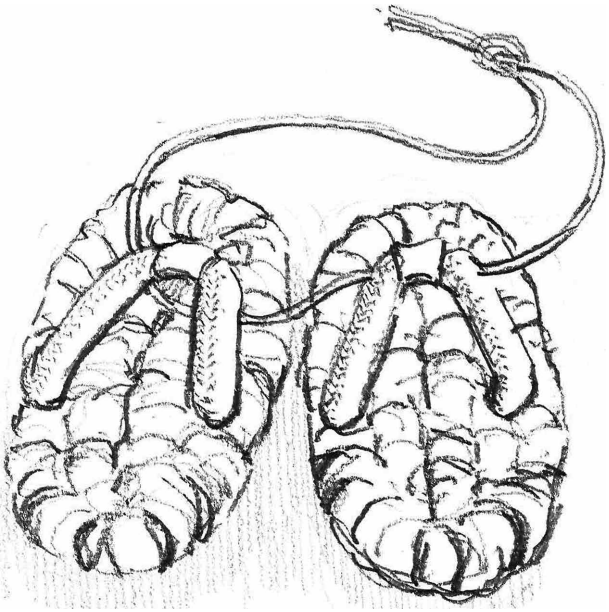
○甲高き百舌の鳴く声ききながら今朝の冷込み被災地想う　程島　萬喜

○桜散る右岸と左岸寄り合ひて新河岸川に花筏生す　山田　厚子

その他にも良い作品がありましたが、紙面の都合にて掲載できないのが残念です。今回感じたのは若い人達の新らしい感覚の短歌が目を引きました。又、人生を重ねたからこその深く重い短歌、どちらも胸を打たれました。

（荒川・小峯・曽根田）

随　筆



川越文芸賞

旅の僧

佐藤智子

故郷の友人から十何年振りの電話を受けた。「きよみちゃん?」との呼びかけに一瞬、えっと思うも「そうよ、くみちゃんでしょう?」と事も無げに会話は弾んでいった。

長らく耳にしなかった名前で呼ばれて、少し慌てたけれど子供時代ずっと馴染んでいた私の呼名である。漢字二文字で書くときちんと読んで貰えない不都合はあったけれど、三文字の読み仮名は、音(おん)の滑りが心地良かった。

久しく生活の中に表れてこなくなった思い出の中の名前で、戸籍上の名前とは別のものである。

思い返せば、私が小学二年生の時、両親と弟二人と私の五人家族は、本名とは異なる名前と出会う事になった。

古びた法衣を纏(まと)った旅の僧侶らしき人を、我家に泊めたのがきっかけで、改名という展開になっていったのである。新しい名前に日常的に馴れていくようにと、その僧侶から諭され早速、担任の先生に伝える事となった。

先生はクラスのみんなに「これからは、この名前を使われますから、そのように呼んであげましょうね」と言って、黒板に私の新しい名前を漢字で「旭美」と書き、その横に「きよみ」と仮名を振って下さったのもしっかり覚えている。心細かったけれど随分スムーズに、その名前は私の周りに浸透し馴染んでいってくれた。

小学校卒業を迎える頃、熱血教師で生徒にも人気の担任の先生が、我家に駆けこんでいらした。「今、校長と遣り合ってきました。担任の僕が受け持ちの生徒の名前を間違うはずがないと、そうですよね！下の名前は『きよみ』さんで正しいですよね！校長に啖呵を切ってきました」と。

卒業証書の名前で悶着があったようだ。校長の手許には役所からの書類があり、私の戸籍上の名前が記載されていたわけである。父と母はこちらの手落ちを説明し、先生にどんなに頭を下げたことか——。父はささやかに、先生がお好きなお酒まで勧めて、保護者としての失態を終わらせるつもりのようにも見えた。

このようなことで、何とか遣り過ごせた時代であった。通称を使うのであれば、学年が替わる度、担任にきちんと伝えるのが筋であるが、段々通称が当然のようになっていったからだろうか、親もその義務を疎かにしてしまったようだ。今では考えられない事である。

大好きな先生に迷惑をかけてしまい、落ち込んだまま迎えた卒業式であった。戸籍名が書かれた卒業証書を、校長先生から受け取りながら気持は、ウツウツとしていた。

講堂での式の後、教室では先生との別れを惜しみ、みんなシクシク泣いている。クラス全体のその高揚感は、私から〝名前事件〟をすっかり忘れさせてくれる程、特別な雰囲気に充ちていた。先生もちょっと気障に、情感を込めて、〝さようなら〟と発するものだから、女子はみんな号泣してしまった。忘れ難い思い出である。

それ以後中学校からは、提出物、書き物、テスト等々は全て戸籍名を書くよう徹底したけれど、日常では相変わらず今迄の呼名が罷(まか)り通っていた。

私達家族の名前を替える方向に巻き込んだ僧侶とおぼしき人物には、子供心にも本当にお坊さんだろうかとずっと疑問を持っていた。

分厚い書物や、辞書らしき本を何冊も古い風呂敷に包んで出し入れし、丁寧にページを捲(めく)っていたのも記憶にある。

字画が悪いとか、姓名判断ではどうのこうのと、難かしそうな講釈をした後、夫々に決めた名前を仰仰しく指し示してきたのである。

子供三人の名前は特に読みにくく、当て字を承知で読ませているような漢字であった。五人分改名の、かなりの金額を父がその人に渡すのも、私はしかと見ていた。

改名は泊めてあげたお礼だと勝手に思っていた私は不快に感じていたが、父は「あのお金はお布施なんだよ」と説明してくれた。「ふぅん」と私は小さく頷くしかなかった。

突如現れ、消えていった旅の僧は、子供の記憶の中にも時々思い起こされる事件であった。あのお坊さんは法衣のままで、山道や野原を歩きながら旅を続けているのだろうか、ちゃんと食事をしているのだろうか、死なないでいるのだろうか——、ある種の畏れにも似た気持も含めて気になる事であった。

祖母に連れられて行くお寺のお坊さんと違うのもわかり子供心に人の暮らしていく形は色々あるんだと知った最初でもあった。

雅名、芸名、法名、ペンネーム等々は、自分を表現する名前として、趣味、仕事等色んな分野の中で選ばれて多様

に使われているが、この場合はあくまで本名にプラスした価値として、その人を語る名前になっているといえる。

本名に替わって通称が馴染んでいくには、かなりの時間と思い入れが必要である。知人のご夫婦から改名の折には、毎日、ノートに百回名前を書かねばならないので苦労も多いと聞いて、新しい名前を積極的に呼びかけてあげるよう私も心がけたことである。

弟二人と私の改名は、呼名としてはかなり活躍してくれたけれど、世の中の制約の中では戸籍名に勝てるはずもなく、年月が経ってみると、今や幻の様な感覚となって、記憶の底に留まっているように感じられる。

山口県の私の育った地域に近い出身という事もあって、自由律の俳人、種田山頭火に強烈に魅かれた時期があった。

出家して漂泊と隠遁の旅を繰り返したその生き方は、想像を超えるもので、心にずしんと重く乗ってきた。

「だまって今日の草鞋穿く」

「いただいて足りて一人の箸をおく」

「雲がいそいでよい月にする」

そのままの言葉のようで、深い何かが伝わってくる。歩くことが生きることだったのだろうと思うと、その真剣さはいかほどのものであったろうかと思うばかりである。

改名の際の、あの旅の僧が脳裏を掠める時、法衣姿で旅を続ける等、山頭火を真似ているようで、以前は不愉快極まりなく腹立たしくも感じていたが、謎めいたその僧も、自分の目指す学びを積み重ね、自然の中に身を置き、真摯に生きる意味と向き合おうとした人だったかもしれないと、この頃はそうも思えてくるのである。

「雪がふるふる雪見てをれば」は、私が十代の頃好きだった山頭火の句である。古希を過ぎた頃から、自分を振り返り生きていく事の意味に思いを馳せていくと、改めて山頭火の句に引き寄せられるように気持が動いていった。

「うれしいこともかなしいことも草しげる」は、生きていくことの深くて大きな意味を、スウッと受け入れていけるように思えて、私の心に沁みる句となっている。

改名の場面を作り上げてくれた旅の僧のことは、薄らいでいく古い記憶の中からも、今や消えていきそうである。

かつての家族五人で、賑々しく改名した出来事は、その後の多少のハプニングも含めて、かけがえのない思い出として、ほっこりと心の奥に残ってくれている。

川越文芸賞準賞

幸せな出会い

豊田　知枝子

薄ぼんやり霞がかった空に時折、陽射しが目に眩しい三月初め、友人二人と喜多院へお墓参りをした。共通の友人である紘子さんが亡くなって早や三年、春と秋のお彼岸の時期に誰言うとなくお墓参りをするようになった。

生前、年長の紘子さんを中心に栄子さん、史子さん、そして私。まるで実の姉妹のように和気あいあいと親しくお付き合いをしていた。

前日まで強風の曇り空が続いたが訪れた日はまずまずの穏やかな日和であった。これまではいつも晴天。きっと天国の紘子さんが準備してくれたのかもしれない。

やっと淋しさに慣れ、会えば皆で手際良くお墓まわりの雑草を取り除き水を替え花を供える。瞬く間に綺麗になった墓前で順番に線香を手向けると、墓碑の陰から悪戯っぽい笑顔を見せて今にも懐かしい姿を現す気がするのである。

こうして線香の匂いと立ちあがる煙の前で三人が手を合わせ無事に五回目のお墓参りを終えた……。

もう二十年以上も前になるだろうか。近所の公園の河津桜が花びらを散らし始めた頃だった。蔵の町に向けて車を走らせていると渋滞に巻き込まれ、やがてカーブに沿って進むと、斜め前方の住宅地に一際目を引く看板が見えた。

赤い衣装をまとったバレリーナがパッセのポーズ（右足を膝近くにつけ膝を曲げる動き）を決めていた。目を凝らすとスタジオの文字が。

白い木造二階建ての壁面に柔らかな陽の光が降り注ぎ、今にも目の前にバレリーナが舞い降りるような錯覚を抱く。

その頃、長い間心に引っ掛かっていることがあった。医師から母の余命宣告を打診され、咄嗟に「本人には伝えないで」と頼んでしまう。

実は期限付きの母の命を受け入れ難い娘の想いであって、親といっても一個人であると認識したのはしばらく経ってから。事実を知らされないまま逝った母。本当は望んでいなかったのではないか。ずっと気持を切り替えられずにいた。

止まっていた時間を現実の時間に戻さなくてはと考えた矢先に出会った教室の看板であった。最初は中年の身で躊躇したが限りある命を身近に経験してからは後悔しない日々を送りたいと願ったのも事実。深く考えもせずスタジオを訪れたのは自然の成り行きだったかもしれない。

はじめてスタジオを見学すると映画『リトルダンサー』で見た光景が広がっている。正面を挟んで両側からぐるりと鏡が張り巡らされ、反対側には木製のバーが取り付けられ、まるで非日常の世界。しかし間近で見る優雅な動きに圧倒され直ぐに逃げるようにスタジオを後にした。

ところが三日経つとまたしても看板のバレリーナの姿が瞼に浮かんでくる。そして思った。

「敢て無理なことに挑戦すれば早く気持を立て直せるのではないだろうか」。勇気を出して再びスタジオを訪れたのである。

外と隔絶した建物の階段の踊り場からスタジオ全体を眺めると、天井のシーリングファンの羽を回す小刻みな音だけが聞こえる。すると突然バレエ曲の繊細で軽やかな音楽が流れ空気が一変。緊張した面持ちの生徒が一人また一人と対角線上に回転を始め次々と眼下に近づいてくる。

次の瞬間三人目の生徒に視線が釘付けになった。たった一人だけ口元に柔和な笑みを浮かべ時々はにかんだ表情を見せくるくる回って見事にポーズを決めたのである。最後まで笑顔で。久し振りに心を揺さぶられる出来事だった。

「少し年長だろうか」憧れと羨望が入り混じった感情が芽生え「今からでも決して遅くはないよ」と背中を押された気がした。

「あの女性のように楽しそうに踊ってこれからの人生は笑って年を重ねたい」大きな勇気を貰うと同時に目標を持つきっかけになった。

その日を境に呆気なく迷いは消え、仕事のない日に通い始めたのである。スタジオ中に響く音楽に合わせ体を動かすのは唯一無心になれ、加えて体の柔軟性と足の筋力が鍛えられた。気づくといつの間にか自己肯定感が高まって前向きになれた自分が居る。体を動かすことで精神と体のバランスが取れたのではないだろうか。

回転の女性、紘子さんは教室のベテランで常にバーの先頭に立つ憧れの存在。新人はただ人の動きをそのまま真似て間違っているのさえ気づかない。その上肝心の振付や順番を覚えられず悪戦苦闘を繰り返すばかり、頭で理解しよ

うとすると早さに体が追いつかず揚げくの果てには焦燥感に駆られ無謀な挑戦を始めたと悔やむ有様。

ある日、紘子さんから帰宅後に必ず復習していることを聞き、人一倍努力をしていたのだと知るが、それから数年経ってもなかなか満足するに至らなかった。しかし不思議なことに一度も辞めたいと思わない。やがて十年が過ぎて、ようやく習う面白さに目覚め、生活に溶け込んで次第にスタジオが居心地の良い場所になっていった。

当時、元水泳のコーチだった紘子さんは坂戸で車椅子利用者の雅恵さんと視覚障害を持つ龍ちゃんに水泳を指導する活動をしていた。誰に対しても面倒見が良く、ついて行けば必ず正しい方へ導いてくれるバイタリティー溢れる人であった。

誘われて川越音楽（労音のような会）に入ると介助のお手伝いをする機会に恵まれる。コンサート当日は車椅子を積み坂戸から車を運転して川越へ来た雅恵さん。特にパソコンが得意という。一方龍ちゃんはマラソンのランナーで国内外の大会に出場。

ある日の午後メールが届く、「坂戸から武蔵嵐山まで夫と走ってランチを食べています。今からオーストラリア・ゴールドコースト大会で八十代出場を目指してます」。嵐山まで一体どれくらいの距離を走ったのだろう。二人の前向きな姿と弛まない努力に励まされ、コンサート終演後に紘子さんとともに二人を見送ると、サポート出来た満足感と感謝される喜びを感じたのである。手早くお世話する紘子さんの姿は理想のありたい姿だった。

しかし満ち足りた日々も長く続かず、はじめて同じ舞台に立って二ヶ月ほど過ぎたある日、予想だにしなかったことを紘子さんから打ち明けられる。娘さんのオーストラリアでの挙式を終え帰国後に体調が悪化。再び母の時と同じ経験をしてしまった。

ところが紘子さんは気丈であった。自ら最善の方法を探し二年余り頑張り、パンデミックで日常が失なわれていった頃にひっそりと旅立った。

亡くなる数ヶ月前のこと。「知枝子さんリサイクルショップを教えてくれる?」一瞬変だなぁと思う。物が捨てられない人と知っていたから。後にはっとした。あの時既に生前整理を済ませ、人生の幕を下ろそうとしていたのだと。

あれから早や三年。後輩の視線を背にバーの先頭に立つ私がいる。ずっと前に目にした光景そのままに音楽に合わせ笑顔でピケターン（回転）を始めるが今や骨折を心配する年に。もし出会いがなかったらここまで続けられただろうか。勇気を貰った紘子さんの場所に立つ限りいつまでも前向きでいられる気がするのである。

この先も紘子さんから学んだ生き方を心の糧にして生きていくに違いない。

川越文芸賞準賞

言葉の意味が鮮やかに立ち上がる時

橋本　美恵子

新しい門出の季節の春の日、新幹線の新大阪駅にて。前の列車が出発して誰もいないホームで、目だけで泣いて向こうから歩いてくるマスク姿の高校生らしき男の子に出くわしました。

この場面で高校三年生の春に父の転勤で大阪から東京に引越した後、家族ぐるみで親しかったクラスの男の子に「どうしても駅に見送りに行けなかった」と言われた事を突然思いだしたのです。

当時はさりげなく聞いた言葉が、半世紀を経て違う色合いを帯びて浮かび、思いをのせた言葉が受け取る人の時間の流れのなかで、唐突に意味合いを変える事を知りました。

幼い頃の買物ごっこは「くださいな」で始まり、のどかな日だまりの中、遊びの光景がありました。その一方、戦後の暗い世相をうつして、唯一の団欒の夜のラジオで、復員便りとして個人の消息を尋ねる番組がありました。

戦後の混乱が続いているなかで、ラジオ放送で家族の行方を捜す人達がまだたくさんいた時代。「尋ね人の時間です」の声で始まり次々と地域と名前を読みあげていくアナウンサーの声は、重たい空気をまとっていた記憶があります。

明治生まれの祖母は、幼い私と歩く時、「青葉茂れる桜井の　里のわたりの夕まぐれ」（「桜井の訣別」）と歌っていました。

当時はなんだろうと意味がわからなかったのですが、今歌詞を見ると楠木正成（まさしげ）・正行（まさつら）父子の哀切な別れの歌で、何

百年も前の武将の最後に感情移入する時代だったわけです。
幼い頃の記憶のなかの声は、その後の年月で再び出くわす事もなく、モノクロの色合いの彼方です。

十年程前に、父子家庭になった息子の依頼で孫達が暮らしていた福山市（広島県）へ行く事になりました。見知らぬ「川越ばあちゃん」の登場に「いやだ」をくりかえす孫息子。どうしたものかと思案をめぐらす日々でした。
新一年生の春、玄関先の通学班で「学校へ行きたくない」と上級生達を困らせていた孫に思いあぐねて、近くに住む義娘の母の「福山ばあちゃん」に来てもらいました。通学路の横を流れる用水路に「ここに飛び込んでやる」と言う孫。しばし宥めていたばあちゃんから、「そうだ帰りにもう一度考えようか」のひとこと。病んだ娘の幼子をやさしく慈しんだ日々がうかがわれた瞬間でした。
その日の午後、帰って来た孫の「ただいま」の声は、朝の大騒ぎがなかったようなさりげなさでした。

福山での一年後、息子の転勤で大阪での生活に移行すると、人との距離が近いと感じる事がよくあります。
スーパーの店頭で春の泥つき筍を見ていると、同世代と覚しきおじいさんが、「おいしそうやけど、買うたらなんぎなもん買うてきてと言われるしなあ」と嘆いています。そこでの私の合いの手は、「奥さん孝行しいや！」です。

筍を持ってレジで並んでいると、佃煮のパックを手に、「これにしといたわ」と私に話しかける先ほどのおじいさん。私のまったく知らない人です。
川越の友達には、「すっかり〝大阪のおばちゃん〟になっちゃったの？」と言われるのですが、大阪では見知らぬ人との言葉のやりとりを楽しんでいる日々でもあります。

そして今の私の大きな楽しみは、万葉の言葉に秘められた大昔の人のメッセージに、あれこれ思いをめぐらせるひとときです。
古代の世界では「言霊」といって、言葉が大きな力を宿すと信じられていました。
万葉集に、込められた寓意が謎の「むささびは木末求むとあしひきの山の猟夫にあひにけるかも」（万葉集巻三・二六七）という志貴皇子の歌があります。以前は、近江朝の皇子が政変後の天武天皇の飛鳥朝で、自身の不遇を誰かに託った歌だと思っていました。
しかし様々な資料からは、七世紀後半、壬申の乱の後の天武朝二十年あまりは、中国や朝鮮半島の先進文化圏の中で東アジアのダイナミズムを共有謳歌した最後の時代だったようなのです。そんななかで、柿本人麻呂の雄渾な万葉集最長の長歌がある訳です。
天武朝の太政大臣高市皇子は、壬申の乱の勝ち戦では十九才の総大将でした。遠く突厥やトルファンの騎馬民族に

源流を持つ、唐や百済、新羅に流れる教養の中で育ち、野山を疾駆して戦う若い皇子を真近にして、志貴皇子の歌も、躍動する時代の遊び心に満ちた歌だったのではと思うようになりました。

律令の国家体制が確立した次の奈良朝時代には、万葉集の歌も国風の優美さと繊細さを増していき、黒馬に乗ってやって来る人を待つ相聞歌で、馬が貴族の日常の乗りものになった事を知るのです。

最近の孫息子との会話では、「それって汎用性はあるの？」と言う孫に驚いて、「中学生ってそんな難しい言葉使うんだ」と私が返します。すると、「もしかして馬鹿にしてる？」と孫。

私が中学生だった遠い昔、日常会話に「汎用性」の言葉はありませんでした。コンピューター用語が新しい世界を開いて、人々の日常も早いスピードで変化していきます。

若い頃、世界を知る事の大半は書物の情報からでした。でも人は、本を書いた人の思いから遠く離れ、自分の思いたい文脈で理解していて、同じ本の何回目かの読書で、今まで気づかなかった言葉の世界が鮮明な色で立ち上がる瞬間を経験したりします。

自身の内面に拘泥しがちな読書体験の限界を思う一方で、人は外に出て、たくさんの言葉を交わすなかで、等身大の自分を知り、他者との関係性を育て、生きる豊かさを獲得していきます。

最近の私の心境は、激しい言葉のやりとりは遠く、人との距離も遠くなっていく感覚のなかにいます。

抱えるくらい大きな幹周りの巨木を撫で、樹木と会話している気分の、世間離れを楽しむような、淡く明るい色合いの日々を過ごしているのです。

鶯が歌う

村上　トシ子

高齢者のみならず誰もが疲れやすくなったからと、何もせずに家に閉じこもりがちだと、「フレイル」現象なるものが起こるという。つまりは、体が動かなくなり寝たっきりになってしまうというのである。それは当然と言えば当然なことと言えよう。

「リフレこもれび」、川越市にある高齢者のための支援センターである。体力の衰えを日々実感している私は出来るだけ元気な時間を長くしようと思い、三年ほど前から週一回火曜日に通っている。入る条件としては、要支援一以上の認定がなされなければならない。ちなみに要介護五まであり、その内容は私自身よくわからないが、膝の痛みが、要支援一に認定されて通うのを許された。

主に老人向けに考案された体操を中心に行う。指導者のもと、前半と後半に分かれて行うのだが、その合間に折り紙、おしゃべり、早口言葉、数式、うた等々、頭の体操、つまりは認知症予防の一環になるとの主旨から行う。これらは私の意図するものにあらず、あまり気乗りがしないが、施設の方針には逆らわないのが、基本的な私のスタンスである。

昨年（二〇二三年）の三月の初めの春まだ浅いころだったと思う。いつもの体操の前半を終えて、職員がいれてくれた温かいお茶に喉をうるおした。ホットするひと時である。それから間もなく誰かが唱歌『ふるさと』を歌いだした。それに合わせて他の会員もうたいだした。

うさぎ追いしかの山
小鮒釣りしかの川

までうたった時だった。突然、「ホーホケキョ」と支援センターの庭にある高木のあたりから鶯の鳴く声がした。それは歌っている最中の私たちにも、はっきりと聞こえた。私たちは一瞬歌うのを止めた。すると鶯も鳴くのを止めるのである。

皆窓辺により、木を仰ぎその姿を探すもその姿はない。そして、私たちが続きの、

忘れ難きふるさと

と歌いだすとまた、「ホーホケキョ」と鳴く。最初は偶然だろうと思っていた。が、試しに二番、三番を歌い、更に他の歌『朧月夜』に代わっても、同じように、「ホーホケキョ」と一緒に鳴く。

それは鳴くというよりむしろ歌うと言った方が当たっているかも知れない。私たちは、最初驚いたが、やがて可笑しくなり笑い出した。そして勝手に推測した。これは多分鶯が私たちと、競い合って歌い、自分の歌唱力を誇示して

いるのではと。
そう思うとなんだかとても楽しくなってきた。
ところで、初鳴日（しょめいび）なる日が在って、鶯、ひばり、ひぐらしなどの鳥や昆虫などが初めて鳴く日を言い、季節の代わりを知る手がかりにされると言う。
鶯も初鳴日の鳴き声は、ぎこちなく、下手でおぼつかないらしいが、どんどん鳴くことを重ねる度に上手くなってゆくらしい。鶯はそのことを意識しているのだろうか？とても興味深いことで、本当にそうなら歌手を目指す人と変わらないなーと半ば冗談、半ば本気で思ってしまう。
それからすると、私たちの歌う歌と競うように鳴いていたあの鶯は、初鳴日から何日たっていたんだろう。残念ながら初鳴日の鳴き声を知らずに来た（あるいは聞きそびれた）私の素朴な疑問である。更にあの鶯は私たちと競い合いたかったのだろうか？それとも、ただ単におのが喉を鍛えたかったのだろうかとも思うが、姿を見せない鶯には聞く術もない。
かなり前のことで、何年かも、季節も忘れてしまったが、鶯について、もう一つの懐かしい思い出がある。それは電車を降りて我が家へ向かう時のことである。昼すぎだったことは覚えている。
東武東上線鶴ヶ島駅が私の乗降駅である。出口は東口、西口とある。私の出口は東口、そこを出て二十分歩くと我が家につく。近道のルートを帰るのが常だったのだが、その丁度中間あたりの横丁まで来ると、やれやれ半分は来たーとほっとするのである。その中間あたりの横丁を右に回って家に向かうのだが、曲がる前の角の右側の家には車種はわからないがいつも真っ赤な車が駐車してあり、それが疲れていた眼の保養になった。
そして真ん前の家の玄関先には鳥かごがぶら下がっており、鶯が飼われていた。そこの家を右に通って帰るのだが、私の姿を見ると今まで鳴くことをしなかった籠の中の鶯が突然、「ホーホケキョ」と挨拶するように鳴くのである。そこを通る度に必ずである。健康のためと称していつも歩いて帰っていたので、何度も何度も聞いたことか。
鶯は初鳴日から鳴く練習を繰り返し、鳴く度に声が美しくなるとは前にも述べたが、私にはその違いが、さっぱり分からずに、いつも同じように聞こえるのである。もしかしたらあの籠の中の鶯は、閉じ込められて季節感がなくなり、年がら年中鳴くのだろうか。そこのところは専門家に聞きたいところである。
通る度に「ホーホケキョ」とだけ同じように
鳴く鶯よ馬鹿かお前は
と揶揄して歌に詠んで所属している短歌誌に投稿した。ボツになると思ったがこれが、掲載されたのには驚いた。
あれから何年たったのだろう。ぶら下がっていた籠も今はなく、当然あのホーホケキョの鳴き声も聞けなくなった。死んでしまったのだろう。ただ横の家の真っ赤な車がまだ

健在であい変わらず疲れた目を癒してくれるのだが。今はそこを通る度に思い出しては寂しさを募らせている。そしてあんな歌を詠んだ自分を、何と言う愛のない私と責めている。

はからずも、支援センターで聞いた鶯が、昔横丁で聞いた鶯の鳴き声を思い出させてくれた。

来年の春にはもう少しレベルアップした歌で鶯と競演しようか、例えば、中島みゆきの「糸」などで。

いつまでも残したいビオトープ

山口英次

昭和四十七年、東京大手の住宅分譲会社が住宅地造成事業を計画。二年後の昭和四十九年頃に、総数六百三十一の区画を完成させました。スマートな一戸建てが立ちならび、公園、集会所などの施設を完備したマンモス団地である。造成事業には、地元業者も参画し、大きなプロジェクトチームが出来、宣伝効果もあり、完成を待ち望む声が多くの方々から聞かれました。このビオトープはその時に作られたものです。それから半世紀以上の年月が経過しました。

むかしこの土地は沼沢の中の小さな島で、そこの老松に鶴が群れをなして巣を作った事から地名が鶴ヶ島と名付けられたと言われております。

その頃は広大な田園風景が広がり、のどかな自然豊かな地域ではなかったかと想像できます。

屋敷林に囲まれた大きな農家が点在し、今でも昔ながらの自然の風趣を伝えており、いつまでも残したい風景です。

この鶴ヶ島と言う地名は命名当初から愛用されており、地元の市の名前は鶴ヶ島市です。東武東上線の最寄り駅名も鶴ヶ島です。そして銀行の支店名も郵便局でも鶴ヶ島駅前郵便局と言った様に鶴ヶ島の地名は現在も健在です。お店の看板やのれんにも使われています。

このマンモス団地は行政区境によって鶴ヶ島市地区と川越市地区に分かれており、川越地区内の田園の中程を流れていた小川をそのまま残して作られたビオトープのようです。

ビオトープの東側が公園で境には前から雑木林があり、ほどよい日陰をつくり、形はS状に曲がった所が二箇所あり全長百メートル位の小川の流れに合わせた帯状の形です。野生の生物が息づき、自然の生態系を観察出来るように造られ、西側には水田があり境にはビオトープに沿って遊歩道が作られました。

完成と同時に川越市が管理する事になり今日に至っております。このビオトープは私の住んでいる所から歩いて五～六分のところにあり、たまに散歩帰りに立ち寄ります。

春の季節には春のビオトープがあり、夏には深緑の中に

生物が生き生きとしたビオトープです。秋、冬と、おりおりに情景が変わります。生物多様性の営みはどうなのか。必ずここに何らかの生き物がいると言う意識を持って、じっと、観察して見る事が大切です。

公園と陸続きに作られており、子ども達は公園「愛称わんぱく広場」で遊んだ後、ビオトープに入り、水辺の生物観察をしております。こども達の自然観察の出来る場所は大きく作られており、こども連れの親子を始め小学校低学年生でも安心安全に遊べるよう、「水辺の生物とふれあう広場」の看板も立っており、いままで事故もなく、安心安全なビオトープです。

四季折々の野生生物の生態系を観察出来て、こども達の評判はよく、遊びながら学べる場として利用されています。

実際の水辺の生物とふれあう事によって体験学習が出来るのです。今、こども達の持っている能力は将来無限大に広がる可能性を持っております。

子ども達の五感は成長過程で遊びの中から学び、物事の経験を通じて大きく成長するものと考えております。

このような体験を出来る場所が身近にある事が必要で、体験の繰り返しはもっと大切です。実際に植物にふれて形や大きさを目で確認し、においや自分の手や口で葉や幹や果実の味を体験してみる。この様な貴重な体験で視覚、触覚、嗅覚、味覚、聴覚が育成されるのではないでしょうか。

寒さのなかにも春の訪れの近いことが感じられる二月中旬ともなれば、遊歩道の脇に帯状に自生しているホトケノザが春早く紅紫色の唇形花を咲かせ始めます。

心が癒されます。そして三月ともなれば日増しに暖かくなり、明るい陽ざしが続き、草木も芽吹き始め色濃くし、ものみな萌え、春本番です。

二十四節気の一つ、啓蟄の頃になると冬籠もりしていた虫達が地上に出てきます。昆虫だけでなく、ワラジムシやダンゴムシなどの甲殻類、カエル、トカゲなど、さまざまな小さな生き物が活動を始めるのです。

間もなく田んぼには水が引かれ水田の準備作業が始まります。蛙たちはこの季節が来るのを待ち望んでいます。

何処からともなく鳴き声が聞こえて、一斉に大合唱が始まるのです。仲間意識の強い生き物なのか、コミュニケーションの素晴らしさには脱帽です。なぜ蛙が同時に鳴くのか、私の知恵では到底理解出来ません。自然界の摂理の深さをもっと勉強しなくてはと、教えられます。

小川の水量が多くなるとビオトープの水嵩も増え、用水路に注がれ、やがてマンモス団地内を流れる大谷川に合流します。

次世代を担う、好奇心旺盛な子ども達が感性豊かに成長するには、家庭や学校以外で自ら学べる場所が必要です。野生の生物が息ずく場所、自然の生物多様性を体験学習出来る場所。この素晴らしい自然環境を子供達の為に、いつまでも、いつまでも残したいと考えております。

わが人生に悔いなし

土屋　雪次郎

「わが人生に悔いなし」とは、今は亡き石原裕次郎さんが唄った歌のタイトルである。

人生百年といわれる時代、長い人生を生き続けたとしてもそれは「喜怒哀楽」のくり返しであろうし、波乱万丈と悔やまれる人生であったのかも知れない。

一般人が過去の人生を振り返ったとしたら、果たして「わが人生に悔いなし」と述懐できるであろうか。

裕次郎さん（以下裕ちゃんと呼ばせていただく）のファンのひとりとして、裕ちゃんのお兄さんである作家の石原慎太郎氏が書かれた『弟』という著書を紐解くと、裕ちゃんの華やかで輝かしい人生の中で、予想外の難病に苦しまれた最後の余生を語った部分が多く書かれている。

そして最後に入院していた病院のベランダにガウン姿で、見舞いに訪れた多くのファンに手を振って答えていた姿を目にして、その時の裕ちゃんの心境はどのようなものであったか、私もファンのひとりとして、誠に心の痛む思いであった。

私は裕ちゃんの俳優としてのデビュー作品であった映画、『太陽の季節』以来、多くの映画やテレビ出演を鑑賞してきたし、歌手としての裕ちゃんのファンとしても、数多くの歌を、自分の持ち歌のように唄わせていただき、今でも現役時代の裕ちゃんの身代りの如く唄い続けているひとりである。

「人生終りよければすべて良し」という諺からすれば、裕ちゃんがもっと長生きされ、俳優としてもまた歌の世界でも、華やかな人生で最後を飾って欲しかったと心から望んでおり、その時こそ裕ちゃんに「わが人生に悔いなし」と唄って欲しかったのである。それがすべてのファンの共通の願いであろう。

今はただ心より「裕ちゃんありがとう」と申しあげたい。

私は定年後妻と共に北海道旅行をしたが、その際、小樽にあった裕次郎記念館を訪れた。それは裕ちゃんの芸能生活華やかな時代を物語るもので、邸宅の応接間や愛車などそのままが展示されていたほか、半紙に書かれた書道の作品も展示されて、裕ちゃんの多才な一面を窺う事ができた。

書道教師であった私も驚く程の作品であったし、何事にも徹底した努力をする人であったと感心させられた。

この記念館を開館した際の裕ちゃんは、恐らくわが人生に悔いなしの心境であったろうと想像した。

私の妻も青春時代小樽ですごした事もあり、また私の名前三文字のうち「次郎」という二文字が同じであるのも、裕ちゃんをより親しく感じさせたようである。

残念ながら小樽の記念館も閉館になるとか。やはり時代の流れかなと淋しい心境である。

私も九十五年という長い人生を振り返えれば、波乱万丈ともいえる時期もあったが、たまたま小学校時代ＮＨＫ全国音楽コンクール小学校の部で優勝した事もあって、生涯を通じ音楽が常に心の支えになってきた。これからも残された余生、裕ちゃんの歌を唄い続けたいと念願している。

今は妻に先立たれたものの、家族共々恵まれた環境の中で自由気ままな余生をすごしており、私としては平凡ながら「わが人生に悔いなし」の心境である。

越後高田城ものがたり

石川　勉

ＪＲ信越線、高田駅の北西五キロメートルのところに、小高い山があります。名将上杉謙信の城跡です。この裾野を徳川家康は江戸幕府の直轄地としました。最初の城主は、徳川四天王の一人と言われた榊原康政です。居城は、関川と矢代川の狭間につくられましたが、康政は民衆からこよなく愛された城主でした。

高田城主二代目は、家康の六男松平忠輝です。高田の街は、東西に二分されたかたちに成り立っています。一方には、二代目が築城した現在の高田城が建っています。片方には、榊原康政が祀られている榊原神社があります。高田は、雪深いところで知られ、積雪の多い時は、ひと冬で三メートルも積もります。北国街道をはさんで、東西に別れているところにあります。東側には、忠輝が築城した現在の高田城があります。時代は紆余曲折の歴史があって、徳川の直轄地として発展しました。康政の開城以来、明治の世まで長く存続出来たのは康政の功績によるところ大です。隠居後は、群馬の館林で余生を送りました。

その後を引き継いだのが、松平忠輝です。忠輝は、川の音が気になり寝られないと、側近に苦情を言っては困らせたとの話が伝わっています。忠輝は、生まれながら文武両道に優れた才能を持っていましたが、我がままな気性が禍いして、何かと問題を起したと言われています。周りからは、家康の実子で六男という身分から黙認されていました。ここで忠輝から、新たな築城の話が出て、伊達政宗としても実の娘五郎八（いろは）姫のこともあり大変な時だったと想像されます。政宗は、考えた末に、家康に築城の件を上申しました。家康は、忠輝に承認する旨を伝え、政宗の娘も喜んだことです。人の運命はわからないもので、この数年の後に大きな事件が起きようとは思いもかけなかったことです。

高田城築城は幕命により、天下普請として、政宗を中心に上杉景勝、前田利常など外様のもと、一六一二年に築城にこぎつけています。異例の早さで、完成したのは、忠輝

のためばかりでなく、娘五郎八姫のためにもなりました。加えて佐渡金山で権勢をふるい家康にも通じていた、大久保長英に高田城主の仲人をお願いした。しかし家康が死去した事で、事態は一変しました。名君にも成り得たであろう忠輝が、生前父家康に一度も拝謁出来なかったことは残念です。せめてもの救いは、家康が大事にしていた野風の笛が生母茶阿局（ちゃあのつぼね）を通して忠輝に与えられたことでしょう。家康の心根はわかりませんが、幕府の存続の為には、必要なことだったといわれています。

つまり、忠輝夫婦は、仲睦まじく高田城で平穏に生活していましたが、家康が、大阪夏の陣の後亡くなったことで、幕府の体制も大きく変りました。家康の亡き後、将軍秀忠は、弟忠輝に蟄居を命じ、妻の五郎八姫は、仙台に帰され、忠輝は、改易後、城地没収、その後、飛騨高山から諏訪へ移り、九十二歳の長寿でこの世を去りました。高田藩、江戸幕府と共に長期政権が明治まで続いた要因は色々あります。最終的には、家康の偉大な統率力によるところが大であります。

その後、酒井家次が上野高崎より高田城に移封、すぐに家督を忠勝にゆずり四代目城主となりました。その跡を継いだのが、五代目城主松平光長その人です。光長は家光に寵愛され家光の名の一字をもらい、光長となり、光長の治世は五十七年と長きに渡り、高田への貢献は多大なものがありました。光長の治政中に開墾も進み、入城当初二十六万石程だったものが三十六万石にまで拡大しました。また、この頃、高田は大きな地震に見まわれてもいますが、城主はじめ町衆の協力によりこの難局を乗り越えました。この時、現在の町の原形がつくられました。また、光長の時代も大雪に見まわれています。積雪は、一丈四尺、今で云う四メートル二十センチもあったとのことです。この雪の下に、「高田あり」と、立札があったという記録も残っています。そんな時、光長の嫡子が病死をしてしまい、跡目相続が難航、光長自身では収拾出来ず、五代将軍綱吉自らの裁きで光長は改易となりました。長きにわたり高田に貢献したのに、残念な幕引きでした。

その後、城主は稲葉正通になりました。徳川家光を育てた有名な春日局の曽孫にあたる人物です。寛文五年の大地震や、宝永の地震に際しては、名立地区には大きな山津波が発生、甚大な被害が出ました。この時幕府から一万両を借りた記録が残っています。

この頃から高田藩は、財政が厳しくなっていきました。その後、久しぶりに榊原家が姫路より高田に入城、六代も続きました。三代目の榊原政令は、妙高開発に尽力し、妙高温泉にもかかわりました。

高田藩は、激動の幕末期、最終的に彦根藩と共に、新政府軍と和睦の道を選びました。また、スキー発祥の地、金谷山に長岡の攻防で戦った、西郷隆盛の実弟吉二郎が会津藩士とともに永久の眠りについています。戊辰戦争で資金

を使いはたした高田藩は、明治三年大政奉還の年には、石高は十五万石から、五万石の小藩に転落してしまっていました。明治四年廃藩置県によって榊原家による百三十年の統治に終止符がうたれました。

高田藩廃藩置県後、高田城周辺が荒廃したのを見かねて、近郊の津有村の保阪真吉村長が救済に乗り出しました。お陰で、高田城周辺の蓮はふたたびきれいな花を咲かせ、市民の心をなごませています。今では日本三大夜桜で名高いお城の桜のはじまりは、明治四十二年、陸軍十三師団が高田城入城を記念して植樹した染井吉野の苗木三千本なのです。高田城主榊原政敬は、明治三年の大政奉還により、明治四年に、新政府によって、高田県知事に任命されました。そののち高田県は柏崎県に併合、最終的に新潟県となり現在に至っています。

このものがたりは、越後高田城が多くの人々によって長く愛され、現在も、蓮の花、桜の花に満ち、歴史を想う人々の心に残り、その時代を感じてもらえばとの思いで書いたものです。

轍（わだち）

大滝進二

都会で暮らす人達は、轍をご存知でしょうか。道路が舗装された現代では殆ど見る事がないですが、五十～六十年前の地方の土の道路ではよくあった。雨でぬかった時や雪が積った道で、大型の車が通った後に段差が残る現象です。デコボコして歩きにくいし、特に前から車が来ると大変です。

私は、小学校六年生の時、轍の事で苦い思い出があります。前日の朝から次の日のお昼頃まで雨が降っていたので、道がぬかっていました。夕方町から帰る時、坂を下って来て巴渡し橋を過ぎてから轍にはまってしまいました。轍の深さは十センチ位ですが、これが意外と抜け出せませんでした。すると、前方からクラクションが鳴りましたので、これは大変とパニックになり、路肩に避けようとハンドルを右に切った時、前輪が轍に乗り上げてしまい川に転落しました。川の深さは七十センチ位ですが、ただ落ちる時に運良く石垣の石にしがみ付いたので、それがクッションになり、ずぶ濡れにはなりましたが、幸い体は痛いところもなく無事でした。それに自転車は近所のおじさんに借りた

ものだったので、ハンドルが少し曲がった位で良かったです。しかし、川に落ちた後は何が起きたのかは覚えていません。

しばらく呆然と川に立っていると、近くで農作業をしていたおじさんが、大丈夫かと声を掛けてくれたので、何とか大丈夫ですと、頭を下げて川から出ました。六月だったので川の水は少し冷たかったけれど、その時は興奮していたので寒くは感じませんでした。その夜、母に自転車は危いから乗るなとしかられました。苦い思い出です。

しかし後から冷静に考えてみれば、クラクションが聞えた時に自転車を止めて路肩に上がって待てば良かったのですが、ましてや土手の高さ四メートル位でしたので、運悪く頭から落ちていたらと思うと、たまたま運が良かったのだと思います。

あの時代、地方の道幅も狭くて、ガードレールもないしとても危険でした。それとは別に今思うと、川に架かる小さい木の橋は、ある時までは時代劇に出て来そうな、欄干もなく、例えば自転車などで坂を下って来て、スピードを落さないで曲ろうとすると、時々小さな子供は曲り切れずに川に転落する子もいて危険でした。私は幸いにケガをする事もなく無事でした。川の深さもあったのでしょうか良かったです。

それから別に驚いたのが、その木の橋の下に回って上をみると、太い縄でくくり付けられているだけでした。台風などで川が増水すると橋の本体は流され、少し原形が残ったまま無残な姿で川岸にぶらぶらしていました。橋が流されると対岸の人達は、かなり遠回りで町に行くには一時間ほどかかるので、子供達は学校も休みです。だから町は急ピッチで別の場所に仮橋を建て、二日位で対岸の人達は町に行けるようになり正常通りです。

そんな状況の中でも子供たちは学校が休みなのは嬉しいです。なぜなら、水が引いた川岸では網を使ってすくうと、タナゴ、フナ、どじょうなどが面白いように捕れて楽しいからです。

さて話は変りますが、人が生きていく中で人それぞれに色々な事があり、やる事なす事が空回りして、にっちもさっちも行かず前に進む事が出来なく、まるで轍にはまってしまったように、あるいはアリ地獄のようにあがけばあがく程抜け出せない時があると思いますが、そんな時は一休みしてはどうでしょうか。

シベリアなどから何千キロも飛んで来る渡り鳥は、小さな木を口に銜(くわ)えて飛んで来て、疲れた時には木を海面に浮かべてそこで一休みして飛ぶように、人間も時には止まり木が必要なのではないでしょうか。

雪道などで踏み跡や轍があった方が歩きやすいし楽だと思いますので休み方を考えてみてはどうでしょうか。

とは言っても、現実の世界の状況は、今だに続く紛争、それとLGBT、子供虐待、いじめ、人種差別、コロナ、

格差社会、ヤングケアラー、気候変動による森林火災、洪水、干ばつ、CO_2問題、海面温度の上昇、地震など。

大問題なのが、一人の独裁者によるウクライナへの侵攻による食糧不足、燃料費高騰、大量虐殺、難民問題などもあり、又起きてはならない核の使用などをちらつかせたり、不安が増して来ているところで起きたのが、イスラエルのガザへの攻撃での大量虐殺、それも無差別です。

結果、一番苦しむのは子供や老人などで呆れるばかりです。それを支援しているのが大国アメリカです。イスラエルは和平を受け入れません。一日も早く人質解放が望まれる。

しかし、悪い事ばかりではなく、生きていれば良い事も有りますのでそして命は大切です。心や体が悲鳴を上げたら、肩の力を抜いて深呼吸しましょう。

又、時にはいつも頑張っている自分を褒めて上げて下さい。困った時は一人で悩まずに、回りの人や家族に相談して下さい。そうする事によって少しは楽になり希望が湧いて来ます。

水面を何事もなくスイスイと泳ぐ、しかし水中では足を動かすアヒルのように、まったりとゆったりと生きて行ければ良いのではないでしょうか。

時には一休みして、後はくれぐれも心と体をご自愛下さい。

憧憬と追想

菅沼眞二

山と旅

交通機関の進歩により失なわれゆくものがある。惜しまれつつ運行を終えたブルートレインほどの華々しさはないが、かつて新宿二十三時五十五分発の各駅停車長野行きの夜行列車があった。青春時代、山に親しんでいた頃はこの夜行列車に乗り目的の山の近くの駅からバスに乗り替え、登山口まで行くのが常であり、登山者には便利な列車であった。大きな荷物を持ち乗車時刻まで早目に行き、場所とりをしていたことや金曜、土曜日など駅の地下待合場所の長蛇の列を思い出す。

山旅ではないが仕事で飯田市に行く時にも、何度もこの夜行列車を利用した。早朝の四時台に中央線辰野駅で飯田線に乗り換え、雄大な南アルプスの夜明けの峰々を車窓に眺めたことも懐かしく想い出す。この夜行列車も中央道の延伸に伴い高速バスにかわった。

憧憬（木曽路そして白川郷）

木曽路と言えば松尾芭蕉の『更科紀行』に「木曽路は山

深く道さがしく［中略］高山奇峰頭の上におほい重なりて、左りは大河ながれ、岸下千尋のおもひをなす」とその険しさを記している。近くでは堀辰雄の『大和路信濃路』の中の「辛夷の花」の冒頭は「春の奈良へいって、馬酔木の花ざかりを見ようとおもって、途中、木曽路をまわってきたら、おもいがけす吹雪に遭いました」で始まっている。木曽路それは中山道の古い宿場町が遺されており、何ともロマンを感じ心惹かれていた。

国道19号線を南下すると「寝覚の床」の景勝地がある。山奥の地に浦島伝説が遺されているのは面白い。竜宮城から帰った浦島太郎が寝覚めた場所なので「寝覚の床」と呼ばれるようになったと、一種の地名起源噺と考えられる。街道を行き交う人々で都の噺等が伝播して当地の風景などと相俟って創られたのかも知れない。

中山道の木曽路には、妻籠・馬篭宿をはじめ往時を偲ぶ宿場の街並みが遺されている。

妻籠宿に寄る。「妻籠宿」は重要伝統建造物群保存地区に指定されているためか、往時の街並み建物が保存状態も良く宿場町の面影を今に伝えている。平日とは言え予想をはるかに超えた国内外の観光の人出に多少引き気味となり、早々に下呂温泉へと向かう。

下呂温泉、其処は関西の有馬温泉と関東の草津温泉と共に日本三名泉に数えられている名湯である。此処にも「合掌村」と称して合掌造りの建物が多く移築され公園化されている。園内の円空館に寄り円空仏を鑑賞する。円空仏を見るのも今回の旅の目的の一つであった。

白川郷に向かう前に高山市に寄る。高山陣屋屋敷を見学して朱塗りの中橋を渡り古い町並みエリアを散策しようと楽しみにしていたが、此処も妻籠宿より更に多くの観光客に加え修学旅行生で大混雑であった。

白川郷は富山県の五箇山とともに一九九五年に世界遺産に登録されている。庄川に架かる「であい橋」を渡り合掌造り集落の荻町に入る。映像などで見慣れた立派な合掌造りの三角屋根の建物群が現れ感動ものと同時に、其処も多くの観光客で大混雑の様相を呈している。折角なので散策しつつ写真を撮り旅の記録を残すのは何時も通りである。私らも普通の観光客となっている。合掌造りの建物構造など拝見することなく、五箇山へ向かう。五箇山には相倉（あいのくら）と菅沼の二つの集落が期待通り静かな山間の隠れ郷で、生活の場として存在していた。集落内をゆっくり散策出来たのは幸運であった。五箇山が藩の流刑の地としての歴史があることも知る。

憧憬とは、経過する時の流れと共に期待、憧れが膨張するものであろう。憧れの地の現実に直面した時、抱いていた想いと異なり失望させられる場合が少なくない。

追憶（屋根の葺き替えに想う）

ドイツの著名な建築家で日本文化に造詣の深い、ブルー

ノ・タウトは、日本の木造建築の機能性と美しさを合掌造りに見出している。白川村を訪ねた時の事を「この辺りの家はいずれも約六十度の急勾配を持つ藁葺屋根である。構造は実に論理的、合理的［中略］巨大な合掌屋根はドイツの農民家屋に酷似している」と評し、構造はゴシック式と名づけることが出来るとまで言っている。

白川郷の合掌造りの集落や京都美山町など景観を保持している茅葺き集落では防火設備の点検と防災意識の確認のため一斉放水が実施され、水のアーチの美しい風景がメディアでも毎回話題となっている。

更に目を引く催しに屋根の葺き替え作業がある。大きな三角屋根の葺き替えをするには沢山の人手と茅が必要となる。建物の保全に茅の確保調達は不可欠である。以前は近くに茅場があり、地域住民により管理されていたものと思う。屋根の葺き替えには多く人手が必要となり、地域住民間の助け合い「結（ゆい）」の組織が活躍することとなる。大屋根の葺き替え作業は壮観であろう。

私も、幼少のころの記憶として自家の藁屋根（茅葺き）の葺き替え作業を見たことがある。屋根の葺き替えを決めると、数年前から茅の調達と保管を始める。

茅は近くにあった通称「茅場」と呼ばれる湿地帯の一部に、家で管理する場所が決められてあった。

作業は、屋根葺きの棟梁の下に職人が丸太の足場を造り、古い藁茅を剥ぎ取り骨組となった丸太の縦横を荒縄で結いあげ藁の上に茅を敷いていく。屋根屋の合図で小さく結わいた茅の束を皆で投げ上げるのは親戚や近所の応援の人たちであった。順次敷き、叩き上げて行く。最後は、上部より刈り込んで美しく仕上げていく。

骨組の丸太を荒縄で結いあげている様は、京都の祇園祭の鉾建ての芸術的な縄掛に似て木造建築の振動を吸収する匠の技を感ずることが出来る。実際に生活する家屋の構造は機能性と堅牢さが求められるものであろう。

小さかった私など屋根の上に上ることはかなわなかったが、昼の休みのとき一番下の丸太木まで上げて貰える機会を得た。屋根の勾配の急峻さと高さに恐怖を覚えた記憶が甦る。

追憶、それは過去の事跡の悲喜交々が豊潤に醸造されて好奇なものに浄化されるものなのかも知れない。思い出は時の経過とともに美しくなるものである。

五箇山の菅沼集落は山に囲まれこぢんまりとした静かなところであった。ここに菅沼姓の家は無いと知る。

参考　「更科紀行」（岩波文庫）
「辛夷の花」（新潮文庫）
「日本美の再発見」（岩波新書）

嫗（おうな）の散歩

大森春美

若かりし頃は、時間に追いかけられ、生きていました。子供達が独立して、夫婦二人になりました。

願っていた自分の時間を沢山持つことが出来るようになりました。無職、老齢、老体の三つ揃い。

夢は？希望は？体力は？すべて衰えてしまい、この先は、独生独死、独去独来あるのみ。

それでも時として、三毒の煩悩（欲）（怒り）（愚痴）が沸き立ちます。解決する方法は、散歩と読書です。散歩道はわが家の周辺。自転車と共に歩きます。

本は図書館で借ります。読んでいない本は沢山あります。今は、『死者との誓い』ローレンス・ブロックを読んでいます。心に残った文章は、ノートに書き写しています。写した文章のとなりの行に感想を書きます。

困難なときを体験すれば、そのことから何かしら得るところがあるものだ。

続けなければならない。続けられない。続けよう。

本当に、われわれの問題すべてがこの言葉に尽きます。

そもそも、人生で自分の思いどおりになるものなど、いったいいくつある、と『死者との誓い』でローレンスは書いています。私もそうだと思います。

でも、もしかして……と思いませんか。

本を読んでいると、心に引っかかる文章も、年齢と共にかわると思うのですが、自分のなかを流れている時間は、すぐに過去となり、時の流れは逆流も再生もなし。

自覚させてくれるのは鏡かしら？鏡は嘘をつきません。老齢になり、鏡を見るのが減ったように思います。それでも見ます。

鏡に写る老女は、すこし哀しく淋しそうに微笑みます。

ところで、鏡の中の老女をミス・ユニバースに取り替えるなど一〇〇パーセントありえません。地球がひっくり返ったとしても、ありえません。

ならば覚悟するしかありません。死ぬ日まで、みすぼらしい自分と共に生きていかねば、ならぬならば、元気で楽しく生きていきたい。生きていこう。

雨の日以外晴れの日は、家のまわりを自転車と共に、散歩することにしました。家から十分自転車と共に歩くと、畑があり林があり、小川もあります。小川は、川底が深く両手で水をすくうことは出来ませんが、川幅は狭く、一、二、三で渡れます。流れに逆らってゆっくり歩くと、小さな橋があります。橋のたもとにお地蔵さまが江戸時代からいらっしゃいます。優しい顔のお地蔵さまです。そのまわりは、掃除がいきとどき、新しい花が活けてあります。そ

ばを黙礼して通りすぎます。
すこし歩くと、両側が林の小道を抜け、川越少年刑務所の塀に行き当たります。塀は、灰色のコンクリート、高さは三メートルはあると思います。
中の様子は見えず、音も聞こえません。閑かです。塀に沿って小道があり、五月の時季は、チガヤ、ヘラオオバコが沢山はえ、そよ風にゆられて楽しそうです。塀と小道から少し低い所に車道がありますが、車が走っているのを見ることはありません。
ヘラオオバコの花言葉、惑わせないで。素直な心。チガヤの花言葉は、子どもの守護神……だそうです。
若かった頃のことを少し書きます。
連れ合いと私は、かつて南大塚の駅まえで、小さな洋菓子店を営業していました。お客さまのなかに、ここのケーキが大好きだという息子さんに買って、川越少年刑務所へ面会に行くと、おっしゃった方がいらっしゃいました。
自分の二本足で散歩して、はじめて知りました。少年刑務所は、交通の便が悪くバスも走っていません。南大塚の駅から徒歩で二時間は歩きます。駅から遠い所に刑務所があったのですね。
店を営業していた頃には、時間に追われて散歩することは全然ありませんでした。
ところが、閉店して刑務所の塀の小道を散歩している私がいます。想像だにしたことがありませんでした。
縁かしら？　縁は異なもの味なもの。晴れの日は、歩いた記憶のない小道を見つけて、ワクワク、ドキドキ、楽しみながらの散歩です。
刑務所の塀のそばの小道、林、畑、小川、集落もあります。なつかしい私の故郷を思い、歩くときもあります。
自転車と一緒に、二本足と共に……。走ったり、歩いたりします。
散歩は楽しいです。
散歩は、心ワクワク、発見もあります。
散歩は、認知症の予防になります？だから老齢の方々におすすめです。
のどかでやさしい風が、背中を押してくれますよ。
散歩しませんか。

新聞少年

山下克吉

巷に「新聞少年」の唄が流れていた時代は戦後二十年を経ていましたが、まだ日本の経済力は弱く「新聞少年」の歌詞にある如く家計を助けるために働く新聞配達少年が多くおり、私もその一人でした。
新聞配達は早朝の仕事で大雨でも寒風の日でも新聞を待

ちわびている人のため休めない仕事です。
子供の時から馴染んでいた新聞とは社会にとって何なのかと思い新聞のルーツを調べてみました。
大衆が最初に親しんだものは江戸期に出現した瓦版でした。瓦版は木版に風刺画や庶民が好む出来事を載せ市井の人が作成出来る手刷りの情報紙でした。
瓦版には黒船来航や浅間山大噴火の災害等の大きな事件から日常的な事まで庶民の興味ある出来事が掲載され特に人情ものや親の仇討ち等は美談として好まれ、中でも赤穂浪士の仇討ちは武家社会の鏡として賞賛されました。
長く続いた封建社会は明治維新にて終焉し近代化を進める明治政府は明治六年に太陽暦を取り入れました。
同年に明治政府はそれまで許されていた仇討ちを禁止する条令を出しましたが明治十三年時でも仇討ちがあったと文献に記されています。
刀を振り回していた江戸時代に欧州では議会政治が行なわれており、大衆に向け新聞も発行されています。
駕籠(かご)屋が人を運んでいた江戸期に欧州では産業革命が興り蒸気機関車が生まれており、日本は欧州から遅れること七十余年後に新聞が生まれました。
小規模発行の瓦版の時代から大量に発行出来る新聞の時代へと日本の情報文化は大きく進化しました。
現代は瞬時に世界の出来事が報道されますが、テレビが存在していなかった時代は新聞が唯一の情報源であり、大事件や大災害が起きると号外が発行されました。
昨今はあらゆる事がテレビでワイドショー化し報道されるので号外の必要性は減ってきています。
最近の号外発行の例では、将棋の藤井八段の八冠達成や阪神球団の三十八年ぶり優勝等。号外を街頭で配り、その様子をワイドショー化し話題盛り上げのための道具とされ、本来の号外の意味合いが変わってきています。
災害状況等を映像で確認出来なかった時代は号外の意義は大きく、号外が発行されると、号外配達の緊急要請が学校にきました。私の中学校時代の事です。
先生は授業中にもかかわらず「新聞配達の生徒は直ぐに号外配達に出動して下さい」と言われ、クラスに数名いた新聞少年達は教室を飛び出し、他の生徒は飛び出て行く新聞少年達を激励の拍手で送り出しました。
当時の号外は社会的に重要な役割を果たしていたので号外配達時は使命感に燃え、頭に鉢巻をきりりと締め、腰に鈴を付け「号外、号外」と叫び、鈴の音を響かせ颯爽と駆けて行く。
あの時の情景は今でも脳裏に焼き付いています。

思い出のグリーングラス

小畔川　霞

グリーングラスと聞いて何を思い浮かべますか？

テンポイント・トウショウボーイと答えた方は、競馬に詳しい方です。しかもＪＲＡの全盛期の。

そうです。同期の三強といわれ一時代の歴史を作った名馬達の一頭です。

グリーングラスは、のちに歴史的牝馬であるヒシアマゾンを出す中野隆雄調教師が世に出した馬（現在は引退）。

そもそも、グリーングラスは英国の歌手トム・ジョーンズが歌った世界的ヒット曲から名をとったものです。

日本では、森山良子がカバーして大ヒットしました。ラブソングです。

普通ならいい曲ね、で終わりになるところですが、実は日本の歌、つまり恋人たちの愛を歌ったラブソングではない、と後でわかった。

では、どういう曲かというと、コンクリートの高い塀に囲まれ、収容されている囚人が、明日死刑が執行されるという状況でふるさとを想う、という曲だったのです。何ということでしょう。ビックリです。

こういう曲であると知っていたら、グリーングラスと命名したでしょうか。

中野隆雄調教師は、明治大学を卒業し貿易会社に入社しましたが、親が調教師であった関係で、遠まわりの道をたどり、ＪＲＡの調教師となったインテリです。

襟裳岬の近くの牧場などでの修業を手始めに苦労をなさった人です。その成果か、クシロキング、ホクトベガ、ヒシアマゾン、ヒシミラクルなどＧ１を勝った名馬を育てました。

思い出のグリーングラスの名と曲を聴くと、私は、森山良子さんと、中野隆雄さんと、トム・ジョーンズと同期でライバルで死闘をくり返したテンポイント、トウショウボーイを思い浮かべます。そして、名馬は名馬なんだなと思うとともに不思議な、えにしと感慨に浸ります。

私のアルバム

粕谷泰雄

盆栽の生命力

福島市にある花見山公園に桜を見にいった。帰り道に盆栽店に立ち寄り、東海桜の盆栽を買った。

「これまでにするのには、相当手がかかっていますよ」と、

店の主人はその盆栽を慈しむように言われた。
手入れの方法を尋ねると、丁寧に指導してくれた。
「水は、土が乾いたら十分与えてください。六月にお礼肥えとして、一〇月には翌春に花を咲かせるための肥やしとして、根元に固形肥料を置いてください。一月になったら二芽を残して剪定してください。遠方からわざわざ来られたのだから、固形肥料を差し上げましょう」
こう言って、油粕製の固形肥料を新聞紙に包んでくれた。
六月に入り、教えてもらったとおりに固形肥料を置き、水やりを続けた。二週間後のある日突然、それまで青々としていた葉が枯れ始めてきたのである。
「肥料のやり過ぎではないか」
と、妻が言った。
「教わったとおりにやったのだが」
と、反論したが、目前の事実を見ると自信を喪失した。
残っていた固形肥料を取り除き、水をかけて肥料分を洗い流してみた。数日後、無残にもすべての葉が茶色に変色してしまった。風通しのよい日陰に移して、しばらく様子を見ることにした。水やりは続けた。
梅雨になると毎日うっとうしい天気が続いた。しばらく何の変化もなかったが、だんだん枝先の芽の色が茶色から赤みを帯びたえんじ色に変わってきた。やがて幼い糸状のものが小さな葉の形になり、若葉となった。一か所が二か所にそして数か所から若葉が出てきた時は、盆栽の生命力の強さに感動し、ジィーンと胸に迫るものがあった。
人間にはうっとうしい梅雨の長雨も、植物にとっては恵みの雨となることがよくわかった。それにしても、二十センチメートルにも満たない盆栽のどこに生きる力が隠れていたのだろうかと驚いた。私は、盆栽の生命力から活力をありがたく押し戴いたような、不思議な気持ちになった。

触れ売りの声

小学生の頃、「ト、ナット、ナット～」という納豆屋さんの触れ売りの声が遠くに聞こえてくると目が覚めたものだ。晴れの日も雨の日も、川越の街をめぐってくる納豆屋さんは、四角い顔の口元に大きなほくろのある五十前後の男の人で美声の持ち主であった。黒い頑丈な自転車の後ろに大きな木箱を付けてゆっくり走ってきた。
声が家の近くに聞こえてくると母親から小銭を渡され、「ナットやさぁ～ん」と大きな声で納豆屋さんに呼び掛けた。納豆は三角の形をしていた。木材を紙のように薄く削った二枚の経木に丁寧に包まれ、手にするとぬくもりが伝わってきた。経木の隅に黄色のカラシを擦り付けてもらい、和紙の小袋に入った青海苔を手に持たせてくれた。
七人家族で分けて食べたのだから、現在のパックに入った納豆に比べてみると相当な量があったのだと思う。先ず、どんぶりに納豆を入れ糸がでるまでよくかき回した。青海苔の小袋をハサミで切ると、かすかに潮の香がした。もう一つのどんぶりに半分を移し替えて、青海苔半袋分を入れ、

醤油をかけた。カラシを入れた納豆は、大人用であった。納豆屋さんは毎朝決まった時間に触れ売りに来たと思うが、我が家で納豆を買うのは一週間に一、二度であった。

夏休みに昼寝をしていると「キンギョ～エ、キンギョ～」という金魚売りの触れ売りの声が響いたものだ。金魚屋さんもよく通る声をしていた。一回買ったことがあるが、金魚はすぐに死んでしまった。

二十年前までは「タケヤ～、サオダケッ」という竿竹屋さんの触れ売りを聞いたことがある。

懐かしい触れ売りの声を思い出すと、一緒に暮らした家族の顔が走馬灯のように浮かんできた。

料理好きな人

私は、料理好きな人と生活を一緒にしている。その人は、料理教室にいそいそと通い、新しい料理を習ってくる。そして数日後には、実習してきた料理が食卓に並ぶ。家庭菜園で野菜を育て、季節ごとに新鮮な味を楽しませてくれる。サラダ、胡麻あえ、酢味噌あえ、天婦羅、煮込み、漬物など一つの食材が色々なものに調理される。よくまあできるものだと感心する。

私が後期高齢者になるまで大病をしないで過ごせてきたのも、家庭料理のお陰である。「医食同源」というが、毎日の食事で健康を保ち身体を養ってきたからだ。

これまで私がその人にしてきたことと言えば、一〇年前に母屋を新築した際、キッチン仕様をその人の希望どおりにしたことくらいである。

「ごちそうさまでした。ありがとう」

毎日の食事を美味しく残さずに食べ、妻に感謝の気持ちを伝えることを忘れないようにしていきたいと思う。

朝の顔

昨年は七月中旬まで雨が毎日降り、肌寒い日が続いた。最高気温も二十度前後で、家庭菜園に植えた夏野菜の育ちもよくなかった。キュウリは細く、ナスは小粒で、ミニトマトは雨に当たり皮が裂けてしまった。

久しぶりの晴れ間をねらい、家庭菜園のそばにある土地の草刈りをした。朝四時半過ぎからエンジンを響かせ、いつもどおりの手順で作業を進めていった。

空が白み始め、朝日が昇ってきた。倒した草に朝露が光り、草の青い臭いを嗅ぐと気分が爽快になった。頭から汗が吹きだし、長そでのシャツが肌に張り付くようになった。

ガソリンを補充するたびに水分をとり、休憩しながら作業を続けた。各地で熱中症患者が続出し、死者まで出たというニュースを聞いていたので、ときどき空を仰いで深呼吸をしながら慎重に草刈り機を操作した。

二時間の作業を終え、日陰で草刈り機の刃をはずし、布でごみを取り除いた。伸びていた草がきれいになぎ倒されて、土地が広がったように感じられた。一仕事を成し遂げて満足した気分になった。タオルで顔の汗をぬぐい、危険を伴う作業で緊張していた気持ちから解き放された安堵感

から、口元に小さな笑みが浮かんできた。
家庭菜園の作物を収穫し、自転車をこいで帰る途中、通勤通学の人々に出会った。
小さな子供を自転車の前と後ろに乗せて必死に保育園に急ぐ女性の顔には、時間を気にする緊迫感が漂っていた。期末テストが終わり、夏休みを目前に控え楽しそうに話しながら通学する中学生の顔には、明るい開放感が満ちていた。朝の散歩をゆっくり楽しむ老夫婦の顔には、幸福感があふれていた。
口を大きく曲げ片目をつぶり、頭を斜めに傾けて自転車をせわしくこいでくる男性の顔には、悲壮感が流れていた。
ものの一五分の間にさまざまな朝の顔を見た。人生を振り返ってみて、自分もさまざまな朝の顔をして過ごしてきたのだろうかと思うと、可笑しくなった。

父の自叙伝

鈴木高雄

私の両親は去年結婚七十周年を迎えた。兄夫婦の提案によって、子どもや孫、ひ孫たちが集まり、プラチナ婚のお祝いをした。夫婦そろって元気に七十周年を迎えるのは、そう多くはないと思う。
プラチナ婚のあと、今まで特に親孝行をしてこなかった私としては、何かできないかと考えてみた。そこで父が自叙伝を書く、お手伝いをすることに決めた。
父は
「我は神なり」
という言葉を座右の銘として、口癖にしていた。けっして傲慢な態度で言ったのではない。自分が悪いことをせず、何か人のお役に立ちたいという思いから、自分を戒めるために語った言葉だった。そんな父の生きざまを、本にして残してあげたいという動機だった。
去年の暮れに実家に帰り、自叙伝のことを父に話すと、
「俺は書かない」
と即答されてしまった。しかし、それに構わず一方的に、その場で私から父へのインタビューが始まった。父の両親や姉弟のこと、趣味の囲碁や竹細工、登山のこと、仕事についてなど、根ほり葉ほり聞き出した。
すると私の知らないことばかりだった。おじいちゃんが木こりをしていたことや生前のエピソード、父の少年時代や山から学んだ心の話、両親の結婚のいきさつや親族のことなど、はじめて聞くことが多く、とても興味深かった。
話を聞いていると、ドラマや映画の映像を見ているようで、時間を忘れていつまでも聞いていたい思いだった。
聞いた内容を帰りの電車の中で項目別にまとめた。すると、まだまだ聞きのがした話がたくさんあることに気がつ

いた。それをメモして、次のインタビューの準備をした。
ところが二回目のインタビューを予定していた直前のことだった。父が転んで足を骨折してしまった。その日に入院し、数日後に手術をすることになった。手術はうまくいったものの、新型コロナウィルスの感染を防ぐために、入院中は家族を含めて一切の面会が禁止になってしまった。
せっかく楽しみにしていたインタビューが、残念ながらできなくなってしまった。父の話は聞けないが、ひとりで実家に残っていた母のことが心配だったので、毎月実家に帰り、母から話を聞いた。
結婚や旅行、親戚、老人大学など、ふたりに共通な話を聞いた。記憶が曖昧なところが出てくると、母は古い写真を出してきて、それらを一枚一枚見ながら説明をした。
今の自分よりも若い、ふたりの若かりし姿を見て、不思議な思いがわいてきた。新婚旅行で泊まったときのホテルの領収書なども出てきた。ふたりで宿泊代が四三七〇円、食事代が三〇〇円などと書かれていた。七十年前の物価が分かって面白かった。
ご来光を見るために、ふたりであちこちの山に登ったことや父の退職記念に北海道に夫婦で旅行をしたことなどは、はじめて聞いた話だった。
しかし母だけでは、どうしても聞き出せない父の仕事や趣味の囲碁、座右の銘などの内容もあった。リハビリが進まず、父の退院が何度か延びてしまい、父へのインタビューの機会は中々こなかった。
四月になって、ようやく父の退院が決まった。しかし実家に帰るのではなく、一時的に施設に入ることになった。週一回は家に帰れるように手配してくれた。
父が施設に入って四日目、私の仕事の休みに面会に行った。四ヶ月ぶりに会った父は、少し痩せている感じがした。車椅子に乗って出てきた父は、私の顔を見て、すぐ名前を呼んで笑顔で迎えてくれた。
はじめに体調や施設での生活のことを聞いた。とても弱々しい声ではあったが、はっきりと答えてくれた。
私は自叙伝の続きを聞くために、六十ほどの質問項目を準備していた。私が途中まで作成した父の自叙伝を、スマホのアプリで音声を出しながら一緒に聞き、質問のところに差しかかると、音声を止めて質問した。思い出せないこともあったが、記憶に残っている部分も多かった。
九十年近く前に行った小学校の遠足や知事賞に選ばれた俳句の解説などをしてくれた。また両親を連れて行った京都や北海道、九州などの旅行もよく覚えていた。
長いあいだ車椅子に座っていると、血圧が下がるというので、一時間ほど話を聞いてから、やむをえず途中で終わることにした。準備した質問の五分の一ほどしか聞き出せなかった。月に一度ほど帰省して、今年中に完成できたらいいかな、と考えている。
父は平凡な普通のサラリーマンだった。しかし、とても

世話好きで、来る者は誰でも拒まず、みんなが仲良く幸せに暮らせるようにと生きてきた。それゆえに、今でも地域や親戚の多くの人から慕われている。

私も父から多くのことを学んだ。その一つを紹介したい。私は事情があって、大学の卒業式に出ることができなかった。そのときに父は、

「俺が学長に代わって祝辞をしてやる」

と言って、三つの話をしてくれた。その一つが、

「『当たって砕けろ』とは、どういう意味だと思う」

という質問だった。私は少し考えてから、自信なさげに

「砕かれてもいいので、まず当たりなさい、行動しなさい、ということだと思います」

と答えた。すると、父は言った。

「自分の解釈は少し違う。いったん志を持ったら、たとえ壁に当たって砕かれても、諦めずに挑戦し続けて、最後は壁を砕いて、志を成し遂げることだと思う。海の波は岩にぶつかって、何千年、何万年も砕かれ続けるが、最後はあの硬い岩を砕いてしまう。そのように生きなさい」

と言った。父自身がそのように生きているのだと思った。私は今まで、くじけそうになったことが何度もあった。そのたびに、この言葉に励まされ、助けられてきた。

父はこんなことも、日頃よく言っていた。

「自分は『不言実行』というのは好きではない。言ったからにはやる、やったからには言う」

そのような父の生き方を考えると、今まで父が歩んできた人生を文字に残すことは、大きな意味があると思う。

父の自叙伝のお手伝いをしながら、父が口癖にしていた

「我は神なり」

という言葉を、あらためて考えてみた。誰でも、自分の心の中に神が住んでいるのだと思う。それは良心ともいわれる。しかし、人間は弱い存在なので、良心の声に従って、生きることは簡単ではない。父は自分の弱さを自覚し、その弱い心を克服するために、あえて人前で、この言葉を宣言することによって、自分を戒めていたのだと思う。

父の自叙伝には、とうぜん母も登場する。今まで私が知らなかった両親の姿が、まだまだたくさんある。自分の一番身近なルーツである父と母が歩んだ人生のドラマの続きを見るのは、とてもワクワクして楽しみだ。

空飛ぶご近所様

校條（めんじょう）　清

水が張られて間もない川越市内の田んぼ沿いの道を妻と歩いていると、突然一羽の野鳥が草むらから飛び出した。軽やかに歌いながら高度を上げていく。

「ヒバリだね」妻が声を弾ませる。「そうだね」と応じた。

二人共、日本野鳥の会会員で三十年ほど前に長野県の戸隠探鳥会で知り合った。

最初ヒバリに気付いた時は五十メートルほどの距離だった。この時、スズメよりも約三センチメートルほど大きなヒバリの体が豆粒くらいに見えた。

「確か、ヒバリって太陽にお金を貸したんだよね」と笑いながら言う妻に「あれだけ催促されても泰然としているのは大物だよ」と雲間から顔を覗かせるお日様に手を合わせた。

もちろん、実際に貸し借りがあるわけでなく、複雑なさえずりを親しみやすいように人間の言葉で表した「聞きなし」から生まれたエピソード。「日一歩、日一歩、月二朱、月二朱、月二朱」にヒバリも苦笑いしているかもしれない。もっとも、呑兵衛の私には「酒一合、いや四合、さらに五合」と聞こえてしまうが。

東京在住の「鳥仲間」によれば、ヒバリの数はかなり減少しているらしい。以前多摩川ではいつも元気よく挨拶してくれていたが、今はすっかりごぶさた気味とか。「畑や田んぼが激減したからなあ」と寂しそうにつぶやいた。私は心の中で「川越ではご近所様だよ」と自慢した。

件のヒバリは、草の中に舞い下りた。近くにお家があるのかな。子育ての最中かもしれないからそっと見守ろう。

ヒバリ君、ぜひ無事に成長した君の我が子を私の「鳥仲間」に紹介させてね。

私と霞の散歩道

夏川　漠

川越の中心市街地から、霞ケ関に引っ越してきて数ヶ月が経った。

五月のある朝、私は今日もベビーカーを押しながら、この引越しは大成功だった！とほくほくしている。

大成功の理由は、美味しい魚屋がある／へんてこな本屋がある／ひとが優しい／大学周辺の多国籍な雰囲気などなど盛り沢山なのだが、一番の理由は、大好きな散歩道ができたからだ。

霞ケ関の商店街から北へ少し歩くと、小畔（こあぜ）川のほとりが見える。穏やかな川で、煌（きら）めく水面は見飽きることがない。ここの河川敷は、川越で一番美しい川沿いなんじゃないかしらと思うくらい、自然と遊歩道が調和している。

春には桜と菜の花で溢れ、花見客のほどよい賑わいが心地良い。あたたかい風が吹くと、桜吹雪が風景に加わり幻想的な美しさとなる。

新緑の季節には、野の草花の青々とした匂いを感じて深

呼吸する。飛び石の上で水をかけ合う中学生の姿を見て、今はベビーカーに鎮座する我が子も、あんな風に伸びやかに育ってほしいと思う。

これから盛夏、秋、冬となり、川沿いがどんな風景になるか、楽しみだ。

小畔川を西に進むと、御伊勢塚公園がみえてきた。この公園がまた素晴らしく、当時の都市計画設計者に「ありがとう！」と声を大にして伝えたい。

ちょうどいい広さの公園で、雑木林エリア、アスレチック、池、広場が配置されており、表情が豊かだ。アスレチックは、一癖ある面白いものが揃っている。今の季節は、空の青さと木漏れ日、芝生広場のコントラストが美しい。

こどもから大人まで、思い思いに満喫している様子を見られる所が良い。池の近くの東屋でウクレレを練習していたり、小さい子とママ数人でピクニックをしていたり。地域の人から愛されている場所、ということがよくわかる。

御伊勢塚公園を抜けると、おいせばし通りに出る。桜の樹形が美しく、強剪定されていないのびのびとした街路樹が並ぶ。今日のような日差しの強い日でも、その生命力溢れる枝葉によって、心地よい木陰道を創りだしている。

この通りは歩道が広く整備されており、まるでアメリカの高級ベッドタウンだ。この通りで私の気分は最高潮になり、自然とお尻をふってリズム良く歩いていく。

アメリカ気分に浸りながら、私とベビーカーは徐（おもむろ）にカフェのテラス席に吸い込まれる。そしてアメリカンワッフルを注文し、我が子と分け合いながら食べる所までが、私の最高の散歩道なのだ。

さだまさしコンサート、その時々の指定席

恵比根　蘭

スマホでコンサートチケットを申し込み、コンビニのレジで発券してもらう。この購入方法は初めての体験で、「ぴあ」に会員登録するところから何度ドキドキしたことか。スマホに不慣れな人間にはとてもハードルが高かった。

私はシンガーソングライターさだまさしのファン（今は推しというようだが昭和の人間には違和感あり）。さだまさしは今年デビュー五十二周年になる。私はデビューの二年後にファンになった。歌は勿論、トークも魅力的で、年に二回はコンサートに行きたいと思ってきた。五十年間で百回は通った計算になる。このあたりでさだまさし讃ではなく、コンサートに纏（まと）わる思い出を綴ってみたいと思う。

一番遠くは京都の平安神宮、次は長野の軽井沢プリンス

ホテル。共に野外でのコンサートだった。平安神宮は雷雨になったこと、軽井沢はその後間もなく亡くなってしまった山本直純の指揮だったことが印象に残っている。それ以外は東京と埼玉が主で、最近は地元川越でのコンサートにはぜひ行きたいと思っている。それなのに去年はファンクラブの会報誌のコンサート情報を見落としてしまった。会員になっているとチケットを優先的に買えるし、比較的いい席が手に入るのに、機会を逃してしまったなんて……。

仕方なく最後の手段で、一般販売にチャレンジするも敢え無く敗退。チケット取りの達人だと自負する友に相談したら、リセール（再販売）で買う方法があると教えてくれた。リセール購入の登録にも四苦八苦した。が、夜中に一枚売りに出たという知らせがスマホに来た。そこからがまた大変で、クレジットカードにセキュリティ強化の登録をせよ、などとの指示が出る。何だそれは、と思っても立ち止まると人に買われてしまう。必死の思いで指示に従う。草木も眠る丑三つ時になって、やっとチケット購入完了。三階の最後列のしかも端っこの席だが喜びは一入だった。入試に例えれば、全て不合格という時に補欠だった第一志望校から繰り上げ合格の通知が来た。そんな感じである。

我が家で最初にさだファンになったのは母だった。母の日のプレゼントは何がいいか、と尋ねたら彼のＬＰレコードを所望された。当時はまだレコードで、レコードを聴いて弟と私もファンになった。私は大学生、弟はまだ坊主頭の中学生だった。

コンサートに行こうと私たち姉弟はチケット発売日に今はもう無い中野サンプラザに向かった。発売時間前には到着したが、既に長蛇の列ができていて買えなかった。徹夜しないと買うのが難しい、とその日に知ったのである。

大学を卒業して教員になってからしばらくは徹夜して並んでチケットを買っていた。発売は日曜日なので、土曜日の晩から並ぶ。東武東上線が走る線路脇の池袋東武百貨店の外階段に座って、電車の音を聴きながら店の開店時間を待つのである。席は座席表から選んで買う。売れた席は赤鉛筆で塗り潰されていく。全てがアナログだった。若いからできたことだったが、買えた時の喜びは大きかった。

そうやってチケットを手に入れたというのに、クラスの生徒がコンサートの当日に問題を起こして行けなかったことがある。今でもコンサート会場の空席を見ると、その時のやりきれない気持ちを思い出す。そして空席に座るはずの人にどのようなことがあったのだろうか、と気の毒な気持ちになる。勿論舞台に立つ人が一番大変なのだが、チケットを買う側も手に入れる苦労から始まり、当日コンサートに行くところまで様々な点で幸運が続かないと座席に座ることができない。働き始めてそのことがよく分かった。

コンサートに一人で行くこともあるけれど、たいていは誰か同行者がいる。女友達にしても異性の知り合いにしても親しい人であることは同じである。五十年という月日の

間には鬼籍に入ってしまった人が何人かいる。一緒にでかけた会場がその人を思い出させてくれるのか、コンサート中に亡き友を思い出して懐かしむことがある。

母は七十代で病没してしまったが、元気な頃にはしばしば一緒にコンサートに行った。今も弟と一緒にコンサートに行くことがあるが、始まりのベルが鳴るまでのひと時近況をお互いに話したり、母の思い出話をしたりする。母がさだまさしのレコードが欲しいと言わなかったら、弟と私が並んで座って歌やトークを楽しむなどということは無かっただろう、と思う。コンサート開始のベルが鳴り、会場が暗くなると隣の席に母がいるような気がすることがある。暗闇が作る不思議かもしれないのだが。

席に関して印象に残っているのは、最前列に座れた時のことだ。所沢でのコンサートで最前列を取ってもらえた。職場の同僚のお父さんが会場の関係者だった。同僚とお母さんの正子さんもさだコンサート初の参加で、正子さんがさだファンになった。コンサートを機に正子さんから博物館に行こうとお誘いがあったり、食事にも一緒に出掛けたりした。一昨年正子さんは病気になって亡くなられてしまったのだが、コンサートが同僚のお母さんとの縁を結んでくれたことも忘れられない思い出だ。

職場の同僚と言えば、勤務していた高校に長崎出身で、さださんのお母さんの佐田喜代子さんと小学校の同級生だった先生がいた。小久保先生とおっしゃった。私が担当をしているクラスで地理を教えてくださるようになってから話す機会が増えた。昔の長崎の話など聞かせてくださった。小久保先生が喜代子さんに連絡を取って、私のことを話してもくださった。

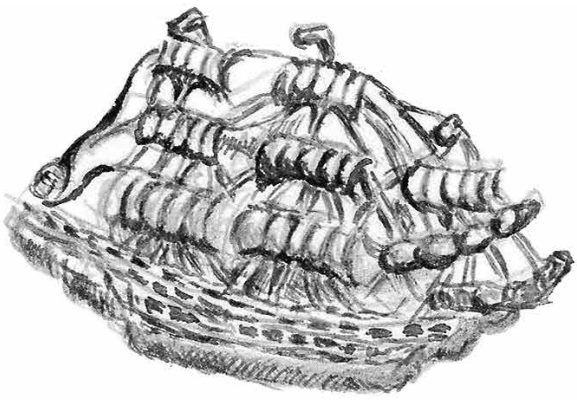
それからしばらくの間、私は喜代子さん経由でチケットを手に入れることができた。隣の席で、お母さんとして息子の健康を気遣う話を伺ったり、お互いにどの歌が好きかなどという話をしたりした。一番好きな歌が一緒で驚いたしうれしくもあった。喜代子さんは二〇一六年に亡くなられた。コンサートで一番好きな歌『桐の花』を聴くことがあると、喜代子さんを思い出す。恩人である小久保先生も喜代子さんよりかなり前に逝ってしまわれた。

私は高校で古典を教えていた。生徒からよく全教科中古典が一番難しいと言われて困り、何を言うのだ古典は面白いのに、と思ったが、書かれていることがしみじみと分かるのは年齢を重ねてからなのだ、と今は思っている。特に大切な人を亡くしてから気づくことが沢山あると思う。

コンサートの会場に行くとしばしば『方丈記』の冒頭を思い出す。「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」確かに。席に座っている人は絶えずいるけれど、同じ人が座っているわけではない。

川越のコンサートで隣り合わせた人と話をした。甲府から来たという彼女も五十年前からのファンだと分かり、意気投合した。アドレス交換をし、再会の約束をしている。

私はあと何回コンサートに行けるのか、さだまさしはいつまでコンサートを続けてくれるか、などと時々考える。川越のコンサートで、「点滴をしながらでも、看護師に舞台上に付き添ってもらってでも歌う。引退しない」とのさだ宣言が出た。それならばどこまでも付いて行こう。命には限りがあるからその時その時を懸命に生きなければならないと心に刻んだ。チケット取り以外のことも頑張らねば。



川越文芸賞の選考にあたって

随筆部門の川越文芸賞は、六作品が候補にのぼった。三人の編集委員が二度の会合を持って議論を重ね、候補作品から文芸賞一作品、同準賞二作品を選んだ。

文芸賞は『旅の僧』。久しぶりの故郷山口県の友人からの電話で記憶の底に眠っていた思い出が甦えるところから始まる。二十一世紀の読者が読み進んでいくと、これはまことに不思議な話だと実感するが、確かな筆力が読者をいざなう。小学二年、ふらりと訪れ、消えていった旅の僧侶と思しき人が家族五人の名前を改名したこと、友人たちも担任の先生もその新しい名前を喜んで使ってくれたこと、卒業証書の名前をめぐっての一悶着などが次々と甦える。

戸籍の名前の使用頻度が増えるにつれ、改名した名前そのものはやがて忘れられていったが、謎めいた旅の僧から、偉大な漂泊と隠遁の人、故郷山口出身の自由律の俳人種田山頭火が思い出され、筆者は生きていくことの深い意味を自らに問いかけている。

巧みな構成と優れた表現で綴られた随筆で、三人の編集委員が一致して文芸賞とした。

準賞は『幸せな出会い』と『言葉の意味が鮮やかに立ち上がる時』の二作品。

まず、『幸せな出会い』は、ある春の晴れた日の友人たちとの先輩のお墓参りから始まり、二十年以上の昔へとさかのぼる。その時、筆者にとって、しばらく前に亡くした母への思いから時間は止まっているようであった。そこから自らをどう建て直し、前向きにどう現実を生きていくか、思い悩む時に、バレエに出会った。中年での挑戦に躊躇はあったが、スタジオの生徒たちのなかに年嵩で美しきポーズをとる女性がいた。それが先輩であり、筆者は生きる目標を見つけたのだ。先輩は、ヴァイタリティに溢れ、ハンディを持つ人たちへの水泳指導も行う理想の女性であった。しかし、やがて先輩との別れが来る。

達意の文で読みやすい作品。

次の『言葉の意味が鮮やかに立ち上がる時』であるが、幼い頃の言葉、戦後の混乱期の重い言葉、祖母の歌った桜井の別れの歌、孫の揺れ動く心から発せられる言葉、大阪での闊達な人々の言葉、こうした人生で出会う断片を的確に掬い取りながら、筆者は、人生経験を重ねるに従って、言葉がかつてと異なる色合を帯びて鮮やかに立ちあがることに気付く。無論、読書においてもしかりであると。

多くの人々との交流を経て、生きる豊かさを知り、今は日々をしみじみと味わいながら過ごす自分がここにいる。

そして、年齢にふさわしい諦念にも似た心境を筆者は淡々と描いて好ましい。

さて、候補になりながら賞を逃した方々。編集委員全員が頭を悩ます紙一重の差であった。

次の機会に大いに期待したい。

随筆の編集を終えて

今年度の随筆部門の応募作品は十八編、男性十一編、女性七編であった。とりわけ若い子育て中の女性からの応募があったことはまことに喜ばしいことであり、今後も幅広く、各世代からの、さらに積極的なご投稿を大いにお願いしたいものである。

優れた作品も少なくなかった。そのうち、文芸賞と準賞三作品についての講評は前ページで行った。ここでは応募全作品について紹介を行いたいところだが、残念ながら誌面に限りがある。特に印象に残った作品について感想を述べるにとどめ、筆者名は省略させていただく。

○『鶯が歌う』　前向きに生きようと出かけた場所で、人々の歌声に合わせて鳴く鶯に遭遇する。この体験を契機に以前の同様の経験を思い出す。人と鶯の摩訶不思議なやり取りをユーモラスに絶妙なタッチで描いた秀作。

○『私と霞の散歩道』　川越の中心市街地から霞ヶ関に越した筆者。ベビーカーを押しながら辺りを散歩する。大学等のある商店街に満足する。自然豊かな河川や公園の四季の風物に包まれて引っ越しは大成功と気分は絶好調だ。

○『空飛ぶご近所様』　ともに日本野鳥の会会員の筆者と奥さんが散歩中に揚げヒバリを発見。「聞きなし」のエピソードを交え足取りは軽いが激減するヒバリを憂うる。片や川越ではヒバリはご近所様だと自慢する。

○『さだまさしコンサート、その時々の指定席』　筆者は五十年来の筋金入りのさだファン。そのコンサートチケットの入手方法の変遷が興味深い。かつて仕事の都合で行けなくなった経験から、会場の空席にも心が動く。ファン歴も長くなると同好者との縁も深くなるが、別れの時も来る。

○『私のアルバム』　「盆栽の生命力」「触れ売りの声」「料理好きな人」「朝の顔」の四つからなるオムニバス。追憶と現在のエピソードから断片を拾い、安定した、歳相応な穏やかな顔立ちが文章から立ち現れる。

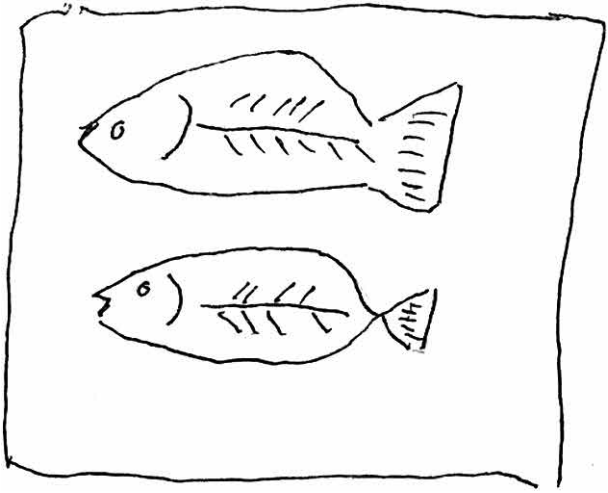
○『轍』　今は見ることもほとんどなくなったぬかるみに車が走ってできたタイヤの跡。小学生の頃自転車でこの轍にはまった回想から始まる。轍とは、はまったら容易に抜け出せない厄介な状況の比喩。現代社会、地球環境など轍にはまった状態。抜け出す方途は？その問いかけである。

○『思い出のグリーングラス』　競馬界の名馬グリーングラスの名は、名曲「思い出のグリーングラス」から取られたと始まる。原曲は、死刑囚（敵前逃亡の罪とも言われるゆえ反戦歌とも）が、処刑の朝、ふるさとの「草原」を夢見る歌だったという凄絶なギャップについて筆者は触れる。

○『父の自叙伝』　めでたくプラチナ婚を迎えた父のために、筆者は父の自叙伝を企画。反対されながらもインタビューを勝手に開始。座右の銘、事情があって出られなかった大学の卒業式のために父が行った式辞など興味深いが、少しユーモアが欲しいところ。

（遠山、寺島、鈴木）

俳　句



川越文芸賞

野村桂子

やはらかに膨らむ大地下萌ゆる

川越文芸賞準賞

新村洋子

閑(しず)まりて安居(あんご)の気配平林寺

斉藤秀子

夏空へ大きく夢と書いてみる

見上げれば陽射しの中に花水木
桜散る下に集まる小さな子
桜見ずテレビの前に独りかな
長閑(のどか)さや子供が真似る猫の声
長閑さや動くものなき子供部屋

新井咲那

能登地震おもんばかりて屠蘇(とそ)を酌む
バレンタイン孫持ち来たるチョコレート
母の日や卒寿の爺もご相伴(しょうばん)
梅雨晴間団地軒並満艦飾(まんかんしょく)
敬老日昭和の香り漂えり

池田隆生

梅の香や友と語らう昼下がり
緩(ゆる)やかに行くか行かずか花筏
菜の花に囲まれひとり野道行く
完走を諦めた今日立夏かな
枯野原雲悠々と流れ行く

井上康子

退院す今朝の若葉も色濃しや
みな笑顔シャッターチャンス白牡丹
亡き友がこの球根に春を待つ
花筏かすかに鯉の姿あり
ミモザ咲く「感謝」というが花言葉

榎本千枝子

微笑みて乙女椿は空見上ぐ
一発目今年も白の大花火
天の原いま泳ぎ出す鰯雲
雪庇(せっぴ)落つポチの住処へ容赦なく
拍子木に幕開けを待つ初芝居

大矢真紀子

すずかけの空の高さや更衣
楽園のある筈もなくみちをしえ
赤子いま戯の手足天瓜粉
啄木鳥(きつつき)の谺返しの故山かな
妻と吾の馬耳東風や去年今年

岡本好央

湖花火歓喜をあぐる一点に
紫陽花や色の乱るる古都の寺
今朝届く百合三輪の清清し
江戸風鈴願ひをよする風の吹く
逝きし猫時雨に濡るる窓の隅

（川越氷川神社）

小川房子

雨戸開け花水仙に見とれけり
桜道学童の声町平和
秩父路や新緑の樹々もこもこと
女王の風格凛と白牡丹
きょろきょろと春爛漫の散歩道

尾花順子

一人ではないと落葉が肩に乗る
弓なりに猫の足跡春の土
老の春ともし火色の庭の花
裸木が清めていたる青き空
梅雨明けの町に花咲く日傘かな

片木美津代

三列に並び静寂の初詣
アルバムを繰る指先卒業子
金太郎飴切る音軽し春隣
つんつんと葉先の触るる菖蒲風呂
突然に背で手締めや酉の市

勝田仁恵

正月や徳利の底の残り酒
道端の馬頭観音鏡餅
色褪せた卒業写真なぞる指
そば切りの辛味大根夕餉膳
泡風呂のアロマの香り夜半の春

勝田雅夫

病み上がりけの日彩る花手水
病棟を外から見る日風薫る
喜多院の羅漢も笑う春時雨
藤村とミモザを愛でる星野山
婚礼の列をことほぎ風光る

葛城さつき

金子隆司

幕張りて秋祭を待つ蔵の街
秋刀魚の香昭和は遠くなりにけり
華麗なる蓮の開きて朝涼し
年の瀬の喪中葉書に友偲ぶ
卒業の晴着にブーツ新世代

金光舞

長閑(のどか)さを平和と履き違へてをり
あの日あの時あの場所の夏日かな
焼きそばの人参の知つてゐる言葉
友達の名前を呼んで夕霞
朝焼けの街や橙色の君

木内勝代

冬満月透けて見えそな胸の内
露草やあいさつかわす朝さんぽ
聞き流すことも介護や春の雲
主なき家の水仙凛として
幼子のひとかわむけて涼新(あら)た

木村暖心

墓磨くオーバーオール長閑なり
長靴の泥の溶けゆく蝌蚪(かと)の水
水に空蝌蚪に二本の足生えて
長閑さに頭離れぬ笑顔かな
長閑さや頬にぱたぱた襟当(えり)たり

神山喜美代

送迎車遠回りして花の昼
曼珠沙華燃ゆ白寿のバースディ
何も彼も覆ひつくして雪浄土
急ぐこと今更なくて去年今年(こぞことし)
元朝の酔ひの最中能登の地震(なゐ)

小林勝子

室咲きやフジタの裸婦の肌白し
園児らの網とバケツと夏来る
不器用ね妻の笑いと心天
壁黒く塗りたる昭和金亀子(こがねむし)
家々の薔薇咲き乱る通り道

初東風や龍の文字凧昇り行く
春一番麒麟の如き雲流る
ぶらんこの微(かす)かに揺るる子らの跡
白木蓮一枝揺らし小鳥立つ
山吹や風の流れのなすがまま

小林ケイ子

柚子ひとつ浮かぶ湯槽(ゆぶね)や胸黒子(むねほくろ)
逃げ水や先頭を行く猿田彦(さるたひこ)
竜天に登り生まるる磁界かな
篝火に昂(たか)ぶる水面鵜飼舟
山繭やわがふる里のうすみどり

小林幸二

マンモスの眠る大地や長閑なる
新築の足場の高し花薊(はなあざみ)
人間の手のひらが好き蝌蚪太る
外国語満ちて温泉街うらら
鶯かくるりくるりと観覧車

齊藤栞

物影のどこか優しく春に入る
おはじきの一人遊びや梅雨深し
夏空へ大きく夢と書いてみる
蔦紅葉ふれれば赤い色落とす
冬空も道もわがもの歩かねば

斉藤秀子

鍬音(くはをと)やまとはる二つ初燕
土留(とど)め杭打つ声空へ朴の花
死ぬ時の病名得たり春の雹(ひょう)
夕映えの柿棹置きて座り込む
名ばかりの国道この頃青大将

齊藤博

代替りの家々になき松飾り
非通知の電話の鳴るや春の昼
青嵐(せいらん)や千枚棚を吹き抜くる
喝采の男子シンクロ文化祭
小春日や地図を手に路地異邦人

坂根陽子

佐藤俊春

春埃払ひてここへ座れよと
雲ひとつ動かず汗の零(こぼ)れ落つ
ふんだんに山と湖見て澄める秋
貰はれて胸に拭かるる林檎かな
爺婆(じじばば)も着飾りて佳(よ)き七五三

塩野薫

はじまりは寒の鮃(ひらめ)のうらおもて
目刺焼く夜空いよいようつくしく
咲き満ちし桜並木や明日手術
金婚を讃へて欅(けやき)新樹かな
筑波嶺の裾まで晴れて豊の秋

清水次男

雛まつり男勝りの姉がゐる
我は釣り妻子は土手で蓬摘む
手を引かれ茅の輪くぐりを父ちやんと
ひたむきに山車を曳く子の片えくぼ
秋深したづねし友は天の国

清水久枝

水の扉へ飛び込みし蛙かな
しばらくは流れにまかせ夏祓(なつばらへ)
和紙白き泰山木の花ひらく
大漁の網ひくごとき鰯雲
寒晴や溶岩色の電波塔

鈴木二郎

お彼岸に一足早く猫昼寝
身のこなし傘寿を想い年の暮
宮参り鳩とたわむれ七五三
新米に魂をこめ杜氏唄(とうじうた)
尺玉の音と火の糸しだれ落つ

鈴木敏雄

淋しさの分だけ群れる苜蓿(うまごやし)
竹の秋しづかに冷める登り窯
荷崩れのやうな昼寝の家族かな
秋立つや指をはなるる駒の音
枯野抱く山へ星々降りてくる

原宿の甘辛コーデ薊(あざみ)かな
のどけしやお焦げオムレツ父の味
蝌蚪(かと)たちが藻のない川に里帰り
妹の小さな両手蝌蚪掬う
放課後の長閑な空は笑顔なり

高木茉利

一徹な父は鉄道員(ぽつぽや)つくしんぼ
チアの子の青きシヤドーや風光る
半夏雨黒衣の裾をひるがえし
白蓮のすつくと青き風の庵
春雪を踏みつ八十路へ光る君

高瀬チエ子

仏の座初め杖つく私かな
春の雨子から挨拶気が晴れる
新緑に静かな流れ身をまかす
秋分の日母の笑顔が目に浮かぶ
雪帽子ドアを開けると門柱に

高野英次

夕暮やちょっと見にゆく桜かな
坂道の菜の花ふえて空も青
立ちどまり五月の風に吹かれおり
自転車に野菜はみ出す夫の汗
十月の花束胸に傘寿かな

瀧沢潤子

七難に効くクリームとふ春の夢
句に寄する今年の望み白寿かな
雪の道足跡に礼朝刊来
早梅やほころび並ぶ無人店
萎えし葉に如雨露(じょうろ)のしぶき夏の夕

田中信子

空白の歳月拾ふ桜かな
年毎の涙もろきや花仰ぐ
花の下影なき子らの遊びをり
枝垂桜かくす春日の局の間
舟運の江戸まで三里花筵

對崎フミ

津田艶子

松飾り吹かれてどこに御座すかな
川筋を占むる花菜の黄のうねり
青葉茶屋媼手招き里訛
秋気清み朝の小鳥の喧し
冬ざれや港に空の観覧車

露崎榮三

初詣手の温もりの五円玉
玻璃越しの山吹揺るるランチカフェ
マッターホルン背に妻はサングラス
いろは坂にほへとちりぬ紅葉かな
雪雲の裂け目に入り日能登の海

土居かえな

野良猫の喉鳴らし合う長閑さよ
水濁し追いかける子や蝌蚪の群れ
参道の灯のごとき花薊
そよ風に小さく震え花薊
猫の見る薊の花の羽虫かな

土居雅美

公園の四辺に人や春深し
泣く友と日傘わけあうベンチかな
数百の出店の解体満月
息白し制服採寸会場へ
成人の日のキラキラの下瞼

長峯静子

春暁や米寿の夫のひとりごと
永き日や復習う三味の音勧進帳
お喋りの弾む三婆恋の猫
帰る雁 甍を渡る時の鐘
人形の頬の冷たき近松忌

中村和子

かざぐるま君がストップモーションに
蝸牛潮騒つれて佇めり
笑む妣の紬を肌に後の月
硝子戸の曇りに気づく今朝の冬
千代の春着付けて送る二十歳の子

喚声が春野を巡る土手滑り
摘草の姉さん被り母偲ぶ
大根の花に魅せられ絵手紙に
雉鳴くやひかり溢れる入間川
蔵の街歴史を語る鯉のぼり

並木伸雄

閑まりて安居の気配平林寺
ヨーヨーや伸びて縮んで秋の空
流星や都会で探す句読点
太鼓橋水面の紅葉渡りゆく
乾鱈や北から帰る夜行バス

新村洋子

春疾風ストレスすべて飛ばしたい
百合の芽を避けて尻餅怪我もなし
除草剤振って直ぐ様塵出しに
二年目の月鈴児鳴き白湯啜る
湯の煮えて湯婆を作る皺増す手

忽滑谷春雪

人日や温き玉子を手に受くる
やはらかに膨らむ大地下萌ゆる
白無垢の紅くつきりと桜舞ふ
竜胆や木道乾く山日和
絶ゆるなき香炉の煙冬の寺

野村桂子

動けない満員電車長閑だね
年老いた波濤の骸長閑なり
空の蝌蚪器用に泳ぐ真珠湾
針折れて長老消えた蝌蚪の里
青年期野山に枯れた薊あり

長谷部澄香

秋彼岸いま墓碑銘の無き墓前
冬ざるる花好きの亡き後の庭
佇みて屏風岩奥藪椿
料　峭や出店に大粒団子五種
東京の御苑緩りと渡る蛇

葉月星子

短夜や小さき夢の続きけり
震災や長きブザーに凍りつく
認知症進みし調らせ夜半の冬
ふりむけば墓地に一輪白き百合
早起きし合否待ち侘び春立てり

平田　記美代

梅雨晴れに孫らと帰省富士笑う
雑草の心拍響く初夏の庭
おおい雲かすかに動く夏景色
夏の海五感で傍受古希の吾
茹(ゆ)だる夏この先海よと呪文かけ

深見　眞貴子

渓谷の石に零るる華鬘草(けまんそう)
わが掘りし筍二本やはらかし
石楠花(しゃくなげ)や水源辿りにほひ来る
ゆふぐれの御所の甍(いらか)や春の闇
洞床に山芍薬(やましゃくやく)のすがすがし

福島　花野

足癒えて桜吹雪の土手に立つ
天をつく沼杉(しょうさん)若葉不染の碑
草茂るままなる庭や野草園
ようこそと良くぞ迷はず初燕
花は葉に隠(こも)りがちなる老二人

古畠　美知子

湖(うみ)すこし見えて峠の山桜
悩みごと少し解(ほぐ)れて涅槃西風(ねはんにし)
ちやん呼びの同窓生や夏祭
楽しみもコロナで消えし菊花展
道問へば差す指細し冬の月

星野　直子

下萌や未来を託すこの児らに
物の芽に屈(かが)む我が影まぎれなし
影あるは命あるなり青き踏む
初花や遠き想ひの肩車
老いゆくは水温みゆく如くなり

細野　榮美子

羊水に浮かぶ勾玉（まがたま）春の海
背走背走センタージャンプ雲の峰
尼寺の音なき修羅や蟻地獄
月光や影踏みなせぬ影なき子
荼毘（だび）の間の水かげろふを白障子

益子　さとし

雲も皆歩みを止める初桜
雀の子送電線にファソラシド
木漏れ日のスローバラード花衣
玉の汗拭う五月の路線バス
宵花火ワイングラスの抽象画

舛田　智哉

失語夫の声のおぼろや夜をひとり
歳時記のページに生きる青嵐
水攻めを耐えし忍城月涼し
返り咲く寺の山吹襲（びじ）塒ねむる
亡夫の名で届くハガキや春寒し

松本　みち子

腰おろす石の温もり冬となり
日当りて枝に無駄なき枇杷の花
木の実独楽並べて廻す独り言
猫の耳ぴくりぴくりと春の雪
花は白風船かずらのさみどりに

丸山　靖子

小春日や絵本繰（く）るごと散歩して
満月を見送る今朝の霜の花
口ずさぶ昭和の春のわらべ唄
病みて夫遠く故郷（ふるさと）夢む春
冬晴れや見知らぬ方の笑み受くる

三浦　知栄子

豆御飯話し相手の居る日がな
青梅を地に叩きつけ今朝の雨
水車小屋名も無き川に秋の音
秋夕焼フェリーの横を貨物船
四つ割りの白菜買ひてふたり鍋

水庭　幸子

たんぽぽが庭にいっぱい咲き誇り
花曇り新芽は少し無念そう
春雨に足止めされて家籠(こも)り
雨の中飲み屋で過ごす彼岸明け
春眠を楽しむうちに日は昇り

宮﨑　大

啓蟄や十二センチの吾子の靴
ふつくらと母の端切れの吊し雛
化粧塩程よく焼けて冬夕焼
御朱印の碧(あお)き昇龍寒牡丹
床暖房積み木の城の残る部屋

村田　由紀子

大丈夫生きてる証(あか)し息白し
昏睡も消せぬ肌艶(はだつや)冬うらら
朽ちるときさえ凜として寒椿
墓石をみがく吾の手に桜まじ
ふりむけば母の輪郭(りんかく)夕霞

森田　有紀子

蔵の街春着の人の列まぶし
幹あらはなほ白梅の疎(まば)ら咲き
重厚な蔵屋カフエなり桃の花
夕映えのクレアモールや梅雨晴間
時の鐘壁の影濃き残暑かな

矢島　祥子

見上げたる庭の榎(えのき)や淑気(しゅくき)満つ
土鈴振る音色それぞれ春隣
郷(さと)よりの宅配届く実梅の香
子らからの花束の中吾亦紅(われもこう)
冬の旅仰げば月の高渡り

矢島　時枝

春昼やうつらうつらで夢つなぐ
まるごとの花を落とすは子雀か
添い寝する母の団扇が手より落ち
大空に鳥語あつめて春うらら
苔むした墓石に一つ柏餅

横沢　和子

学童のマスクの列に春の風
祖母の杖借りてリハビリ花の道
起きられぬ妻を呼ぶ声梅雨の朝
秋の夜のテイクアウトで楽な妻
あれこれと思ひ出づるや冬仕度

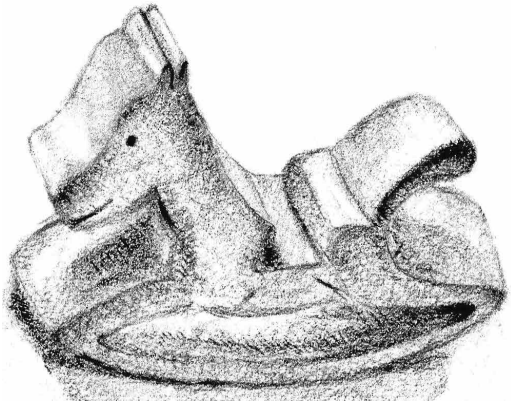
横山　功

初日の出岩塩味の駱駝チョコ
ミモザ咲く東上線の通過駅
赤い羽根つけて川越蔵の道
会館の掃除当番梅雨晴間
寒晴や酒を土産にバスに乗る

吉野一男

恥らふも相合傘や初桜
地を叩く雨音に止む蝉時雨
秋祭凜々しき宮司の馬が行く
百年の母屋見下す木守柿
時告ぐる久遠の鐘や師走空

渡邊美智子



川越文芸賞の選考にあたって

今回、文芸川越の俳句部門には、前年度より十一人と、五十五句多い、六十九人、三四五句の応募があった。

これだけ多くの句から、川越文芸賞一句、準賞二句を選出することは、この上なく難しいことであり、編集委員を悩ませた。まず、賞の候補句を十句選出して、その一句一句を慎重に検討の上、次の三句を川越文芸賞、準賞と決定をした。

川越文芸賞

やはらかに膨らむ大地下萌ゆる　　野村　桂子

「下萌ゆる」とは、早春に地中から草の芽が萌え出ることを言う季語である。この句の巧みなところは、「やはらかに膨らむ大地」の表現である。春の息吹の中、この地球という星が、やわらかに膨らんでくるのである。まるでゴム風船を膨らますように。そして、春の女神である佐保姫が白い衣を翻しながら舞い、草の芽の萌え出るを促す姿さえイメージさせるのである。また、この句は、膨らんでくる大地という壮大なものと、草の芽という小さなものを取り合わせることで、詩を生み出しているのである。川越文芸賞として紛れも無い見事な一句ではある。

川越文芸賞準賞

閉まりて安居の気配平林寺　　新村　洋子

「平林寺」は、埼玉県新座市野火止にある臨済宗妙心寺派の寺で、野火止用水を造った川越藩主・松平信綱公の菩提寺でもある。「安居」とは、僧が夏に一定期間、寺に籠って修業することを言い、元来は陰暦四月十六日から七月十五日までの三ヶ月間に行われるものである。安居は他に、夏安居（げあんご）夏行（げぎょう）夏籠（げごもり）と言い夏の季語となっている。この句の作者は、ある夏の日に平林寺を訪れたのである。この名刹は、ひっそりと静まり返り、ただ蝉しぐれの声を聞くばかりであった。その時、ふっと気が付いたのである。今、この寺は安居に入っているのだと。「安居の気配」の措辞によって、名刹の幽玄さと静けさとが立ち上ってくる秀句となっている。

川越文芸賞準賞

夏空へ大きく夢と書いてみる　　斉藤　秀子

この句の作者は、九十三歳というご高齢であられる。出句された原稿の文字も、しっかりとした達筆であることに驚かされるのである。真っ青な夏空に、大きな文字で「夢」と書いてみたのである。果して、九十三歳の作者の夢とはどんな夢なのでしょうか。この句は、まるで少女のような夢と希望に満ちた一句となってをり、その若々しい感性に胸を打たれるものがある。いつまでも、このような新鮮な句を作られることを祈念する次第である。

（石田・對崎・益子）

俳句の編集を終えて

今回、六九人、三四五句の応募の中から、川越文芸賞及び準賞には選句されませんでしたが、編集委員が優秀句として選出した次の七句を紹介いたします。

人間の手のひらが好き蝌蚪太る　　齊藤　栞

作者は十六歳の高校生です。蝌蚪、お玉じゃくしは乗せられた、人の手のひらが好きなのです。普通は、恐がるのでしょうが、それを好きとした逆転の発想が楽しいのです。この蝌蚪も丸々と太り、間もなく蛙になってゆくのです。

荷崩れのやうな昼寝の家族かな　　鈴木　敏雄

四、五人の家族が、向きもばらばらに昼寝をしているのです。その有様を「荷崩れ」と表現した比喩は巧みです。俳句は、こんな意外性のある比喩が詩を生み出すのです。

逃げ水や先頭を行く猿田彦　　小林　幸二

この作者は、第四十号（令和二年度）の文芸川越賞を受賞されています。猿田彦は、日本神話に出てくる、容貌魁偉な、伊勢神宮を守っている神です。その猿田彦と逃げ水を取り合せた、幻想的な諧謔味のある一句です。

お喋りの弾む三婆恋の猫　　長峯　靜子

三人のお婆ちゃんの限りなく続くお喋り、まさに「女三人寄れば姦しい」状態なのです。そのお喋りに負けじと激しく鳴き合う恋の猫達。三人のお婆ちゃんのお喋りも恋猫の鳴き声も、生命力に溢れているのです。この句は、そんな生命力を讃えているのです。

千代の春着付けて送る二十歳の子　　中村　和子

「千代の春」は、千年までも末長く栄えよ、と祝う初春のことです。この句は、そんな初春に、はたちの子に晴着を着付けてやって送り出したのです。つまり、成人式へ送り出したのです。「千代の春」と相まって、子を思う母親の愛情がせつせつと詠まれている一句です。

物の芽に屈む我が影まぎれなし　　細野　榮美子

早春の萌え出る草の芽を、身を屈め見つめているのです。日にくっきりと落した自分の影に、ふと気付いたのです。その影を「まぎれなし」と感じたのです。「まぎれなし」とは、他のものに変えることの出来ない、今、生きている自分の影と認知することなのです。この措辞によって一句が俄然、立ち上って来たのです。

御朱印の碧き昇龍寒牡丹　　村田　由紀子

詣でた御朱印帳に、今年の干支である碧き昇龍が刻印されたのです。碧き昇龍と寒牡丹の紅との色の取り合せも鮮やかです。更に凛とした寒牡丹も、寒気と一句を引き締める効果を果しています。

その他、数多の秀句がありましたが、紙面の制限の為に割愛させて頂きましたことを申し添えます。

（石田・對崎・益子）

川　柳

川越文芸賞

時枝利幸

三欲を捨てて佛の顔になる

川越文芸賞準賞

指宿恒子

お帰りとロボット妻が迎える世

栗原正歩

栄一に諭吉が詫びる安い円

新井　しま子

岸町の坂タンポポが日に向かい
蔓が巻き今年も藤の良い香り
田起しが未だ始まらず蓮華草
地震にも負けず富山のチューリップ
満開のつつじに蜂の入れ替わり

伊藤　南美

論文がＡＩの手に出し抜かれ
有頂天他の物指し気が付かず
ちぐはぐな五欲繕い傘寿越え
あれこれの引き出しが開くクラス会
洗っても消せない過去を噛み締める

指宿　恒子

お帰りとロボット妻が迎える世
一粒の雨を集めて大河なる
笑いじわ増えて人生よしとする
静と動ふたつの趣味で老い防ぐ
バラのとげ痛いがこりず美人好き

榎本　スミ子

さがし物今日はなかったマル印
いつの世も自給自足が生きる知恵
今日も又時代おくれの辞書めくる
諺に名言ありと気付く朝
型くずれ丁度いい服見付からず

沖田　廣志

南海のマグマ吹き出し島生まれ
人生の垢を集めて年重ね
伊勢の道タスキで繋ぐ友の汗
サイフ持ちお目当ての物買い忘れ
奥深さプレバトで知る詩の道

帯津　素峰

苦労人甘さ辛さのさじ加減
塩加減ひとつで決めた母の味
じわじわと心摑まれ共白髪
健やかに育てと祈る宮参り
世界地図こころが痛む戦禍の火

笠原明光

とぼけてるのでなく実はぼけている
物忘れ生きる意欲も置き忘れ
爺と婆顔を合わせりゃ愚痴ばかり
特殊詐欺留守番電話身を護る
定年後なおさら亭主留守がいい

栗原正歩

拒否番号捌き冷静留守電話
軽口が逆鱗に触れ角が伸び
更新の酷暑に覚悟いる暮らし
栄一に諭吉が詫びる安い円
健やかに迎える所存なり米寿

小杉佳伸

忖度が足音ひそめ迫りくる
ガンバレと人口維持に気合い入れ
天国へ移住の友と酒を飲む
詩を吟じ川柳ひねりウォーキング
アバウトに生きてノコノコ幸拾う

島田繁夫

テレビ見て行った先ざき思い出す
同窓会旧知を偲び黙祷す
老夫婦手を取り合って歩む路
リハビリで療法士さん元気くれ
縄文の漆文化は脈々と

島田精一

書いて止め書いて止めして早傘寿
白寿まで句友と共に遊びたい
補聴器が騒音のうず連れてくる
カタカナ語孫から学ぶ老いの脳
耳聡い人のおかげで世を渡る

清水元気

傘寿超え先ず先ず自活してる幸
質素でも健康家族笑顔です
さりげなくされる親切身にしみる
回想の話がつきぬクラス会
励ましへあれこれ選ぶ掛け言葉

子に指図される年令老いを知る
明治歌ふと口ずさみ我が身知る
残り火を大事に燃やし生きる欲
老いたのか知ってた漢字みんな逃げ
今日も又夕日を食べる秩父山

関　徳二

意見割れ背中と背中ごっつんこ
母の日に花に囲まれありがとう
孫からの既読の文字に胸躍る
ゴミの日は向こう三軒交流日
十五夜にうさぎ飛び出し鬼ごっこ

舘野弘子

極楽を見て来たような嘘をつき
支えます私あなたの防波堤
せっかちとおっとり夫婦うまが合い
緩やかに歩めと錆びた脳が言い
惚れ合ったお方は同じ枯れすすき

田中耕平

円満な同居生活感謝から
成田山八十路の夫婦護摩を焚き
今日の日を元気で迎えスクワット
生きた道振り向き見れば茨道
友と愚痴二合徳利を酌み交わす

寺本勝治

然りげなく知性が光る苦労人
兎より亀の人生歩みたい
年金の蛇口に合わす暮らし向き
幾山河越えた夫婦の茨道
終章はきれいな虹で飾りたい

寺本甚太

切り抜きが喋るこの世の浮き沈み
屑籠で夢を見ていた直木賞
新人の脳へ古参が垢を付け
三欲を捨てて佛の顔になる
寝たきりへ心の友となるラジオ

時枝利幸

中村紀夫

正論を吐き反対を封じこめ
積み上げた努力いつかは花開く
賃上げが物価上昇引き金に
両親の病い切っ掛け医の道へ
若者がひとり気を吐く将棋界

中村久雄

老いてなお魅せる踊りの手の仕草
初デート心弾んだ遠い日々
じっくりと選んで外す運の無さ
洗い張り糊の香りに思う母
何気なく知恵の輪外れ孫唖然

新田弘子

スクープの的に真相晒される
ゼロからの奮起希望を忘れない
思い出の旅持ち帰る箸袋
変身の魔術化粧が見せつける
価値観を保つ夫婦の車間距離

野本一史

期待値を込めて明日へ色を足す
失敗も織込み済みで種を蒔く
少しずつ膨らむ希望張る根っこ
好きな色だけで余生の夢描く
残り火に意地を焚き付けまだいける

平柳一帆

年輪へ生命育む樹々の声
泣き声がママを呼んでる二十四時
熨斗袋こころばかりで済ます義理
ハンコからサインに代わる身の証し
寝ころんで駅伝を観る三が日

古川正明

剽軽の話題で咲かす笑顔の輪
不幸癖酒がこころを中和する
筒抜けの内緒話しに尾びれつき
山車に蔵露天に人出おかめ舞い
すす払いおせち刻めば除夜の鐘

本間四郎

盆栽へ天女の舞いの芸をさせ
奇を衒いへまをするよりマイペース
ＡＩに修正させる一夜漬
然りげなく居ても伝統遵守する
七難へスマイルポーズ持ち歩く

正木浩

コロナから朗報を待つ高齢者
若いころ浪費しつつも友大事
妻亡きが私の浪費放置する
買い物は自転車うまい高齢者
一輪挿し妻の仏壇賑わせる

三田地輝憶

信言に家族の夢が埋もる里
想い出を消せない星に平和恋う
月明り心の糸に母思う
青春は都市砂漠行く開拓者
余生とは瞬きと知る遠花火

武笠清治

両国のマス席マスクとれました
アレだとよ大賞直ぐに決定す
残業を残業させて調べおる
うらやまし院内走る三歳児
梅桜次は藤だとテレビ追う

矢澤俊美

底冷えに湯婆代りの猫を抱く
極寒を愚痴り炬燵へ潜り込む
ザル法の穴から漏れる黒い金
掬っても灰汁が出てくる人の性
物価高晩酌の日を減らされる

我妻信子

愛という絆を結び半世紀
介護する母の笑顔が児に戻り
赤ちゃんの泣きがやまない自己主張
ルーキーの活気戦力倍加する
待ちに待ち指輪もらった薬指

渡辺健男

焼け石に水の一滴少し寄付
嫌な奴尻尾は振らぬ老いの意地
神仏けちらしたかな能登の鬼
ハーモニカ胸打つ曲も妻逃げる
雨降りと知ったかぶりは嫌われる

川越文芸賞の選考にあたって　川柳の部

川柳部門の選考については、投句数百五十五句の中から編集委員三名がお互い三句～五句ずつ選び出しそれを基に互いに意見を交わしながら、それぞれの作品に踏み込んで討議した結果、三句に絞り込みました。今回の投句数は前回よりすこし多く、ベテラン川柳家が高齢で投句出来なかった一方、新人の方の作品が少し増えた様に思います。また、いつもながら若い人達の投句が無かったのはとても残念です。川柳は日常生活の中から句を詠むと言われ、一般の人たちにも理解されやすく、親しまれ、共感されやすいと思います。それぞれの生活の中から楽しく詠んで共感されるように表現するところに作句の特徴があります。川柳は十七音字の文芸ですが、喜怒哀楽や、可笑しみなどを入れて作句しますが、短編小説に匹敵するドラマがあるという人もいます。

あるベテランの川柳家は自分をもっとも大きく育ててくれて、人と人との交流を促し、自分の生きがいに大いに役立っていると言われています。また作句する時は時代の証を詠まなければならないとも言われます。それも頭に入れて選考しました。

川越文芸賞

三欲を捨てて佛の顔になる　　時枝　利幸

人間には欲は欠かせないと言われますが、ある年齢を過ぎると、自分を抑え、家族や周りの人々から親しまれ、尊敬され、穏やかで、幸せいっぱいの顔が見えて来ます。まるで仏の温顔を彷彿とさせるのです。この句は人間賛歌の詩と言えます。

編集委員三人で話し合い文芸賞としました。

川越文芸賞準賞

お帰りとロボット妻が迎える世　　指宿　恒子

この句は時代の先取りというか、証として素晴らしいと言えます。高齢化が進み一人身の家ではロボットと会話したり癒されたりして、孤独を解消し潤いの時間を作る時代に成りつつあります。この句は時代に寄り添って敏感に作用し作句された素晴らしい句だと思います。

川越文芸賞準賞

栄一に諭吉が詫びる安い円　　栗原　正歩

これも時代にマッチした秀句と思います。

新札の発行、キャッシュレス、円安など時代の曲がり角にあり複雑な世の中に成りました。穿ちの効いた秀句だと思います。これからも温かくほのぼのとした時代に沿った句を沢山作ってみて下さい。

（三田地・野本・寺本）

川柳の編集を終えて

◎「文芸川越」第45号は、編集に加えて川越文芸賞の選考を行いました。今回投稿された川柳の一句一句を読み終えて感じたのは、世相や時代のめまぐるしい動きに着想した句が、いつにも増して目についたことです。

◎実際に長いコロナ禍を経ても、大地震や洪水などの自然災害、極端な円安、物価高騰、政治家の裏金問題、ＡＩ化、キャッシュレス化と大きな変動が続いています。川越文芸賞においても川柳部門は、時代の動きを巧みに捉えた二句が、編集委員の共感を集めて準賞に選ばれました。

◎川柳は自らを軸に据えた人間風詠であると言われています。もちろんその点でも、味わい深い句が多く寄せられました。編集委員一同、一句一句吟味を重ねた上で、特に趣ある秀句を取り上げました。

■世相や時代の動きを巧みに捉えた句

地震にも負けず富山のチューリップ　新井　しま子
論文がＡＩの手に出し抜かれ　伊藤　南美
世界地図こころが痛む戦禍の火　帯津　素峰
正論を吐き反対を封じこめ　中村　紀夫
ザル法の穴から漏れる黒い金　矢澤　俊美

■自らをしっかりと中心に据えた句

さがし物今日はなかったマル印　榎本　スミ子
人生の垢を集めて年重ね　沖田　廣志
物忘れ生きる意欲も置き忘れ　笠原　明光
天国へ移住の友と酒を飲む　小杉　佳伸
残り火を大事に燃やし生きる欲　関　徳二
変身の魔術化粧が見せつける　新田　弘子
うらやまし院内走る三歳児　武笠　清治
嫌な奴尻尾は振らぬ老いの意地　渡辺　健男

■身近な人への深い思いと感謝にあふれる句

老夫婦手を取り合って歩む路　島田　繁夫
耳聡い人のおかげで世を渡る　島田　精一
さりげなくされる親切身にしみる　清水　元気
孫からの既読の文字に胸躍る　舘野　弘子
支えます私あなたの防波堤　田中　耕平
成田山八十路の夫婦護摩を焚き　寺本　勝治
洗い張り糊の香りに思う母　中村　久雄
妻亡きが私の浪費放置する　正木　浩
介護する母の笑顔が児に戻り　我妻　信子

■物ごとの見方と表現がユニークな句

年輪へ生命育む樹々の声　平柳　一帆
山車に蔵露天に人出おかめ舞い　古川　正明
盆栽へ天女の舞いの芸をさせ　本間　四郎

◎次号では、より人間味にあふれる秀句、鏡のように時代を映しとる新鮮な秀句に出会えることを楽しみにしています。

（寺本・野本・三田地）

小　説

川越文芸賞

栞をはさんで

宮澤果奈

聞きなれたチャイムが、今日の帰りのホームルーム終了を告げる。いかにもベテラン教師といった風情で数学を教える担任の笹田先生がまだ話しているけど、クラスメートはチャイムを機にがやがやと動き出した。部活動に急ぎたい人、早く帰りたい人、用事はないけどだらだら話したい人達。それぞれの道に分かれていく。

工藤智恵はリュックを背負い、軟式テニスのラケットを肩にかけて、賑やかなクラスを抜けて更衣室へ向かった。梅雨だというのに強い日差しが照りつけ、真夏であるかのようにじっとりと汗がにじむ。

先週の大会を最後に、川越市立中央かがやき中学校女子テニス部三年生の先輩達は涙ながらに引退し、二年生の智恵達の代に交代したばかりだった。先輩達から次期部長を任された智恵と六人の同期生達は、先輩達が引退した寂しさよりも「これからやっと自分達の番だ」という思いの方が強く、やる気に満ちた一週間を過ごしていた。四月末に入部した一年生は五人で、智恵にとって初めての後輩はとても新鮮だった。そんな後輩達もゴールデンウィークの練習や初めての大会を経て、智恵達とも良好な関係を築いている。

更衣室とは名ばかりの机や椅子が取り払われた教室に入り、体育着に着替えた。制服は畳んでリュックにしまう。コートに向かう廊下では、これから着替える部員達とすれ違い、「着替えてすぐに行くね！」「待ってる！」などと声をかけあう。ホームルームが長引いたらしい部員も到着したところで、智恵は部員を集めるために「集合！」と声

をかけた。空がオレンジ色にほんのり染まるまで、軟式テニスらしいポコンという音が響いていた。

部活動を無事に終え、家に帰ると、妹の恵理が智恵と共有のスマホでゲームに熱中していた。「おかえりー」わざわざこっちを向いて笑顔で言ってくれるのは、いやな気分はしないが、スマホ片手だとイラっとする。「ただいま」が素っ気なくなってしまったなと思いながら、部屋着に着替えていると、お夕飯のいい匂いが漂ってきた。今日は唐揚げだそうだ。母の唐揚げはガリガリな衣がついていて、いくらでも食べられてしまう。父は帰りが遅いようで、女三人の夕餉となった。

「今日はどうだった?」

最近、母の杏子は口癖のようにこれを聞く。恵理は、今日学校で起きた珍事件を発表し始めた。恵理はいつも楽しそうだなと、智恵はみそ汁を飲みながら思っていた。

「智恵ちゃんは? どうだった?」

「うん……。別に、普通かな」

大して語ることもない、普通の日だった。

「そう、普通が一番だよね、そういえば、今日のお浸しは智子ちゃんからもらったの」

智子は、杏子の妹で、工藤家の近くの母の実家に住んでいる。智恵は、智子のことが昔から好きだった。小学校の低学年のときはよく遊んでもらったし、近所だから顔を合わせることも多い。駅前の大型本屋に勤めていて智恵も何度か買いに行ったことがあった。杏子ともずっと仲がよく、今日のように、ご飯をお裾分けしあうことも多い。

夕飯を食べ終え、鏡に映った顔を見て、ため息が出る。朝晩化粧水や乳液をつけ、気をつけているのに肌にポツポツとニキビができている。思うようにいかない自分の身体に、イラっとすることが増え、智恵は「いらいらポイントカード」と呼んでいる。

学校では期末テストの範囲が徐々に発表され、その度に「ええー!」と反応する男子のうざきこと夏の夜の蚊のごとし、と思ったが、あまりのつまらなさに智恵は自分にもげんなりした。嫌だろうが、なんだろうが期末テストはあるのだから、わざわざ反応しなくていいのに、と今日もいらいらポイントが加算されてしまう。

テスト前二週間の部活動が停止になった期間に、智恵は男子テニス部部長の田所とメッセージのやり取りが増えていた。最初は部活動の練習のことを連絡しあっていたが、なんてことはないメッセージが増えた。先日はたまたま帰る時間がかぶり、帰る方向が同じだからということで途中まで話しながら帰った。

歩道を彩る緑が濃く、なるべく日陰を選びながら歩いていた。高校はどんな所を考えているのか、という話になり智恵は未定だと答えた。田所は学年でも十本の指に入る成績らしいから、きっと偏差値の高い所を考えているのだろうと予想したが、まだちゃんと考えていないという意外な

答えと共に、小学生の妹が今、精神的に学校に行けないから、母にもなるべく精神的な負担をかけないようにしたいという、思ってもみなかった状況を知ることになった。
智恵が田所と一緒に帰ったのはその一回きりだったが、メッセージのやり取りは続いていたし、廊下ですれ違うときも、簡単に言葉を交わすようになった。
金曜日にテストが終わり、解放感とともにコートへ向かう。久しぶりだから、みんな怪我をしないようにしないと。基本的なメニューで身体を慣らしていこう。思わず足取りが軽くなり、久しぶりの部活を楽しむつもりでいた。コート内の整備に励んでいる田所の姿をみとめた。熱い風が吹き、智恵の肌の上を滑っていった。
翌月曜日から、先週の期末テストが返却された。簡単なミスでじわじわと点を落としたようで、全体的に中間テストよりも点数が下がった。得意なはずの英語は手ごたえがあったと思っていたから、余計に落ち込んでしまった。窓の外は智恵の心模様とは全く異なり、真っ青な空に飛行機雲が真っすぐな線を描いていた。
気持ちをなんとか切り替えて臨んだ部の練習を終え、着替えが済んだときに、先週からよそよそしいと感じていたテニス部の同期生の石川由奈が、ダブルスを組んでいる橋本彩乃に連れられてやってきた。
「由奈、どうしたの？」
「智恵ってさ、田所君とつきあってるの？」
由奈がなにか言いたそうだったのに、口を開いたのは彩乃だった。
「ん？　別にそういうのじゃないけど」
「この前さ、一緒に帰ってたよね？」
もじもじしている由奈と彩乃を見比べる。
「あのときね、部長同士だからね、顧問の愚痴とかしゃべってただけで、たまたまだったし、一回だけだよ！」
二人は納得したようで、「変なことを聞いてごめん」と帰っていった。残された智恵は、さっき全身に吹きつけたばかりの制汗剤をもう一度首に吹きつけた。
上履きからスニーカーに履き替え、田所とはあまり連絡を取らないようにしようと思った。メッセージの通知が来ていることに口元が綻んだり、なにか力になりたいと思ったりしたけど、別に好きとかそんな感情ではない。
「テスト返ってきたんでしょ？　どうだった？」
家に帰ると、杏子がリビングで待っていた。内心むっとしながら、見せないともっと面倒くさいと思い、杏子にテストの結果を見せた。結果についてなにか言われると思っていたのに、聞かれたのは全然違うことだった。
「智恵ちゃんは、高校はどのあたりに行きたいの？」
適当に知ってる名前の高校を挙げると、杏子は背をすっと伸ばして、
「そうなの？　じゃあ、頑張って勉強しないと！」
と本気モードになってしまった。点数が下がったことも

悔しかったし、由奈や田所のこともあって疲れている今日は勘弁してほしいと思って適当に返答していたのが良くなかった。最近スマホを見すぎと言われたときに、いらいらポイントカードが埋まってしまったようだった。

「大丈夫だよっ！　もう構わないで！」

自分でも驚くほどの声で告げて、部屋に閉じこもった。情けなくて涙が出てくる。こんなことで涙が出てくる自分に嫌気がさし、もっと止まらなくなってしまう。杏子も追いかけても仕方ないと思ったようで、部屋まで来ることはなかった。どうしてわかってくれないんだろう、どうして自分は素直に伝えられないんだろう。

夕食前に父にも智恵の志望校が伝わったようで、何も知らない父は嬉しそうに高校受験について、さらに自身の高校時代の話をしていた。食事を終えると杏子が何か言いたげにしていたが、智恵は気づかないふりをして、部屋に閉じこもった。もう、この家にいることに疲れてしまった。

そっと荷物をまとめて、杏子が風呂に入っているうちに、玄関からそっと外に出た。近くの公園までまずは行こう。そこで、今後の作戦を練ろう。外は思っていたよりも暗くなっていた。歩き出して百メートルも行かないうちに、明るいLEDの街灯の下で今、二番目か三番目に会いたくない人に出くわしてしまった。

「あれ、智恵ちゃん。どうしたの、こんな時間に」

真正面で智子がひらひらと手を振っていた。どうやら仕事帰りのようで、智恵が答えに戸惑っていると、「お茶でもしてく？」と首を傾げる智子に、言い訳が思い付かず、うなだれるようにして頷いた。智恵の初めての家出は、わずか家の前の道路内で終了となってしまった。

「それで、どうしたの？　そんな荷物抱えて、こんな時間に」

智子は二人分のマグカップにお茶をなみなみと注いだ。智恵が言い淀んでると、大きな目がクルンと音を立てそうに智恵を見つめる。

「もしかして、家出でもした？」

「う、うん」

言い当てられてしまうと、急に自分のしたことが幼稚に思え、恥ずかしくなった。

「そうかそうか。それじゃ家に呼んじゃって悪かったね」

「怒らないの？」

「私が怒ってどうするのよ。でも、もう外は危ないから、今日はこのまま家にお泊りしちゃいなさいな。杏ちゃんには、私から伝えておくから」

「ありがとう」

智子には、素直に感謝の気持ちが伝えられる。それなのにどうして、母には素直に言えないんだろう。智子はすぐに杏子に電話をかけているようだ。自分がいかに保護される身であるかを実感していると、智子が笑顔を浮かべて戻ってきた。

「杏ちゃんに連絡したよ。心配してたけど、泊っていっていいって」
「迷惑かけて、ごめんなさい」
「それよりさ、どうして家出に挑戦したの？」
期末テストの成績が芳しくなかったことで、杏子ともめたことを話した。田所とメッセージを通じて励まし合っていたことや、それが実は嬉しかったこと、それも全部杏子に否定されたような気持ちだったことも、智子が相手だと不思議と話すことができた。
「色んなことがあったんだね」
「うん。智子ちゃんには素直に話せるのに、ママには話せなくなっちゃう」
「ママだからだろうね。杏ちゃんは智恵ちゃんのこと、心から大切に思ってる。それはわかるよね。でもママだから心配になったり、つい口うるさくなったり、先回りして全部言っちゃうんだと思う」
「わかる……」
智子はすごい。智恵の思っていることや感じたことを言葉にしてくれる。
翌朝、智恵は智子と簡単な朝ごはんを食べてから、智子に連れられて家に帰った。杏子はなにか言うだろうと思っていたが、「おかえり、智恵ちゃん」とだけだったことに智恵は驚いた。杏子は智子をリビングに招き、お茶を淹れていた。智恵にも声はかかったが、断ってしまった。部屋に戻ると、待ってましたとばかりに恵理が尋ねてきた。
恵理と話してしばらく経ってからリビングに行くと、杏子と智子の間で、今年の夏休みの過ごし方を検討していた。智子は智恵に気が付くと、手招きをして告げた。
「智恵ちゃんさ、夏休みうちで勉強しない？　ずっと家にいても疲れるでしょう」
魅力的な誘いはすぐに決定し、その場で約束事も決まった。週に四日は午前中が部活動で、お昼ご飯を家で食べてから、宿題を持って智子の家で過ごす。宿題をやること、「智子ちゃん文庫」は好きに読んでいいこと、冷蔵庫の中は好きに飲んだり食べたりしていいことが主だった約束事だった。
智子が帰宅すると、智恵は杏子に尋ねた。
「夏休みのこと、なんであんな話になったの？」
「智ちゃんがね、ふと提案したのよ。夏休みの少しの間くらい距離を置いてみればって。智恵ちゃんのことを心配するあまり、うるさくなっちゃってごめんね」
「ううん。ありがとう」
こうして訪れた夏休み初日は早速部活で、大量の汗が噴き出す事態だった。熱中症防止のため、決まりがたくさんあるが、初日は具合が悪くなる人も出ず、無事に終えることができた。帰ってシャワーを浴びると少し暑さがマシになったような気がした。
お昼は、杏子と恵理と一緒にそうめんを啜り、宿題を持

参して智子の家に向かう。今日は智子の仕事が休みだから、インターホンを押せばいい。
「はーい！」
　という元気な声がしたかと思うと、智子が勢いよく玄関を開けた。好きに過ごしてね、と言われたが、「智子ちゃん文庫」をまだ見ていないから、案内して欲しいとお願いした。智子が住んでいるのは実家だが、智子の両親、つまりは智恵の祖父母は仕事の都合で県外に暮らしている。結婚を機に家を出た杏子の部屋が、今は「智子ちゃん文庫」になっているのだと、先日杏子から聞いたばかりだった。小さいときから遊びに来ているが、リビングで過ごすことが多く、智子や杏子の部屋に行ったことはなかった。
　「智子ちゃん文庫」は、窓を除いた壁際の本棚に床から天井までぎっしり本が詰め込まれていた。中には話題の漫画本も収まっていた。圧倒されつつ、智恵は初めてこのことを智子にたずねた。
「智子ちゃんのおすすめの本ってなに？」
「最近は、今だからこそ読む児童文学にはまってるかな。恥ずかしながら、推薦図書とかってあんまり読んでこなかったんだよね。『読みたい本は自分で見つけてやる』って謎のプライドを持ってたの。でも最近ふと読んだら、すごく面白かった」
「ふーん」
「いつかね、ここにある本を貸し出したり、読書会を開いたりしたいんだ。一気にたくさん買えないけど、少しずつ増やしていって、いつかそんな私設図書館を開くのが、私の夢」
「夢……。智子ちゃんは、将来っていつ決めた？　高校はどこに行きたい？　っていうことは、将来どうしたい？　ってことでしょう。勉強する意味とか、やりたいことがわからなくて、決められないんだ」
「ふむ。私が智恵ちゃんくらいのときは薬剤師になりたいと思ってたの。かっこいいからって理由で。だから理科も数学も頑張ったつもりだったんだけど、高校生になったらどうしても全然できなくて、これはだめだと諦めたの。それからは、特になりたいものもなかったし、いよいよ就職するっていうときに、私は本を読むことが好きだと改めて思って、本に携わろうと思ったの。だから、将来を見据えて過ごしていたわけじゃなかったな。参考にならないよね。あと、勉強する意味って人それぞれだと思うけど、私が思うのは、色んなことを理解できて、色んなことを考えられるようになるためだと思うの。そのために想像力を鍛えることが、勉強するってことなのかなって最近は思う。もちろん、これが正解ってわけではないけどね」
　初めて聞く話と智子が語る言葉に、智恵は真剣に耳を傾けた。頷くだけで何も返せなかったが、智子の言葉は智恵の胸にすとんと収まった。
　翌日も智子の家に行くと、罫線もなにもない、A5サイ

ズのルーズリーフと茶色の手帳、そして刺繍でできた栞をプレゼントされた。栞は迷子にならないように木の枝を折って道しるべとしていた「枝折る」という言葉が元になっているらしい。やがて、「しおり」はここまでたどり着いたという到達点を意味する言葉となったらしいということを智子が教えてくれた。

「ここに、読んだ本の感想を書いたらと思って。智恵ちゃんはイラスト描くのも上手だからイラストにしてもいいし、文章で書いてもいいし。中身は見せなくていいからね。もし見せたいなと思ったら見せて」

「こんなに素敵なのをもらっていいの？　ありがとう！」

昨日「智子ちゃん文庫」を眺めていて、好きなキャラクターの「プーさん」の原作を見つけた。これを最初に読むことにした。

夏休みの部活は、熱中症に気を付けることが想像以上に大変だった。それでも後輩や同期生と球を追いかけて、笑って過ごしている時間がとても楽しかった。田所とは練習のときに少し話すこともあれば、メッセージのやり取りもたまにしていた。通知がきて嬉しいと感じたときが、ひどく昔のことのように感じられた。

『クマのプーさん』を読み終え、「君は世界でいちばんステキなクマだよ」というクリストファー・ロビンの言葉がなぜか心に響き、あたたかい毛布にくるまれているような気持ちになったことを、ルーズリーフの始めに書いた。夏休みが終わっても、読みたい本があれば好きに読んで構わないと言われて安心した。もっと読んでみたいと思うようになっていた。

あれから智恵は、智子といろんなことを話した。智子は肌荒れの悩みから、仕事の話、本のことから、智子の昔話まで、聞けばどんなことでも答えてくれた。智子は本を読むことを強要せず、動画を見ていても何も言わない。その適度に放っておかれている感じが、今の智恵には心地よかった。そんななかで、自分では経験しえない経験を本の中でしたり、新たな感情に出会ったりした。本という窓を知り、この世界は広いことを感じていた。

やりたいことや、将来のことが決まったわけではなく、ニキビもなかなかよくならないが、『秘密の花園』を読んで、実際にガーデンというものを見てみたいと思った。これを読んでいるときには、智子とイギリス風のスコーンを焼いて、初めてクロテッドクリームをつけて食べた。ジュワッと音がするような感覚に二人で悶えるほどおいしかった。英語も好きだし、海外に興味があるのかもしれないと気が付いた。

夏休みもあと少し。以前は八月末になると夕方に少し涼しい風が吹いたと智子は言っていたが、今は夕方でも信じられないほど暑い。智恵は水色の栞を本に挟んでトートバッグにしまった。涼しい玄関を開けて、オレンジ色に染まった道を歩きだした。

参考　AA・ミルン『クマのプーさん』岩波書店

川越文芸賞準賞

純然たる友情

成本孝宏

いつまで、こんな暮しが続くんだろう……

伸一はパソコンをシャットダウンし、ヘッドホンを外すと、リクライニングチェアにもたれかかり溜め息を吐いた。

ディスプレイの表示が消えた後、電灯を点けておらず、カーテンを閉めっぱなしの自室には、沈黙が薄闇と混濁しながら沈殿した。十一月に入り、日はますます短くなってきている。母親が夕飯の支度を始めるにはまだ早い時間帯ながら、日没から時間がだいぶ経ったようだ。

先週二十六歳になったばかりの伸一は、現在職に就いていない。大学卒業後に勤めていた会社が、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で倒産してしまったのである。

就職活動で複数の企業から内定通知書を受け取った伸一は、周囲の助言に反して、一部上場企業ではなく個人経営の中小企業に進んだ。アットホームな雰囲気に惹かれたためだった。そして、伸一の直感は的中した。食事会や飲み会、各種レクリエーション等が頻繁に開催される職場の濃密な人間関係が心地良かった。また、若い自分に大切な役割を任せてもらえる仕事自体にやりがいも感じていた。後悔の念に駆られることなど皆無だったのだ。そう、コロナが全世界を席巻してしまうまでは。

コロナの勢力が拡大の一途を辿る中、伸一は一週間の自宅待機を命じられた。そして、再び出社すると仕事の量が目に見えて減った。週三日となった勤務がほどなく週二日となり、そのうち正午に退勤を指示される日まで出てきた。会社の経営が深刻な危機に陥っていることは、伸一の目にも明らかだった。払拭し難い不安を抱えつつも彼は会社の

再起を信じていたのだが、遂に倒産の知らせを受けることとなった。夏の終わりのことだった。

生計を立てる手段よりも生きがいと称するのが相応しい仕事を失ってしまうと、心に空洞が生じたような気がした。薄々覚悟はしていたものの、いざ直面してみると現実を受け止めるのは難しかった。職場での充実した日々を振り返ってみれば、自分の選択は正しかったと断言できる。その一方で、予想だにしなかった窮地の根本的な原因を探ると、己の決断に対する疑問符が浮かんできてしまう。

大学時代の友人と境遇を比べてみれば、伸一の惨状は一層克明になる。一流企業や官公庁等に勤めている彼らにとって、勤務先の瓦解など無縁の話だ。彼らとは卒業後も頻繁に顔を合わせており、コロナの脅威が広がってからも定期的にオンラインで飲み会を開いていた。その場で伸一が会社の倒産を正直に打ち明けた途端、緊張が走った。再就職にまだ切り替えられない心境を続けて吐露したら、沈黙が一座を占めた。誰も伸一に目を合わせようとしない。微妙な空気感は、画面越しだけに却ってはっきりと伝わってきた。ほどなく適当な慰め文句を掛けてもらって会話が再開されたものの、皆が伸一を避けているのは明白だった。

それ以降、伸一はオンライン飲み会に招待されなくなった。最後に参加した際の同級生たちの反応を思い出すと、伸一としても声を掛けるのは気が引けた。

こうして、伸一は職も友人も失ってしまったのだった。

更には自信までも。以後の彼は昼夜逆転の引き籠もり生活に入り、昼頃に目覚めて暁まで一日の大半をインターネットに費やす日々を送っている。画像や音楽等に絶えず接して現実から逃れたかった。コロナの収束の見通しが立たぬ昨今の情勢を踏まえ、世間では不要不急の外出の自粛が呼び掛けられるとともに、自宅での過ごし方を巡り様々な提案がなされている。しかし、このような世相でなくても彼は家から出ようという気分には到底なれなかっただろう。

伸一はパソコンのコンセントを抜くと、電灯を点けないままベッドに仰向けに寝転んで溜息を吐いた。

（いつまで、こんな暮しが続くんだろう……）

やがて室内は漆黒に近づいてきた。時間つぶしのために仮眠を取ろうと思ったが、寝付けそうにない。伸一は真っ暗な部屋の中でマスクとジャケットを身に付けた。

ドアを開けると、階下から母親のか細い声が聞こえてきた。単身赴任中の父親と電話をしているらしい。両親の話題は自分に間違いない。そう思いながら伸一が階段を降り始めると、案の定話し声が止んだ。

玄関口で固定電話の受話器を無言で握っている母親の脇を伸一が通り過ぎる際、母子は目を合わせようとしない。伸一は背後に母親の視線を感じながら家を出た。

現在の伸一にとって、インターネット以外にもう一つ日課がある。それは日没後に自宅から五十メートルほど離れた公園へ徒歩で向かい、しばしベンチに腰掛けることだ。

その公園は、住民の憩いの場として親しまれている。入口の花壇が四季折々の草花で人々を歓迎し、クヌギの点在する芝生が広がる敷地内は開放感に満ちている。ピクニックテーブルや遊具、砂場等も設置されているため、日中は老若男女問わず大勢の来園者で賑わう。

しかし、日が沈むと来園者は疎らとなり、静まった園内にはオレンジ色の街燈が灯される。その頃を見計らって、伸一は公園を訪れるのだ。時計もスマートフォンも身に付けず、人目を気にすることなくベンチに腰掛けていると、無の境地に浸れる。インターネットとは真逆の意味で、伸一にとっては必要不可欠な現実逃避の手段なのだった。

いつも通り伸一は目を瞑って、夜風が草木を撫でる音に耳を澄ませていた。すると、突如何かが迫ってくる気配を感じた。伸一が目を開けるのと同時に、彼の膝に飛び乗ってくる物があった。

オレンジ色の照明に浮かび上がっているのは黒猫だ。バンザイの格好で伸一の胸に両手を掛け、果汁が滴る巨峰の実のように潤んだ瞳で顔を覗き込んできている。ほどなく舌を大きく出し、太鼓名人の如く巧みに喉を鳴らし始めた。伸一は面食らったが、危害を受ける訳ではなさそうなので、そのまま様子を見ることにした。頭を撫でてやると、猫の疲れ知らずの喉が繰り出す太鼓演奏はますます興に乗っていく。伸一はすっかり愉快な気分になって聴き入った。

やがて黒猫は演奏を終えると、俯せに姿勢を変え、伸一の左腕を枕代わりにして眠り始めた。伸一は黒猫のパフォーマンスを労うべく、その後頭部から尻尾までを繰り返し撫でてやった。穏やかに波打つお腹やゆらゆら揺れる長い尻尾は見飽きることがない。なかなか起きそうにない猫の気が済むまで待ってあげようと伸一は考えた。

秋風が日毎に冷たさを増してくる季節であるがゆえ、近頃は伸一の滞在時間も短くなってきていた。ところが、こうして猫を膝に乗せていると全く寒さを感じない。それどころか、伸一は身体の奥から温まってくるような感覚を覚えて、いつしかまどろみ始めてしまった。

どれくらいの時間が経ったのだろうか、猫が突然飛び下りたため、伸一はふと我に返った。猫は数歩進んでから立ち止まり、こちらを振り向いた。そして数秒間伸一の顔を見つめた後、尻尾をアンテナのように立てながら再び歩き出して姿を消してしまった。

伸一も慌てて公園を去ったが、帰路では笑みが止まらなかった。玄関口では母親が靴を履きかけていた。彼女はとっくに夕飯の準備を終え、あまりにも伸一の帰宅が遅いため心配になり、迎えに行こうとしていたのだった。

母親にとって、一人息子の行く末は当然ながら目下のところ最大の頭痛の種となっている。ただでさえ心配が募らずにはいられない状況であることに加えて、夫が遠隔地へ単身赴任をしていて、息子と二人で暮らしているため尚更注意が集中してしまう。勤務先の倒産が決まった際は、伸

一の就職活動時の選択を責めたり、再就職へ向けての活動をすぐ始めるようにと叱咤激励した。しかし、伸一が本当に意気消沈している様子を見て取ると、夫と相談の上で静かに見守ることにした。その代わり、夫や親類縁者、友人らと電話をすれば話題は自ずと伸一のことに辿り着いてしまう有様なのである。

食卓で伸一は公園での黒猫とのやり取りを話した。母親からすれば正直なところ関心の薄い事柄だった。それでも、黒猫の話を聞いている間、久し振りに息子が笑顔を見せてくれたことに内心安堵していた。

その晩、寝床に就いても黒猫の顔が伸一の脳裏から離れなかった。

それからというもの、伸一の日課に黒猫との交流が加わることになった。どこで待ち構えているのか、伸一がベンチに腰掛けると、ほどなく黒猫が膝に飛び乗ってくるのだ。伸一は黒猫をクロと名付けた。

クロはいつも伸一の膝の上でバンザイポーズを決めながら、愛嬌溢れる表情と見事な喉太鼓を披露した後、伸一の左腕を枕にして眠り込む。毎回同じ展開でありながら決して飽きないどころか、クロが膝から下りる度に伸一はもっと長く乗っていれば良いのにと名残を惜しむのが常だった。

しかしながら、公園を訪れてもクロに必ず会えるとは限らない。ベンチでクロの登場を今か今かと待ちわびる。だが、一向にクロは姿を見せないまま時間だけが過ぎていく。結局は独りぼっちでベンチに長居した挙句、帰らねばならない羽目になる。そのような日も稀にあった。こういった時は帰り道の足取りが重かったし、寝付きも悪かった。

クロと会えない日が三日も続いたことがあった。伸一は居ても立っても居られなくなり、午前中に公園へ向かった。この時間帯に行ってみたことはなく、勿論クロに会える保証もない訳だが、日没まで待ち切れなかったのである。

玄関から踏み出すと、十一月も中旬に差し掛かった晩秋の曇天にもかかわらず、慣れない日差しが眩しく感じられる。それに、夜間とは比べ物にならないほど遥かに人目が気になる。幼馴染みの親にでも万一出くわしてしまったらと思うと、冷や汗が否応なしに浮かんでくる。

伸一はマスク越しでも他者から見抜かれるほどに息遣いを荒くしながら、フラフラ歩いていった。前方から徐行運転してくるパトカーとすれ違った後、少し進むと後方でドアを開け閉めする音が二度聞こえた。

「失礼します」

伸一は不意に後ろから声を掛けられた。振り向くと、二人の警察官が立っていた。マスクが彼らの鋭い眼光を際立たせている。伸一は一段と動悸が激しくなってしまった。母親以外の人との対面はいつ以来か思い出せないというのに、いきなり警察官から呼び止められたのだ。

「何をしているのですか?」

若い方の警察官が進み出て、伸一に問い掛ける。中年の

警察官がその背後から伸一の顔を凝視している。
「近所の公園へ散歩に行こうとしているところです」
「ご職業は？」
ようやく声を絞り出した伸一に、若手警察官は間髪入れず尋ねてくる。
「……無職です」
若い警察官は一瞬眉をひそめた。中年警察官はマスクで隠し切れない伸一の顎周りの無精ひげに気付いていたらしく、合点が行った様子を浮かべた。
「身分証明書はお持ちですか？」
「自宅に置いてきて、今は持っていません」
若手警察官は無表情かつ無言で中年警察官と顔を見合わせたが、すぐ伸一の方へ向き直った。
「分かりました。このご時世ですから、外出はできるだけ控えて下さい。失礼しました」
若手の方が事務的に言い残すと、二人の警察官はパトカーへと戻っていった。徐行運転で去っていくパトカーを見送ったまま、伸一はその場にしばし立ち尽くしていた。それから、夢遊病者のような足取りで公園へ向かった。
公園では、幼稚園児と引率の先生らが砂場や遊具で戯れていた。運良く空いていた定位置のベンチに座り込み、伸一は目を瞑った。幼稚園児たちの歓声が響く中、伸一の脳裏には自分が無職だと告げた際の警察官二人組の表情がまざまざと蘇ってくる。暫くすると警察官らの顔は、オンライン飲み会で失職を告白した時の旧友たちに変わった。伸一は襲い掛かってくる圧迫感に長らく身悶えしていた。
少し気分が落ち着き目を開けると、公園内に居るのは自分だけだった。先ほどの喧騒が嘘であるかのように、小鳥のさえずりだけが一帯を占めている。伸一が悪夢から覚めたような心持ちで薄日に輝く紅葉をぼんやり眺めていると、クロが不意打ちで膝に飛び乗ってきた。初めて明るい時間帯に対面してみて、クロの黒光りする毛艶の見事さに気付いた。そして、それに負けないくらい瞳を輝かせながら伸一の顔を覗き込んでくる。トレードマークの舌出しと喉太鼓も健在だ。伸一はクロと会えて、一気に気分が晴れた。
「あら？」
その時、素っ頓狂な声が聞こえた。そちらに目を向けると、プラスチックのケースを二つ持った中年女性が立っている。こちらを見ているが、心当たりはなく、幼馴染みの親ではないようだと伸一は安堵した。
「ほら、ご飯を持って来たわよ」
やがて女性はクロに声を掛けた。すると、クロは伸一の膝から下りて、女性が置いたプラスチックのケースの方へ歩いていった。
「珍しいわね、この子が人の膝に乗っかるだなんて。警戒心の強い猫なのに」
餌を食べ始めたクロの頭を撫でながら女性が伸一に言った。垂れ下がった目尻が人柄の良さを物語っている。その

柔和な笑顔が伸一に安心感を与えた。
「いつも夜にここへ来ると、僕の膝に飛び乗ってくるんですけど……。飼い猫なんですか?」
「ううん、野良猫よ。朝と夕方に餌をあげに来てるだけ」
女性に頭を撫でてもらいながらクロは一心不乱に餌を食べている。
「家で何匹か猫を飼ってるから、この子を迎え入れることは出来ないの。猫は縄張り意識が強いから……」
「……」
相変わらず女性に撫でられたまま、クロは水が入っている他方のケースに顔を移した。これまで自分にはそぶりも見せてこなかったが、クロは日々の飲み食いに事欠いているのではなかろうか。ようやく伸一はそう思い至った。
「最初は私の方に近寄って来なくてね。ケースだけ置いて私が離れると、恐る恐る餌に近付いて行ったの。そのうち私にも懐いてきたけど、多分お兄さんのように座っても膝になんて来ないんじゃないかしら」
水を飲み終えたクロは、すぐさま伸一の膝に戻ってきた。そして、普段通り瞳を輝かせ、舌を出し、喉を鳴らしながら伸一の顔を覗き込んでくる。
「あらあらこんな嬉しそうな顔をしてるの初めて見たわ。この子ったら、よっぽどお兄さんのことが好きなのね」
中年女性は愉快そうに笑う。
「そうでしょうか?」
「そうよ。猫と人間の間には建前なんて要らないからね。お兄さんと一緒に居る時が本当に幸せなのよ」
女性が去った後、伸一はクロと見つめ合いながら彼女の言葉を反芻していた。確かに飼い主ではない自分に対して、クロが損得勘定を働かせているとは思えない。また、猫と人間の間には社会的地位など介さないのだから、媚びを売る必要や義務もないだろう。やはりクロは純粋に伸一のことを気に入ってくれているのである。なぜ自分はこれほどクロとの時間を重視するのか。ようやく伸一は得心した。自分は真の親友と時間を分かち合う幸福を久々に享受できているのだ。クロが伸一の顔を見つめながら小首を傾げた。伸一が感謝の言葉を述べて頭を撫でてやると、クロは一声鳴いた。
(遂に新しい一歩を踏み出せるぞ)
送信完了のメッセージを確認後にパソコンをシャットダウンした伸一は、リクライニングチェアにもたれかかって満足気に背中を反らした。彼の膝元で寝ていたクロが目覚め、上目遣いでその顔を眺める。
伸一が軽快にキーボードを叩く音が急に止んだ自室には、カーテンの開け放たれた窓から射し込む陽光と調和しながら静寂が浮遊している。十一月が終わろうとしている今、日の出はめっきり遅くなってきた。しかし既に太陽は相当な高度に達しているようだ。朝食後に始めた作業に想定外の長時間を要して、伸一は快い疲労感を覚えた。

伸一がクロを抱えてドアを開けると、階下から母親の電話の声が聞こえてくる。階段を下りていく彼の足音がかき消されるほど、話し声は明朗だ。相手は父親に間違いない。玄関口に顔を出した伸一へ、母親は電話を続けながら手を振ってくる。照れ笑いを浮かべつつ、伸一は傍らを横切る。クロは彼の腕の中でキョトンとしている。

外へ踏み出した伸一とクロの頭上に、秋晴れの青空が広がった。うららかな日差しが実に心地良い。伸一は再び満足気に背中を反らしてから歩き出した。大人しく抱っこされているクロと共に真っ直ぐな足取りで進んでいく。マスクの下では、髭など跡形もない口元が引き締まっている。

あの中年女性と遭遇した日、伸一はクロを飼いたいと母親に申し出た。反対されるかと思いきや、母親は二つ返事で承諾してくれた。クロと出会ってからというもの、急速に快活さを取り戻していく伸一の姿を目の当たりにして、息子にとってのクロの存在の大きさを彼女も実感していたのである。そして、次に公園で顔を合わせた際、膝上のクロを伸一はおもむろに抱きかかえて立ち上がった。そのまま彼が歩き出しても、クロは伸一の顔を見つめながら下りようとしない。こうなることを待ち望んでいたかのようだった。こうしてクロは伸一宅に迎え入れられたのだった。

それから伸一とクロの絆は一層深まった。インターネットで調べた猫のケアをクロに実践することが、伸一の新たな趣味となった。その影響で輝きが増したクロの毛艶は、真新しい深紅の首輪と鮮明なコントラストをなしている。クロは一匹で出歩くことも稀にあるが、基本的には在宅して伸一の傍を離れない。伸一の就寝時とて例外ではない。そのような際、クロは伸一と一緒に入った布団から首を出し、温泉に浸かっているかのような表情を浮かべ、鼻歌を口ずさむみたいに喉を鳴らしてみせるのだ。

クロとの生活を契機に、伸一は自分以外の存在に尽くす喜びを思い出した。そこから社会の役に立ちたいという気持ちも芽生えてきた。そして今日、エントリーシートを入念な推敲の末に仕上げ、就職面接会の申込手続きを済ませたところだ。コロナ禍の不況下における就職活動が困難なものになることは伸一も承知している。だが、今はとにかく全力を尽くしてみようと前向きな気持ちが優っていた。

目的地の公園に着いた。お互いにとって思い入れが強い公園へ一緒に散歩に行くことも大切な日課となっている。とある日、あの中年女性と出会い、突如行方不明になったクロの身の上を案じていた彼女に事情を説明し、安心させるという一幕もあった。

今日そこに居るのはシルバー人材センターの管理員だけだった。帽子の下から白髪をのぞかせる老人が、せっせと花壇の萎れかけた花を掘り出し、新しい花の苗を植えようとしているところだ。敷地の地面一帯を覆う紅葉の大海原が鈍い光沢を放っている。老人は花壇の整備を終えたら落葉清掃に移る予定らしい。ピクニックテーブルの脇に箒や

塵取り、半透明のゴミ袋等が置かれている。
伸一はベンチに腰掛け、クロを放してやった。クロは芝生へ駆けて行き、仰向けに寝転んで目を細めている。芝生の上で無邪気に寝返りを繰り返すクロの様子を、伸一はしばらく微笑みながら眺めていた。
そして伸一は目を瞑る。時折吹く秋風に合わせて、落葉の海から漣が立つ。そのうち管理員が落葉清掃を始めたようだ。小気味良い箒とその合間を縫う漣の合奏は、伸一の不安が巣食う胸中まで掃き清めてくれる気がする。やがて落葉を踏みしめる足音が真っ直ぐに迫ってきた。
目を開けた伸一の膝に、クロが飛び乗ってくる。伸一の顔を見つめる瞳はみるみる潤んでいき、今にも溶け出してしまいそうだ。その眼差しから純然たる友情を読み取った伸一は深く頷き、唯一無二の親友の顔を見つめ返す。

川越文芸賞準賞

事実は小説より奇なり

井原正人

家の電話が鳴ったのは、夜八時を少し過ぎた頃であった。居間には妻の夏恵もいたが、夜のことで、何か急用でもと思い、泰造は自分で電話に出ることにした。

「ああ父さん、俺だけど……」

「おお春彦、どうした」

吉岡泰造には、二人の息子と娘が一人いる。語尾に行くにつれ、少しくぐもっていく聞き覚えのある声に、泰造は熊本に住む長男の名を口にした。

「ああその前に、いま携帯修理中だから、この電話の番号言っておくね」

そして、いつもの語尾に行くとくぐもる声で、新たな電話番号を告げてきた。泰造は、復唱しながら番号をメモり、目の前の冷蔵庫に貼りつけると、

「判った、それで?」と、先を急いだ。電話で家族と冗漫な話をする習慣を、泰造は持ち合わせていなかった。

「それが、首のうしろに腫瘍のような物が出来てさあ」

「ああ、それは脂肪腫と言って、皮膚科の病院に行くと、すぐに切除してくれるよ」

やはり、親子の体質は似るものだ、と泰造は思った。昔、父親の首のうしろに腫瘍が出来たのを、長男は覚えていてそれで電話をかけてきたのだな、と思った。

「癌なんてことはないだろうね」

不安になっているのが、くぐもっていく声に出ていた。

「悪性もないではないが、同じ体質だろうから大丈夫だよ」

「そうかなあ」

春彦にしては、めずらしく弱気であった。
「うちは家系的にも、癌になった者が一人もいないから、先ず大丈夫だ。切った後も二、三日の消毒で元通りだよ」
「それなら良いんだけど……。一応明日病院に行ってみるね。判ったら電話するよ。父さん、何時頃なら居るかな」
「午後は判らないが、午前中なら居ると思う」
「そう。じゃあ明日、必ず電話するからね」
そして、電話は切れた。

「春彦、なんでしたの?」
居間で洗濯物を畳んでいた妻の夏恵が、聞いてきた。泰造は春彦との電話の逐一を話すと、
「吹き出物くらいで騒いで……。営業先の先生にでも診てもらえば、すぐに判りそうなものを」
と、仕事で病院回りをしている長男の愚かさを語った。
「いくら仕事で病院回りをしているからと言って、プライベートでの診察は、別ではないのかしら」
妻の夏恵は、夫の短絡的な考えを訝りながらも、長男の腫れ物については、別段心配する様子はなかった。泰造にしても、自分の経験から、診察の結果が判るだけに、一向気にすることはなく、翌日電話が鳴り、何気に時計を見て、ようやく昨夜のことを思い出す有様であった。
電話はやはり春彦からであった。
「やっぱりお父さんの言う通り、ただの脂肪の塊だったよ」
「そうだろう。まあ癌でなくて、良かったじゃないか」
「うーん。まあそうなんだけど……」
かなり疲れている様子だった。
「このところ、いろいろなことがあってさあ」
声の様子から、精神的疲労が、首の腫れ物を引き起こした、とでも言いたげであった。
「何かあったのか」
直感で、一番厄介な夫婦間のことでなければ良いが、と泰造は思った。
「うーん。いま父さん一人だけ? 周りに誰もいない?」
「父さん一人だよ」
「実は他の女のひとに、子供が出来ちゃってさあ……」
弱り切った感じが、電話口から伝わって来ていた。
春彦には妻と二人の娘がいる。家族崩壊の危機が、泰造の頭を掠めた。自分の息子に不倫はまさかと思うが、まさかと思うところに起きるのが、この手の醜聞である。かつて勤めていた頃、同じ様な過ちをした同僚がおり、相談までされて、泰造には全く知らない話ではなかった。
しかし、それが実際に身内に起きてみれば、今更なじっても始まらない。泰造は、ただ父親として、度量の広さを見せるしかなかった。
「先方と少し揉めたんだけど、弁護士さんが入ってくれて、慰謝料百五十万円で済みそうなんだ」

「お金で済むなら良かったじゃないか」
泰造はつい言ってしまった。同僚のときは金銭で解決しようとして、女性の彼氏から、俺の子供かも知れないじゃないか、と言われ拗れに拗れて行ったのだった。
「そうなんだけど、ちょっとお金の都合がつかなくて……」
「そんなことないだろう」
春彦の暮らしぶりを考えると、容易に都合のつく金額のはずであった。
「通帳から下ろすと、判ってしまうから」
言われてみれば尤もな話だと泰造は思った。預金通帳は嫁が管理しているのであろう。
「それなら、父さんが一時出しておいてやろうか」
「えっ、父さん用意できるの」
父親の、それほど裕福ではなかった子育て時代を知る長男は、泰造の懐具合を心配しているようだった。
「それ位なら大丈夫だ」
「ほんとに!! 実は弁護士さんから、先方は百五十万円と言っているが、すぐに用意出来るなら、百万円で済むように出来ると言ってくれているんだ」
「判った」
「今から柏市の弁護士さんの所に持って来てくれるかな」
「それは無理だよ」
泰造は二時にテニス仲間との約束を控えていた。それにこうした金銭上の約束事は、期日を明確にすれば、多分に受領側が譲歩することを、長い経験から判っていた。
「こちらから振り込むから、それでいいだろう」
「それなら、通帳から振り込んでくれるかな」
「それもやったことがないから、無理だよ。お母さんなら出来ると思うけど、窓口からの送金でいいだろう」
「じゃあ、ちょっと弁護士さんに聞いてみるね」
「えっ? 春彦、今どこなの、沖縄じゃないの?」
春彦の「弁護士さん」と言う声が、近隣の人を指すような語調に、泰造は気づいた。春彦は沖縄への出張が多く、相手の女性も沖縄のひとだろうと、泰造は勝手に考えていたのだった。それに熊本住いの春彦に、千葉県柏市の弁護士は、どうしても結びつかないのだった。弁護士が柏市で、春彦が近くまで来ているのなら、女性は東京のひとなのだろうか。
「うん。じゃあ一旦切るからね。お母さんに絶対内緒だよ。男と男の約束だからね」
そして、電話は切れた。
電話は切れたが、泰造のなかでは、新たな疑問が生まれていた。女性が東京のひとなら、年に数回しか帰省しない春彦とは、それほど親密な間柄ではないのではないか。話が盛られていることだって、あるかも知れない。春彦の折り返しの電話が来たとき、泰造はすぐに言った。
「まさか春彦、その女性に騙されてるんじゃないだろう

ね」
「そんなことないよ。ちゃんとした立派な弁護士さんだから、大丈夫だよ」
「弁護士さんが立派でも、女性のうしろで、誰かが入れ知恵していることだってあるだろう。話だけなら、こうして春彦と話している今だって、本当の春彦かどうか判らないのと同じじゃないか」
そしてふと、近くに住む、春彦の妹の冬子を思い出すと、
「ねえ春彦、冬子の生年月日を言ってごらん」
「どうして、そんなことを言うのさ」
親子の間で当然すぎることを、大袈裟に問答していることに、春彦は憮然としている感じだった。泰造にしても血を分けた者に、正面から疑いの言葉を向けてしまったことによる、近親者ゆえの生臭さを覚えた。
「世の中話だけでは、真実は判らんということさ」
「一緒に病院に行ったのだから、間違いないよ」
「判った。それで弁護士さんは何だって?」
「父さんの振り込み方法でいいって。一時に間に合うかな」
泰造は時計を見た。窓口での送金は一時を過ぎると、翌日扱いになる、と聞いたことがあった。
「大丈夫だ」
「じゃあ、銀行に着く頃電話するから、父さんの携帯番号教えてくれる」
「春彦の携帯に入っているだろう」
「入っているけど、いま修理中だから」
そうだった。春彦の携帯はいま修理中で、新たな番号のメモを冷蔵庫に貼ったのを、泰造は思い出した。泰造は自分の携帯番号を告げると、確認のため復唱させるのを忘れなかった。
「誰にも内緒だからね。約束だよ」
「ああ、判ってる」
そして、泰造は電話を切った。

泰造は預金通帳を握ると、キャッシュカードを確認し、家の前の道路を隔てた駐車場に向かった。一時に四十分ほど前である。シートベルトを締め了ったとき、丁度進行方向左に、買物から帰って来る妻の夏恵の姿が見えた。車を発車させてすれ違うには、一声かけなければ訝しがられる路幅であり、駐車場に留まっていれば、たいてい妻は関心を示さず、そのまま玄関に入って行くことから、泰造は車の中で、その問合いを計った。
ところがである。いつになくその日は、妻の夏恵が泰造に目を止めると、運転席に近づいて来たのだった。
「どこに行くの」
窓越しから話しかけて来る妻の目が、自分を通りこして、助手席に置かれた預金通帳を見ていることに、泰造は気づいた。

「ちょっと銀行に行ってくる」
「何かあったの」
「春彦がお金を貸して欲しいって」
女性のことを話さなければ、春彦との約束は破ったことにはならない、と泰造は考えた。
「いくら」
「百万円」
たとえ自分に疑いが向けられても、百万円を謀る器量が夫にないことは、妻も知っているはずだ、と泰造は思った。
「春彦がお金を貸して欲しいなんて、何に使うのかしら。おかしいじゃない。本当に春彦なの」
「本当に春彦だよ。定期預金を解約するのに時間がかかるから、貸して欲しいって」
泰造は、我ながら上手い口実が見つかったと思った。
「時間がないから行ってくるよ」
「わたしも一緒に行きます」
言い終わるや、妻の夏恵が後部座席に乗り込んできた。
「これって、いまはやりの成り済まし詐欺じゃないの」
車が動き出すと、夏恵が言った。
「いいや、間違いなく春彦だって。俺が春彦の声を間違えるわけないだろう」
「春彦に電話してみる」
言い終わる頃には、夏恵は携帯を出して耳に当てていた。
「春彦、仕事中なのかしら。出ないわ」
「春彦の携帯は修理中だそうだ」
「営業用のを持っているから、そちらにかけてみる」
「そろそろ春彦から電話が来ることになっている……」
泰造は、心中穏やかではなかった。妻から電話されては、母親に内緒、という春彦との約束を、反古にしたことが知れてしまうのだ。
「いいの、電話してみる。繋がらなかったら、晶子さんに電話して、春彦の携帯が本当に修理中なのか聞いてみるわ」
晶子とは春彦の嫁である。泰造は妻の電話が、春彦に繋がらないことを願った。そして、自分が先に春彦と連絡を取れば良いのだ、と考えたとき、春彦の新たな番号をメモして来なかったことに気づいた。あとは、妻と自分とどちらが先か、運を天に任せるしかなかった。
泰造の携帯が鳴ったのは、車を銀行の駐車場に入れたときだった。電話は春彦からではなく、近くに住む娘の冬子であった。母親の携帯が繋がらないが、何処にいるか知らないか、と言うのである。泰造は一緒に車にいることと、携帯を操作中であることを早口で告げると、
「冬子、今どこに居るの」
「お父さんの家よ」
「それなら冷蔵庫の扉に、電話番号を書いたメモが貼ってあるだろう」

「これかしら」
「それ、春彦の現在の電話番号だから、今からお母さんに電話させるから、伝えて」
そして、すぐに電話を切った。泰造の携帯は春彦からの連絡のために、できるだけ空けておかねばならなかった。また、少しは性急な妻の動きを止めるための、時間稼ぎのためでもあった。
「冬子に電話してみて」
妻が「二人とも繋がらない」と呟いて、携帯を耳から離したとき、泰造は即座に言った。同じ車内で、自分と冬子との会話は、妻に聞こえているはずであった。夏恵が冬子に電話をかけ、聞こえてくる会話から、泰造が詐欺にかかっているらしい、との話になったとき、
「春彦に間違いないって」
泰造は電話口の冬子に聞こえるように、声を荒げた。自分が詐欺の餌食になるなど、あり得ない話であった。
泰造の携帯に、春彦からの電話がかかって来たのは、母子の会話が終わりに近づいたときであった。急いで電話を切る妻に、緊張の走っているのが見えた。
「ねえ父さん、銀行に着いた?」
「いま、駐車場だよ」
「お金を下ろしたら、そのまま機械で送金してくれるかな。機械の操作はこれから教えるから……」
「それは無理だな……」
泰造はATMのややこしいボタン操作と、春彦の恥知らずな行為を、妻に秘密にしていなければならない板挟みで、いささか面倒臭くなってきていた。
「それなら、いまお母さんがいるから頼んだら」
言うなり泰造は、後部座席に居る妻に携帯を預けた。
「えっ、お母さんいるの」
泰造の手から離れていく携帯のなかで、春彦の声が掠(かす)れるように聞こえていた。元はと言えば、春彦の恥知らずな行為が引き起こしたことである。それが母親に知られてしまったとしても、今は送金による早い解決が先だと、泰造は考えたのだった。
「春彦、お母さんだけど、急なお金の入り用って、いったいどうしたの」
電話の向こうで、春彦がのらりくらりと、言葉を濁しているらしかった。
「春彦らしくないじゃない。このこと晶子さん知ってるの」
そして、聞き耳を立てた。
「よく聞こえないけど、……ねえ春彦、本当に春彦なの?」
そこで電話は切れたらしかった。
「この声、春彦の声じゃないわよ」
「何度言わせるんだ。間違いなく春彦の声だって!」
時計は一時になろうとしていた。泰造は妻にも、怒りを

感じ始めていた。春彦は母親に詰問され、自分の不倫や女性の妊娠について話すことも出来ず、電話を切ったに違いなかった。
「お父さんこそ、耳が悪いんじゃない。春彦の声はあんな声ではないわ。春彦とは、私のほうが電話でよく話をしているんですから、間違えるわけありません」
妻の夏恵も負けてはいなかった。
「もう一度、春彦の仕事用の携帯に電話をかけてみる」
夏恵は握っていた携帯を泰造に返すと、自分の携帯を取り出し、操作をし始めた。
泰造は判っていた。今し方の、突然母親が電話に現れたことで、頭が混乱している春彦に、仕事用の携帯に出る心の余裕があるとは思えなかった。しかし、自分の携帯には、今かかってきた春彦の電話の履歴が残っている。泰造は、ここは自分が先に春彦に電話を入れ、母親に全てを正直に話すよう説得するのが、最善のように思われた。泰造の携帯が鳴ったのは、このときである。
ようやく春彦も、何が最善かに気づいて、電話をかけて来たのだ、と思ったら、電話は娘の冬子からであった。
「お父さん、やっぱりお兄ちゃんではなかったわ」
「んっ……?」
一瞬、何のことか泰造には判らなかった。
「わたし、お母さんと話したあと、冷蔵庫に貼ってあった電話番号に、電話してみたの」
泰造に、何となく時系列が判って来た。妻と春彦との電話が切れたあと、冬子の電話が春彦に繋がったのだ。妻の夏恵も、泰造と話す娘の電話の声に、自分の携帯の操作を止め、うしろの座席から、身を乗り出してきていた。
「……何回か電話していたら、ようやく繋がって、何かお兄ちゃんと声が違うので、あんたお兄ちゃんじゃないでしょうって言ったら、はじめは笑っていたんだけど、俺、お前の兄貴なんかじゃねえよ。バーカ、だって」
最後の言葉は決定的であった。誤謬の余地もない言葉だけに、反論のしようもなかった。泰造は、まんまと成り済まし詐欺にひっかかっていたのだった。
実害は被らずに済んだが、泰造の軽率な思い込みから、事件が展開していったことは間違いなかった。
「ですから、あれほど声が違うと言いましたのに」
妻の夏恵の、勝ち誇ったような声が響いてきた。
銀行の駐車場から我が家へ、泰造は敗残兵のような思いで車を走らせた。
「これからは、絶対一人では銀行に行かないで下さいね」
泰造は一言もなかった。

成り済まし詐欺にはご用心。
軽率な、思い込みにも要注意。

茶碗

竹宮吉保

〈序〉

古い文書にはいろいろと興味深いことが書き残されていることが多い。その土地の旧家である佐藤家本家の土蔵の奥から出てきた古文書には、次のようなことが書かれていた。

〈壱〉

江戸への要衝の地、武州川添藩五万石。

時の藩主永田正盛の手により、焼失していた徳川家ゆかりの常楽院の再築が成り、将軍家光はすぐに祝典の為、川添藩に赴いた。寛永十六年二月の初め、節分の豆撒きもそろそろ終わった頃のことであった。川添藩に着いた家光の一行は、藩主正盛の歓待を受け、翌朝、常楽院住職天山僧正の許に向かわれた。

藩主正盛は、常楽院にての接待役を重臣矢田宇兵衛に命じた。宇兵衛の配下に佐藤与五郎というものがあり、与五郎は矢田家の家宝の茶碗を預かり、家光に献上するよう言い渡される。

献上の日を明日に控え、与五郎は茶碗を袱紗に丁寧に包み桐箱に納めると、しばし瞑目する。進物番としての初の大役に心身の緊張は隠しようもなかった。

翌朝、与五郎は自宅で同輩の友、山部源之進と桐箱を中に向き合っていた。源之進は陶器に目のない男であった。どこで聞き知ったのか、

「茶碗をぜひ見せてくれんか」

と、乞うてきたのだった。他ならぬ源之進の頼みではあり、断り切れなかった。

「よし、少しだけだぞ」

渋々応じてしまっていた。だが、胸の内は穏やかではなかった。与五郎は桐箱の蓋をとると、袱紗の包みをほどき始めた。やがて、見事な朱塗りの肌が現れてきた。二人は茶碗に一礼する。そして、源之進は茶碗を手にして掌で上下させた。

「おいおい、気を付けろよ」

「大丈夫さ」

源之進は今度は茶碗の底に手を当て、盛んに指の腹でこすり始めた。時は過ぎていく。源之進が帰った後、与五郎は供侍の迎えの許に宅を出た。

常楽院謁見の間。天山僧正を右横に、左横には側近荒尾十郎次を従え、中央に家光が座していた。佐藤与五郎は家光の御前に恭しく辞儀を致し、献上の品を差し出した。

「当藩重臣矢田宇兵衛の家宝の品にござりまする」

「ほほう、どれっ」

家光は徐に桐箱の蓋を開け、中から家宝の品を取り出した。包みをほどくと手に取ってみた。
「うむっ、なるほど」
家光は舐めるように眺めていた。与五郎は家光の驚くほどの気迫に打たれた。家光は飽かずに眺めていた。だが、今まで茶碗のすべてを凝視していた家光の目が突如として一点に止まったかと思うと。その口から大声を発したのである。
「これはどうしたことだ」
家光の顔は蒼褪めていた。
「いかがなされましたか」
一同驚愕し、座は静まり返った。
「これを見よ」
家光の差し出した茶碗には微かではあるがヒビが認められた。それは殆ど常人にはわかるまい、それほど微妙ではあった。与五郎の顔はみるみる硬直し、額には冷や汗が滲み出、躰は小刻みに顫えを帯びてきた。
「与五郎、何とした」
荒尾十郎次の荒ぶ声が飛んだ。
「まあまあ、そう熱り立たんでもよい」
天山僧正の声がした。与五郎はいたたまれなくなり、遁れるようにその場を後にしていた。
――あの時だ、間違いなくあの時だ。今朝のあの時に間違いはない――

〈弐〉

御沙汰は謹慎、与五郎は屋敷に籠り、日々は移ろって行った。
四月、年度替わりの初登城の日、与五郎は事件以来初めて登城を許され、複雑に絡まる胸の内を抑えながら宅を出た。彼の顔には思い詰めたような重苦しさや虚無感が現れていた。茶碗の一件が重く伸し掛かり、早く茶碗を……と心は尋常ではなかった。源之進らの明るい交わりを見ても与五郎は決して加わることはなかった。唯々茶碗のみ頭にあった。あの日の状景があった。
さらに悪いことには、長い間の空白が埋めようもなくあった。これは動かしようのないことであり、与五郎は悶々として日を送った。登城日とて職を終えると即座に帰ってしまうのだった。与五郎のこのような態度は日ごとに増し、ついには皮肉な言辞を弄するようになった。
「今、桜がちょうど見頃だな。どうだ、花見に出かけないか。花の宴なんかよいものだぞ」
「それはよい。ぜひみんなで行こう」
同輩等の話すのを聞くと、与五郎は冷ややかな口調でこう言っていた。
「くだらん、そのようなことが何になる。寝ていたほうがまだましだ。遊びなど何にもなりはしない。しょせん、職務あるのみなのだ」
横合いからこのような口を出されてはたまったものでは

ない。以来、同輩達は与五郎を避けるようになった。
源之進は与五郎のことが気に懸かっていた。しかもこのところ三日ばかり登城さえしていなかった。源之進は与五郎の宅に向かった。
門を入った時、妻女のすすり泣く声が耳に飛び込んできた。源之進はしばらく玄関先に足を留めた。妻女紀久は泣き腫らした顔を与五郎に向け、顫える唇から声を漏らす。
「なぜ、なぜでございます。私のどこが……どこがいけないのでしょうか」
言葉も途切れがちになる。
「そのようなことではない。おまえには何ひとつ不足はない。このまま黙って別れてくれ」
「いやです。そんな……そんなことって……」
「聞き訳のないことを申すものではない」
「いいえ、私は不承知でございます。どこまでもあなた様についていきとうございます」
「無理無体を申すでない。もう決めたことだ」
「与五郎様」
紀久はその場に泣き崩れてしまった。その時、障子の外から下男の佐吉の声がした。
「旦那様、源之進様がお見えです」
「よしっ」
紀久をそのまま残すと、与五郎は立ち、障子を開け、なおも追いすがる紀久をつき放しながら、足早に廊下へと出て行った。が、与五郎の目にも光るものがあった。居間は二人の寝所から少々離れたところにある。柳の枝が中庭に低く垂れていた。
「待たせたな、源之進」
「ううん、そうでもないが」
「ところで、何かな」
「ちょっと。何となく来てしまったよ。お主のことが気になってな。それに、今日はどうしたのだ。紀久殿を泣かせたりして」
「そうか、心配かけて申し訳ない。いろいろとあってな。しかし、仕方のないことだ。何れはわかるが、今は何も言えん」
「いったいお主は一人で何を考えているんだ。俺をこれ以上苦しめないでくれ。例の一件は非は俺にあるのは重々わかっている。すまん、与五郎、お主のそのような姿を見ていると、たまらなくなってくるのだ。いつかこの詫びはしなければ、と。お主の心はわかりようもないが、どうか、今後、紀久殿を泣かせるようなことはやめてくれ」
「いまさらどうにもならんではないか。源之進、悪いが今日のところは帰ってくれ。俺には俺の生き方しかできないのだ」
「そうか、わかった。今日はこの辺で帰る。だが、どうか紀久殿を大切にしてやってくれ。呉々も短気なまねはやめるんだ。頼む、与五郎」

源之進は虚しい心を残してその場を去った。帰りの足取りが重かった。与五郎はこれからどうなってしまうのだろうか。源之進は不吉なものを感じた。

それから間もなく、与五郎は禄を放れて、誰にも知らせずに宅を出、そのまま旅の人となった。その後与五郎の行方は杳として知れなかった。

〈参〉

二年後、二月四日深夜、川添の佐藤与五郎の屋敷。与五郎は今、白装束で座していた。その右手には白布に覆われた小刀を持ち、果てようとしていた。夜の静寂の中を蠟燭の炎が揺らめいていた。茶碗を買い入れるためには稼がねばならなかった。それも一刻も早く。用心棒しかなかった。

――俺にできることはそれだけだった。訳もなしに人を斬ることしかなかった――

それはおよそ与五郎には似つかわしくなかった。あれから与五郎は人知れずに山道や川沿いの間道を走り、江戸に出、浅草は雷門近くに住む廓十三という侠客のもとに身を寄せたのであった。与五郎は名を黒田陣内と称し、地味な身なりで、切り詰めた暮らしをしていた。周囲の酒の誘いも断り、守銭奴と蔑まれても、一向に動じなかった。

――俺は茶碗を弁償しなければならなかった。だが、目利きではない。しょせん、陶器がわかる筈がない――

二年も経ってしまった。三日ほど前に戻った時には感無量だった。さすがに草木は生え、人気のない屋内は寂しさが漂っていたが。ここで始まったことの顚末を終えることができる、これで終わる、全てが終わるとの思いが胸にこみ上げてきたのだった。

与五郎の背後には純白の衝立が立っていた。源之進への書状が大金とともに仏前に置かれているのが閑けさを誘う。明日にも飛脚の手により、源之進の許へと届く手配になっていた。

――これで、あの時の始末がどうにでもなるものではないのだが。それはわかっている。だが、これは責務だ。果たさねばならん――

血飛沫が舞い、純白の衝立には見る間に朱の文様が作られていった。腹部はみごとに一文字に切り裂かれた。庭の草木が揺れたような気がした。蠟燭の炎がぼうっと霞んでいく。

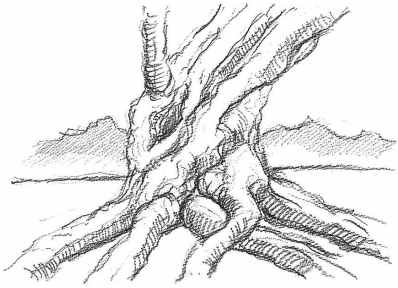
多くの人の顔が与五郎の目の前を過っていった。離縁した紀久の顔が静かに与五郎の胸に重なってきた。やさしい紀久の声が聞こえた。小さくうめくような声だった。あるいは与五郎自身の声だったのか。目の前が暗くなり、もう炎は見えなかった。与五郎の躰は前に傾くと、喉元は一気に刺し貫かれていった。すべてを耐えてきた男のこれは最期の行事であった。

翌日、昼近く、源之進は知らせを受け、強い衝撃を受けた。刀を取り出すと、庭に出て一振りする。頭の中から邪気を振り払いたかった。書状には与五郎の気持ちが滲んで

いた。それはまさに血の出るような言葉だった。
――与五郎は真面目過ぎた。一途に思い込む性格だけに可哀相なことをした。本来ならばこの俺が――
近隣の石月藩にある実家に戻っていた紀久にも、その日の夕刻には源之進からの報せが届いた。それは、夕餉の膳を整え、合間に縫いものをしている時であった。信じられなかった。二年前のあの日、何か思い詰めた様子だったのが心に残っていた。
――いずれは私をまた迎えてくれる。今もきっと生きて私の仕立てているこの着物を――
箪笥から縫いかけの着物を取り出すと、手が顫えるのを隠すように、すぐに畳の上に置いた。涙が出るのを堪えることができなかった。
源之進は与五郎の声が躰から離れなくなっていた。紀久殿への報せを手配した後、
――ここはせめて与五郎の思う通りにするのが、俺の責務だ。きっとお主の言うようによい茶碗を買い、矢田殿にお返しする。安心しろよ、与五郎――
と誓っていた。願っていた。だが、当の矢田宇兵衛は語気を強めて吐き捨てるように語ったという。
「困ったものよのう。そんなに思い詰めることではなかろうに。あの前日、それがしの許にも来おったが、帰参願いにでも来たのかと思ったがそうでもない。どうも様子がおかしかった。その時に、それなりの処置を致すべきであった。それがしの不徳の致すところである」
なお、次のように言って、逃れるように去ったという。
「それにしても訳が分からん」
時、既に五日後、城内の評定所においてのことであった。
このことは、さらにその翌日には江戸城内にも伝わり、家光も知るに及んだ。しかし、家光はしばし黙すると、次のように言っただけであった。
「世の中には律義者も居るのう」

〈結〉

川添の佐藤家では、初めはこの古文書を焼却することを決めた。だが、思い留めるに至った。それは、この古文書に一族における貴重な血脈を感じたからであった。



ときめきに死す

ジェームズ下山

一

川越駅東口図書館が気に入っている。本は少ない。読書をのんびりするスペースはほとんどない。ソファは、白髪老眼ステッキの大先輩たちが、どっしり腰をおろして雑誌を眺め微動だにしない。自習室は、受験勉強とゲーム実況に夢中な中高生で埋まっている。この人たちの辞書には顰蹙という言葉はない。何とも居心地の悪い図書館だ。ただ、ここには丸山健二がいる。健二は奥のほうに、ひっそりと隠れるようにいる。それは安曇野に独居する孤高の作家になんとも似つかわしい。

小学生の頃から丸山健二を読んでいるのだから、実に半世紀、彼の読者をしているわけだ。そこに並ぶ数冊の本は全て読んでいる。ただ単行本として所有していないものもあり、その点すこぶるありがたい。単行本は、作家がその本を出すときの意気込みが感じられていい。何度も借りている『鉛のバラ』は、高倉健をイメージした作品だけあって、表紙に高倉健の横顔の写真があり、すこぶるいい感じだ。まるで一枚のブロマイドのように、健さん！　と呼びたくなる感じで笑っているのだ。電車の中ではカバーなしではとても読めないほどだ。こういった思い入れは、単行本でしか感じられず、文庫本になると、作家の気概そのものが矮小化されてしまう。

丸山健二は、少ないファンの間ではマルケンと呼ばれている。ただ、マルケンが好きだという人は、これまでに一人しか知らない。それだけ愛読者が少ないということだ。その人は、男性の英語の教師で、自分はエッセイしか読まないと言っていた。となると、マルケンの小説が好きだという人は、私の周りには私しかいないということだ。

たしかにマルケンは疲れる。非常に疲れる。読み易いとはとても言えない。ストーリーは遅々として進まないし、会話はほとんどない。描写は病的なほどにくどい。しかし、ラストシーンは必ず何らかの感動を与えてくれる。そんな文学だ。

二

その日、私は、マルケンの『千日の瑠璃』上巻を返却した。司書は必ず本をペラペラとめくり、確認をする。汚しはしないよと言いたいところだが、相手は義務だから仕方がない。義務といっても、川越駅東口図書館の司書は皆、愛想がよく、しかも対応ぶりは実に品のいい感じで、本を返す者を不愉快な気持ちに全くさせない。

さて、今日は何のマルケンが並んでいるのかな。書棚は少ないので、すぐにマルケンの待つ棚につく。奥の書棚の

角を曲がると、丸山健二の書籍のある棚の前に一人の女性が立っている。しかも、その視線の先は、丸山健二を見ているようだ。けっして低くはない背丈を幾分猫背にして、わずか五、六冊の丸山健二の単行本を眺めている。私は、立ち止まり、一度も読んだことのない山本一力を手にしていた。勿論、視線は『あかね雲』ではなく、その女性に向かっていた。

彼女は屈んで、一冊の丸山健二を手にした。細い指で何頁かめくり、何行か目を通し、立ち上がり歩き始めた。マスクをしていたので、顔の表情はよくわからない。ただ、彼女が手にしているのが丸山健二の『ときめきに死す』であることを確認した。彼女と視線を一瞬交わした時、「あなたは丸山健二を読みますよね」と言っているような眼差しを私は感じ取った。

私は振り返り、彼女の後ろ姿を眺めていた。スニーカーに黒のジーンズ、ブルーの薄手のニット、髪はロングで黒のニット帽を被っている。年齢は四十代くらいに感じられたが、中年太りという表現の要素は微塵もない。むしろ鍛えていることを思わせる精悍さが後ろ姿にはあった。ニットではなく、革ジャンなら、女マルケンだなと思った。

マルケンの読者に女性がいるとはとても信じられなかった。ただ、彼女がマルケンのファンであったとしたら、彼女の印象から妙に納得できた。すると、ある嬉しさが込み上げてきた。その日は、なぜかマルケンを借りる気になれず、多少の縁を感じた山本一力を持ち帰ることにした。

三

図書館を出た私は、山本一力を片手にぶらぶらと、大正浪漫通りあたりまで散歩し、カフェでのんびりしようと思った。駐車場の前を過ぎようとすると、自転車を転がす女性が声をかけてきた。

「今日は丸山健二ではないのですか?」

声の方を向くと、先ほどの女性が会釈をした。

「ええ」

驚いた私は、声にならない声を発していた。

「いつも丸山健二を借りていらっしゃいますよね」

丁寧な言葉を使わなくては失礼と思うほど、私を年配だと思っているようだ。まあ、どう見ても、明らかに私の方が上である。ただ、知らない女性から声をかけられるのは、新宿西口あたりの新商品のモニターの勧誘くらいだから、やはり動機は気になる。まさか「マル友」になりたいというわけではなかろう。

彼女が自転車を寄せてきたので、それとなく、たずねた。

「『ときめきに死す』を借りましたよね。マルケン、よく読むんですか?」

「マルケン? そう言うんですか」

「ええ」

「私が好きなんじゃないんです。」

即座に誰が? と聞くのも無粋な気がして黙っていると、

思わぬ長広舌がはじまった。
「見ず知らずのお方にこのようなことを話すのは、なんとも失礼かと思いますが、なにとぞお許しください。実は亡くなった主人が丸山健二のファンで、よく読んでいたのです。たまたま図書館で、あなた様が丸山健二を借りているのを見て、借りる人って実際にいるんだなと思いました。また、別の日には、あなた様が、丸山健二の本を返却していました。おそらく、この人は、数少ない丸山健二のファンの一人なんだと感じました。主人はよく、丸山健二を読む人はほとんどいないけど、読む人はかなりの読書家だと言ってましたから。また、女性読者はゼロだとも。今日はなぜか、やっと主人の好きだった『ときめきに死す』を借りる気になったのです」
「そうですか」
私は内心とは裏腹の無表情を装った。

四

「これからどちらの方に?」
「大正浪漫通りあたりまで散歩しようかと思ってます」
「わたくしも、そちらの方なんです。よろしければご一緒させていただきたいのですが」
私は即答を避けた。彼女は矢継ぎ早に、
「マルケンのことを色々お聞かせいただきたいのですが」
と言い、マスクを外した。それは礼儀ということなのか、自分は怪しい者ではないということを示そうとしたのか、いずれにしても、幾ばくかの好意を感じ、悪い気はしなかった。
「そんなにマルケンに詳しくはないです。最近の高い本は買う気にはなれないし」
「高い本?」
「『風死す』という本ですが、四巻で八万円以上します」
「読んだのですか?」
「いや、買ってないのだから読めませんよ」
「そんなお高い本を買う人っているんでしょうか」
「いるから売るのでしょう。マルケンのコアなファンは中高年で、中には八万くらい安いという人もいるでしょう。大衆向けの作家ではないですからね」
私はマルケンの最近の作家としての在り方に疑問を抱いていたが、言葉にしたくなかった。まして目の前に新たなファンになりそうな人がいて、その人を幻滅させたくはなかった。
「『ときめきに死す』は最高傑作という人も多いですよ」
「お読みになられましたか?」
「ええ。映画も好きです」
「映画?」
「沢田研二が主役、監督は森田芳光です」
「面白そうですね」
「原作の方がいいですが」
と言いながら、『ときめきに死す』がふと見たくなった。

奇妙な出会いが、奇妙な出会いから始まる映画と重なったのかもしれない。
「どんなストーリーですか？」
「いや、それはお読みになればわかります」
マルケンの住む長野県安曇野の話を私はした。安曇野から川越まで夏になると深夜バスが走る。それほど遠くはない。気づいたら、大正浪漫通りを歩いていた。ごく自然な流れで、二人は大正珈琲館に入っていた。

五

この店は昔ながらの純喫茶という感じでいい。テーブルはボックスとカウンター、珈琲はモカが美味い。以前このあたりに住んでいたので、たまに寄ったことがあった。彼女はカフェインが苦手だといい、紅茶を頼んだ。神経質そうに細い指でソーサーごと持ち上げ、カップの取っ手に指を入れ薄い唇で一口啜った。爪はマニュキュアの痕は全くなく、綺麗に整えられていた。
「お子さんは？」
珈琲の焙煎の香ばしさが妙に陽気な気分にさせるのか、図々しい質問に我ながら驚く。
「両親のいる仙台に預けてます。小学生なんです。私も仕事があって」
「仙台というと楽天イーグルスですね」
俄かに彼女の声のトーンが上がった。
「楽天お好きですか？」
「いや、私はタイガースです」
「強いですね。タイガース。それに比べて楽天は」
と、溜息をつく。
「いや、阪神も暗黒時代がありましたよ。楽天だって田中が二十四勝して優勝したときは凄かったですよ」
「そんなことがあったんですか」
私は頷いて、モカを啜る。
「子供が少年野球をやっていて、プロ野球を見たいと」
「仙台でですか？　プロ野球に興味があるのはいい。うちの子供も川越の武蔵コンドルというチームで少年野球をやってますが、家では全く練習しない。プロ野球は全く見ない。マインクラフトばかりやっている。私の子供の頃はプロ野球は毎日テレビでやっていて、野球ばかり見てましたよ。ゲームなんてなかったし」
いつの間にか私も饒舌になっている。
「寂しくはないですか？」
彼女はスマホを見せ、
「ＬＩＮＥで顔見れますから別に」
「しかし、それでは、頭を撫でてあげたり、抱きしめてあげたりできないでしょう」
一瞬、彼女は悲しそうな顔を見せたが、
「野球のボークって難しいですよね。日本語では不正投球って言うんでしょ。よくわからないわ」
下手な牽制球を交わされるというより、私は自らの不正

投球を恥じた。いつの間にか、マルケンの話は野球のルールの話になり、プロ野球の交流戦の話になっていた。

六

彼女は細い腕に巻きついている黒皮のバンドの腕時計を見た。

「仕事ですか？」

彼女は頷くと、薬指の指輪がやや緩そうに見える左手でグラスを持ち、水を一口飲んで、

「マルケンの作品の話をあまり聞けなかったですね。今度、もっとお聞かせください。よろしければ」

彼女はＬＩＮＥを交換してくれと求めてきた。私は無言で、二次元コードを見せた。

「ジェームズ下山さんというんですね。芸名ですか？」

「趣味で劇団をしています。今は休んでますが」

「休業中？」

「充電期間みたいなもんですよ」

私は伝票を手にしようとすると、彼女の細い指の方が素早かった。

「今度お会いする時までに、何か読んでおきたいんですが、『ときめきに死す』以外に何かありますか？」

「古いエッセイですが、『群居せず』がいいでしょう。ご主人に先立たれ、息子さんと離れていては淋しいでしょう。そんなとき、マルケンのエッセイはいいですよ」

私は、何十年も前に好きであったエッセイを軽々しく勧めている自分の軽率さにあきれた。それは彼女がＬＩＮＥを交換しようというノリに呼応するかのような軽さがあった。

「『群居せず』ですね」

彼女はスマホにメモを入れている。

私たちは、大正珈琲館を出た。強い焙煎の香が私たちを甘く包んでいるようであった。そんな雰囲気を振り払うかのように、彼女は自転車に跨り、会釈だけをして、去って行った。私は見送ることもなく、逆方向に歩いて行った。彼女からＬＩＮＥが来ていた。先ほど打っていたのはこのＬＩＮＥだった。

「ありがとうございました。『群居せず』ですね。読んでみます。また、お会いしましょう。亜紀」

何かが始まる予感を感じ、淡い期待を抱き、ときめきを覚える人もいるだろう。また、何も悪いことはしていないのに、すでに何らかの後ろめたさを感じる人もいるだろう。きわめて退屈でつまらない人間になろうとしている私はどちらでもなかった。

七

亜紀さんからは、その後、ＬＩＮＥは来なかったし、私も送ることはなかった。いつの間にか、スマホから彼女の名前も消え、大正珈琲館で話をしたことも、私の記憶の層の深いところに沈んでしまっていた。

ある日、図書館に丸山健二の『群居せず』が置かれてい

た。それまで、このエッセイがここにあるのを見かけたことは一度もなかった。私は図書館員にたずねた。なんでも、ある女性が寄付したという。その人は誰かと聞くのもおかしな話だ。その日は交流戦で、阪神タイガースは楽天イーグルスに負けた。不思議と悔しい気持ちにはならなかった。もしかしたら、彼女は阪神が負けて残念だと思っていてくれているかもしれない。そんな馬鹿げた想像をしたら妙に愉快な気分になった。

参考　丸山健二著作

『鉛のバラ』新潮社２００４（表紙写真は高倉健であり、主人公も高倉健をモデルにしている）

『千日の瑠璃』文藝春秋１９９２のち文庫、求龍堂より復刊

『ときめきに死す』文藝春秋１９８２のち文庫、求龍堂より復刊

『風死す』いぬわし書房２０２３

『群居せず』文藝春秋１９８０のち文庫

山本一力著作

『あかね空』文藝春秋２００１のち文春文庫

車イス

関根　トミ子

美保は圧倒されていた。目の前に、どっしりと根をおろした桜の老木と、咲き乱れる満開の桜の花が迫ってくる。樹齢何百年かと思わせる古木は、太く、力強く、威厳を漂わせている。ごつごつした樹木の表面の色使いは、本物そっくりで、思わず手で触ってみたくなる。そして、改めて絵であると確認するのだ。

枝々を彩る花弁、宙に舞い競う花びらは、あくまでも軽やかで、その一枚一枚も、それに、チラッと見え隠れする若葉の色あいも、とても微妙な濃淡で描かれており、それを描いた職人さんの筆の先の先まで全神経が集中されているのが伝わってくる。春の歓喜を全身でくり広げるこの桜の老木の力強さと華やかさ、それに図太い生命力に気おされて、美保は感嘆の言葉さえも喉の奥に飲み込んでしまった。

みごとな振袖である。身につけることなど憚られる。美保はこの店に連れてきてくれた友人の幸子の存在も忘れて、車イスから身を乗り出して見入った。

「ねえ、すごいでしょう。私もたまたまゆかたを探しに来て、この迫力に感動しちゃった。絵もすばらしいけど、その上あちこちの刺繍も豪華よね。こんな振袖は着るのはもったいないわ。飾っておくものね」

「大胆なところも、細やかな花びらも、みんな人の手によって描かれたのよね。さっき見た氷川様の桜もため息が出る程みごとだったけど、この振袖を見ているとクラクラするわ」

「美保にこれを見せたかったのよ。美保は絵が上手だし、特に自然の草や花を描くときすっかりその世界に入り込んでいるしね。でも、この頃描いてないでしょう」

「うーん……」

「おやおや、昨日、ゆかたを買ってくださったお嬢さん。気に入りましたか。よく似合ってましたよ。今日はお友だちと一緒ですか」

一人の男性が声をかけてきた。

「はい、この振袖を見せたくて」

「私でさえもため息が出る程すばらしいですよ。老木のごつごつした幹や樹皮の繊細さにも、微妙な花びらの色や動きも、ぜんぶ手描きなんですからね」

気さくに話しかけてきたのは胸のネームプレートに「店長本田」と書いてある男性だった。顔も丸っこくて、体全体も丸っこくて、雰囲気もものやわらかく、丸っこい感じだ。美保や幸子から見ると「おじさん」である。

「この花びら何枚あるのかしら。刺繍も織りこんであるし、

仕上げるのには何ヵ月もかかるわよね」
幸子がつぶやく。
「一年以上はかかったみたいだよ。これは京友禅といってね、日本でも代表的な着物なんですよ。絵だけではなく、刺繍もふんだんに織りこんだ晴れ着もたくさんあります。店の中にも手描きの反物がたくさんあるから、見ていきませんか」
「いえ、私たち、お客じゃないし……」
「いいんですよ。若い人にも、着物に興味を持ってもらいたいしね。今は、川越の街中でも、お若い観光客がよく着物を着て歩いているでしょう。たとえレンタルでも、この古い街並みには似合うと思いませんか」
「そうですね。よく見かけるから、やっぱり目がいきます。京都に行ったとき、たくさんの人が着物で歩いているのを見て、やっぱり京都だから、と思ったけど、今はそうじゃないって感じがする」
「遠慮することないですよ。目の保養にもなると思うから中に入ってごらん」
「私なんかダメです。車イスだから、邪魔になるだけですから。幸子だけ見てきたら」
「大丈夫だよ。ほら道をあけてあげるから」
気さくに店長は店内の品物をちょっとずらして、車イスの通路を作ってくれた。
すみませんとわびながらも、美保の心はワクワク感がこみ上げてきた。店内はこれまで見たことのない別世界が広がっていた。七五三のときの記憶が蘇ってきた。
榊美保が車イス生活になったのはちょうど一年前、中学二年生になる前の春休みだった。春休みは何だか心が浮き立つ。自転車で交差点を渡ろうとしたとき、右折してきたトラックにぶつかり、トラックの車輪に巻きこまれたのだった。自分は青信号だと思って早く飛び出し過ぎたのか、または、トラックの方も赤信号すれすれに強引に曲ろうとしたのか、どちらが悪いにしても、美保は両足を複雑骨折した。特に右足は機能を失ってしまった。左足も完治はしなかった。
――何であのとき、ちゃんと周りを見なかったのか――
後悔と同時に、車イス生活を余儀なくされたとき、自分の将来も人生も見失ってしまった。もう、何もできないダメな人間になった。だから生きていても仕方ない、という思いだけに支配され、否定観念は周りの人さえ受け入れられなくなってしまった。
「命が助かったんだから」とか、「車イスの人でもどんどん活躍している人だって沢山いるじゃない」とか、「美保ちゃんならきっと立ち直れるわよ」
励ましとも、慰めともとれる言葉がむなしく、空虚になった胸の内をすり抜けていった。初めは励ましてくれた友人も、心を開かない美保から次第に距離を置くようになって、美保は学校も休みがちになった。

「私に何かできることがあったら言ってね」
「美保ちゃん、辛いけど、みんな仲間だよ、元気出してね」
などと言われると、つい障害者の私の気持ちなんか、あなたにはわからないわよと卑屈な対応をしてしまい、その後、落ちこんでしまった。確かに、障害を持つ人の立場に立つということは難しい。だから、周りの人たちも口をつぐむ結果になる。
そんな中、幼稚園からの友人、野本幸子だけは全く変わらず、図々しく美保の部屋にも入って来て、勝手におしゃべりをする。美保が車イスだからと特別視しない。短髪が似合うボーイッシュな子だ。「私、スカートなんかいやだわ、パンツが見えたら、何もできやしない」と言う。ひょろっとしていて、走るのだけは速い。「ほかはダメだけど、走るのだけは！」と自分で言う。
「ねえ、美保、氷川神社の桜、今満開だよ。圧巻だよ。観光客もすごく多いし、見に行こう。沢山の人たちは、遠くからわざわざ来るのに、私たちは近くてラッキーだよね」
美保の尻ごみなんか何のその、強引に車イスを押し出した。美保の抵抗も幸子の前では用をなさない。
川越氷川神社の脇の桜並木は、驚く程の人出で、外国人も多い。日本の桜を外国の人が愛でてくれるのは誇りに思える。氷川の桜も何十本あるのか、どの木も樹齢を誇る太い幹で、枝々を精一杯広げ、咲き乱れる花のかたまりが、二人の頭上からワアーッとおおいかぶさってくる。メジロが数羽飛び交うのに目を細める。
「あと一週間かな、見頃は」
「本当に花の命は短くてね」
「あっ、タコヤキやさん。私、買ってくるね」
幸子は、花の命という言葉に、つい美保を重ねてしまったのをごまかすように、タコヤキやに走って行った。
二人は、桜の花に埋もれてタコヤキをほおばる。
「もう三年生だね。今年は受験受験の勉強ばかりだろうね。ねえ、美保はどこを受ける？」
「私、受験しないかも。こんな体で高校に行ってもどうなるのか。通うのだって大変でしょう。将来のことも考えられないのに受験なんて。もう受験の話はしないで」
「そんなこと言わないで」
幸子はふっと涙ぐむ。
「ごめんね、今はまだダメなの」
顔をそむけて遠くを見つめる。その視線の先に、桜並木の下を流れる川を下る小舟が見えた。昔、舟運で栄えた新河岸川の上流なのかな、と美保はそんなことを考えていた。
「ねえ、美保、学校もあまり行きたくないんだよね。だったら、ボランティアでも一緒にする？」
「ボランティア？　何言ってるの。私自身世話になってる身よ。できるわけないじゃない」
意味がわからない、と美保は言った。

「実はね、私の通ってるテニススクールの二年先輩で浅井君という高一の子がいるんだけど、土、日の空いている日に半日だけ老人ホームにボランティアに行くんだって。難しいことはできないけど、お年寄りの話相手になったり、リハビリの手伝いや、将棋の相手などして喜ばれているらしいわよ。私、美保のこと話したら、車イスの人だって色色できることがあるって」

「ふーん、そうなの。不登校なのにボランティアか」

「私も行くからさ。きっと孫みたいに思われるんじゃない。それにしても、桜みごとね。咲いている時間が短いのは惜しいよね。美保は絵が上手なんだから、絵に描いて残しておいたらいいよ。中一のとき絵で賞を取ったよね」

ちょっと心が動いた。以前酔芙蓉の花を描いて賞を取った。

「今日、もう一カ所美保を連れて行きたい所があるんだ」

「えっ、まだ、どこかに行くの?」

「疲れた? でも、あと少し付き合ってね」

有無を言わさず連れて来られたのがこの和服店だった。美保は、着物にそんなに興味があったわけでもないし、まして車イスの自分が着物を着るなんて考えたこともない。昨年かその前か、ゆかたを一回着せてもらっただけだ。そのときの祭りのゆかたも今はタンスの中から出てきそうにない。

洋服店とは異なる華やかさに満ちて、現実の生活とはかけ離れた世界がある。淡い地色に、花鳥風月、特に花々をちりばめた着物が多い。また、帯は、どっしりした刺繍が施され、さらに豪華さを醸し出している。

「どれも、すばらしい芸術作品ですね。どれも人の手によって仕上げられたんですよね」

珍しく美保が否定的ではない言葉を発した。

「うん、うん」

と、幸子はその様子に満足した。店の奥の端の方に大きな看板があって「仙太郎」と書いてある。

「仙太郎さんて、人の名前?」と二人がつぶやき合う。

「そう、あそこにいる人が仙太郎さん」と本田店長。仙太郎さんと呼ばれた人の周りにある反物や着物は、二人の女の子から見ると地味っぽい。京友禅とは全く違う。でもお母さんが着たらきりっとして似合う気がした。

「彼の周りの作品は仙太郎さんのデザインしたものであり、製作した作品なんですよ。渋いでしょう。あれは大島紬という着物です」

二人の興味を感じとって説明してくれた本田店長。

「そこのお若いお客さん、こっちに来てよく見たらいいよ。私の周りにあるのは大島紬っていうんだけど、聞いたことある?」

「紬っていうのは聞いたことあるけど、本当は知りません。なんとなく地味っぽいけど、なんだか魅かれます」

「京友禅なんかと全く違うから、染め方が特別なのかな」

美保も幸子も先程の着物との違いが気になる。
「大島紬っていうのは、伊豆大島じゃなくて、九州の奄美大島地方で織られている伝統的な織物なんですよ。よーく見ると、織りや模様もとても繊細なのがよくわかるよ。触ってごらん、肌触りもわかるから」
「柔らかい！　軽い！」
と、布に手のひらで触れて喜ぶ幸子。美保も腰を曲げて布を手に取る。二人は細かな模様に見入る。
「一本一本の糸が命。色糸を縦横に織りこんで、気長に織っていく。これを一反仕上げるのに、私のところでは図案から下絵、染め、織りなんか三十三工程あるんですよ。その一つ一つの工程は専門の職人がいて、その多くの人たちの手を経て仕上がっていく。これは京友禅だって同じ。京友禅だって同じ位の工程があるはずですよ。だから一年以上か、又は二年も仕上げにかかる作品もあるんです。一般の人から見たら気が遠くなる作業でしょう」
「この紬は、どれも茶か黒っぽいのが多いんですが、どんな染料を使うんですか」
美保が問う。
「ああ、この色あいね。大島紬の一番の特徴は泥染めという染め方なんです」
「ええ、泥染めって、泥の中に入れるの」
と、幸子。
そうですと仙太郎がにこやかにうなずく。
「うそ！　信じられない」
本田店長も横でほほ笑んでいる。
「泥の中の鉄分がとてもいい色を出すのです。大島の土はその成分が染めと合ったのですね」
「私のこの店でも、色々な地方の独特な織物を売ってるよ。日本全国、その地域ならではの特徴を持った織物があるからね。ところで、川越にも有名な織物があるんだよ。聞いたことないかな、唐桟（とうざん）というんだ。一般に川唐と言ったりするけど」
「川越唐桟って言うんですか。美保、知ってる？」
「ううーん、知らない」
「川越は、江戸時代から織物の町として栄えたんだよ。ほら、今残っている蔵のある家々の多くが織物に関係した家なんだ。だけど、戦後だんだん洋服になってきたでしょう。だから着物の町が姿を消していった」
どこか寂しげな口調の店長である。
「じゃあ、今からまた川越を着物の町として復活させたらいいよ」
幸子は楽しげに言う。
美保は先程から気になっている反物、帯がある。
「向こうのものも大島紬なんですか？　色あいが全く違うし、すごく明るく華やかだから」
「ああ、あれね。紅型（びんがた）という沖縄の織物です。紅（びん）とはいろいろな色、型とは模様のこと、つまりいろんな色で染めた

織物ということだね。昔は琉球王朝の王家や士族しか着られなかったんだよ」
「私、見たことある。沖縄に行ったとき」
幸子は思い出したようにはしゃぎ、改めて紅型の布を見つめた。
「ひと口に着物と言っても、いろんな糸、織、模様、染めなど地方色もあって奥が深い。川越唐桟は木綿の着物だけど、愛好家には魅力ある着物ですよ。今度見せてあげるよ」
美保が気になったのは、目の前にくり広げられた絵柄や色あいよりも、それが仕上がっていく工程だった。それぞれの作業内容、専門的な工程を知りたくなった。絵の好きな美保は、自分の得意分野で、すばらしい作品の一端でも担えたらどんなに幸せか、どんなに感動するか、と胸の中でそんな自分を思い描いていた。
「せっかく来たんだから、どれか似合いそうなものを肩にかけてみるかい」
と、本田店長。尻ごみをする幸子の肩に女性スタッフが薄青地に大きめの花をあしらった布をかけた。
「きれい！　すごく女の子っぽいよ」
と、美保がほめる。
「おしとやかなお嬢さんに見える？」
と、照れる。
あなたもねと、店長はピンク地に小さな草花をちりばめた布をはおらせた。すっと流れた花畑が、美保のひざをおおった。横でながめていた仙太郎さんが、紅型の帯をあてたてくれた。
「あらあ、美保、すっかり王室のお姫様だよ」
美保も、きれいよと言ってくれる人たちの言葉を素直に受けとめられた。
「そうだ、美保のお母さんに写真を送ってあげよう」
幸子は行動が早い。すぐさま、布をかけたまま、美保の写真を撮ると送信した。
「ありがとうございます。うれしかったです」
肩から布を外しながら、美保たちは心からお礼を言った。お客でもない女の子、それも車イスの自分まで普通に接客してくれたこと、着物の奥深さをのぞかせてもらったこと、それに、みんなの笑顔に包まれたことが、美保には今までにない感動だった。
「店長さんは川越を着物の町にすること、仙太郎さんは大島紬でがんばってくださいね。私、高校に入ったら着物クラブを作ります」
陽気な幸子の言葉に、みんながうなずき合った。
翌日、写真を見た美保の母は、一緒に店を訪れ、娘に優しく接してくれた人たちにお礼を述べた。ただ、仙太郎さんは、いつか、お嬢さんにも大島紬を着てほしいと伝言を残して昨日の夕方大島に帰ったという。
母は美保のために新しいゆかたを買った。それに合う半

幅帯を注文した。薄い空色に紫陽花の花模様だった。
「お嬢さん、着物の職人にはいろんな仕事があってね、これから若い方が跡を継いでくれたら喜ばれるよ」
本田店長は、私の心をわかってくれていたんだと思うと、美保は胸が熱くなった。
これからちゃんと学校に行こう。
五月の最後の日曜日、美保と幸子は初めて「ふれあいの里」という老人ホームに行った。玄関前で、浅井先輩が待っていた。陽焼けの中に浮かび上がる白い歯が人なつこくて印象的だった。車イスの、ゆかた姿の美保に一瞬驚いた様子だったが、「いやあ、いいねえ」と笑った。
「幸ちゃんも、美保ちゃんも、入居者の人たちみんながお待ちかねだよ。孫が訪ねてくるみたいなんだろうね。ところで一つだけ守ってほしいことがあるんだ。入居者の方々を、おじいちゃんとかおばあちゃんって呼ばずに、ちゃんとお名前で呼ぶんだよ」
このホームの大切なルールらしい。わかるような気がした。玄関を入ると同時に、数人があら、まあ、かわいいと大歓迎してくれた。二人は照れくさくなった。
「ねえ、絵が上手なんだって。私たちと一緒に描こうね」
「だめよ、先に折り紙を教えるんだから」
初日から大モテの二人である。ここで誰かの、何かの役に立つことがあったら、少しは自分の存在に自信が持てるかもしれない。社会に一歩踏み出せるかもしれない、と感じつつ、美保は入居者の人たちと素直に笑い合えた。美保はまず絵画のグループに入り、幸子は折り紙グループに引っぱられて行った。
美保は高校受験も真面目に考え、将来は、車イスでもできる着物関係の仕事をしたいと思うようになり、資料を探し始めた。老人ホームでのボランティアのとき、美保は自分が車イスに乗っていることを忘れていた。
それから一カ月後、仙太郎さんから二人にプレゼントが送られてきた。大島紬と川越唐桟をコラボしたかわいい手提げ袋だった。

遠い記憶

加山　聡

十月。車窓には鉛色の雲が果てしなく続いている。

数カ月の間、懸案事項であった新規事業は順調に進展している。予想以上に速い展開に驚きさえ覚えている。今日の打ち合わせも全く問題なく終えた。浮かれた気分が心の何処かに有っても何の不思議もない状態のはずだった。

通勤時間帯を遙かに過ぎた車内に乗客は少なかった。モスグリーンの七人掛けシートの端に深く腰を下ろし、流れていく車窓をただ眺めている。頭の中ではひとつのことに繰り返し考えが及んでいた。先程、取引先の社員に渡された書類にあった「十月十日」という文字に気が引かれているのだ。「十月十日」とは何であったのか。乗車し、シートに座った時から考え続けている。

あれこれと考えた挙句にひとつ思い出したことがある。高校生の時、自分に割り当てられた木製の机に「十月十日」と刻み、毎日眺めていた記憶だ。あれは何を意味していたのだろう。思考はそこで止まり、ずっとその状態が続いていた。車内放送で池袋と流れた。その響きに触発されて記憶が急速に過去に遡った。「十月十日」は、あの日なのだ。十七年前のあの出来事なのだ。

その始まりは、高校三年生のゴールデンウイークの土曜日の部活帰りだったと記憶している。改札を抜けて駅舎の庇の外に立つと、肌を刺す初夏の陽光を浴び、あまりの明るさに一瞬間立ち止まった。

「真司」

突然、名を呼ばれて振り向く私にいっそう大きな声が届いて来る。

「真司、俺だよ、亮太」

すぐに言葉が出ない。「亮太」のことは覚えていないはずだ。いいや、中学校卒業と同時に記憶から消去しようと努めた対象であったはずなのだ。

中学校三年間で多くの友人に恵まれ、快適な生活を得ることが出来たが、この亮太だけは不愉快で煩わしい人物であった。三年間同じ部活でチームメートとして過ごし、接する時間が長かっただけに、それに比例してこの亮太に対する憎悪は深まった。

男子バスケットボール部は大所帯だった。それだけでもベンチに入れる壁は高くなる。しかし、亮太の運動能力はバスケットボールには完全に不向きだった。加えて、利己的なプレーばかりでチームとしての戦術を理解することも出来なかった。競技ルールさえ理解していないのではないか、と思われることもあった。それでも、彼は自分がベンチメンバーに入れないことに不満を持ち続けていた。周囲

から自分が選手として正当に評価されていないと信じ切っていた。
「休まずに練習に出ている自分がベンチに入れないのはおかしいではないか」
彼ならではの不満を口にする。毎日、練習に休まずに参加するだけでレギュラー選手になれるスポーツ競技などない、ということを彼は全く理解出来なかった。
「ああ、久し振り」
「中学校卒業以来だから二年二カ月振りだ」
「そうだ」
「家を訪ねたら、『今日は部活で登校している』と教えてもらってね。駅で待っていれば会えると思った。高校でもキャプテンなんだってな」
「ああ。強いチームだからやりがいがある」
「地区選抜のようなチームだからな。中学のチームみたいに厄介な奴は一人もいないだろう?」
亮太が言いたいことは分かったが、応える必要はない。
「高校生活の最後の大会が迫っているので必死だ。負けた時点で引退だ」
「その後は受験勉強か」
「そうだ。部活と大学受験が高校生活の全てだ。他には何もない。ところで、亮太、随分と陽に焼けてないか」
「そうかもな」
「高校では外の部活なのか」
「部活はしていない。授業日以外は働いている。アルバイトなんて甘っちょろいもんじゃないぜ。社員だ」
衝撃的だった。高校在学中に仕事に就く。そのような発想は私の身体中の何処をどう巡っても在り得ないものだった。私の高校生活には全く存在しない選択肢だ。あの亮太がそうした厳しい環境に耐えて高校生活を送っている、という事実に私は激しく動揺した。
返す言葉が見つからないまま亮太に顔を向けると、彼の目は私の視線を通り越して背後の町並みに向いていた。
「真司、時間はあるかい」
「ああ、短時間なら付き合える」
「話がしたくなってね」
「そうか」
彼の言葉には応じたが、私は彼と話すべき事柄を何ひとつ持ち合わせていない。彼にとっては旧知の仲かもしれないが、私には再会してはいけない男だった。成り行きとは言え、つまらぬ返事をしてしまったとひどく後悔した。
「そこの公園に行こう」
駅から三分も歩くとかなり大きな児童公園に着く。公園までの道は二人とも沈黙していた。
「もうすっかり懐かしくなってしまったな。中学校時代のこと」
「中学は既に過去のもの。僕たちは高校という新しい環境下にいるんだ」

「そうか、中学は過去の出来事か。真司の中では綺麗すっかりと片付いているんだな」
「そういうことだ」
「俺は一度も公式戦に出られなかったことに納得出来ていないぜ」
「選手は監督が決めることだ」
「キャプテンの真司にも相談はあったんだろう?」
「ああ、多少はな」
「やはり、そうだよな。監督は真司をキャプテンとして信頼していたからな。意見を求められて当然だ」
私は、敢えて返事をしなかった。中学時代の不愉快な思いが数年を経て再燃し始めている。どうせ、何を言ったところで亮太の理解を得られるはずはない。彼は彼の価値観でしか答えを導くことが出来ない。
「彩音のことを覚えているか」
「覚えている。よく話をした」
私は男子バスケットボール部のキャプテン、彩音は女子バスケットボール部のキャプテンだった。初めは体育館の練習時間の調整等事務的な話しかしなかったが、打ち解けてくると部員の指導、監督との交渉、果ては競技技術や戦術などまで話をするようになった。
バスケットボールにかける彼女の情熱は私を遙かに凌ぎ、私は同じ競技者として敬意さえ抱いて接していた。練習ローテーションの都合で体育館が男女半面ずつの利用になった時、彼女と話す機会を得ようと無駄に体育館センター付近に足を運んでいた。
「真司は彩音のことが好きだったんだろう?」
「なんだ、いきなり」
「彩音と話す真司の表情を見れば誰だって気付くさ。部活を引退した後に、彩音に手紙を渡したことも男女部員皆が知っている。そういうことには敏感な年頃だったからな。あっと言う間に情報は広がるさ。卒業後、彩音と会ったことはあるのか」
「いや、ない。それぞれ別の高校に進学したし、高校からの人間関係だけで十分だ」
「彩音に好きだと伝えたのか」
「そうだ。彩音は返事を手紙でくれた。『高校生になったら考えてみましょうよ』という内容だった」
「振られたということだな」
「そういうことだ」
初夏の陽光は西に傾いたとは言え、依然として強い熱気を帯びていた。木陰のベンチを選んで座ったが、額や首筋に汗が滲んでいる。
亮太は水栓まで歩いて行き、勢いよく水を出すと両手で顔を拭った。ジーンズのポケットから鮮やかなオレンジ色のタオルハンカチーフを引き出すと、時間を掛けて顔の水滴を拭き取った。ハンカチーフを丁寧にたたみ、ポケットに戻した。その一連の動作があまりに自然なので、私は見

入ってしまった。
ベンチに戻って来ると亮太は両足を投げ出し、視線を自分の足先に移した。ネイビーブルーの地色が土埃でバイカラーになっている彼のデッキシューズを私も見ていた。
「真司」
「ああ」
「俺は彩音と会っている」
「付き合っているということか」
「そう思ってもらってもいい」
「わざわざ、そんな話をしに来たのか」
「そうさ。親愛なる我らのキャプテン様にかつての部員が、俺と彩音の近況報告をしに来たわけさ」
「彩音のことは中学校卒業と同時に終わっている」
「今更、別にどうでもないというわけだな。それじゃ、これも今更関係ないと思うが、彩音は妊娠している」
窓の外は何時の間にか夕暮れとなり、帰宅を急ぐ人々の足だけが忙しかった。久し振りに待ち合わせた二人のたわいもない会話は度々途絶えていた。小さなテーブルのコーヒーカップは中途半端な量の液体を残し、彼女の煙草の煙だけが青白く静かに二人の間を流れている。
二人ともコーヒーショップの大きな窓ガラスに虚けた目を映して、冷え冷えとした街の光景を眺めていた。はっきりとはしない空の下、十月としてはかなり寒い一日だった。
亮太に会ってから六カ月近くが経ち、彩音から「会いたい」と連絡があった。彩音が会いたいという理由は皆目見当がつかなかった。今になって二人が会う理由は何もない。
「ごめんね、こんな時間で。朝は起きられなくて」
約束の場所と決めた池袋のコーヒーショップの店頭で私に声を掛けた女性は、私が抱き続けてきたイメージとは余りに異なり、驚きとともに失望を感じないわけにはいかなかった。
左右に振り分けたストレートの長い髪、濃いベージュのシャドウ、くっきりとしたアイライン。そして、ファッションには疎い私には、それが今の流行なのかどうか全く判らなかった黒のタイトスカート、胸元が大きく切れ込んだダークブラウンのブラウス。そうした彼女の姿を私の感覚は容易に受け入れられなかった。
何よりも強く違和感を覚えたのは、バスケットボールコートで躍動していた彼女の健康的な身体がすっかり失われていたことだ。背が高くなったように思えたのは、身体全体の筋肉が張りを失い細くなってしまったせいだった。
そんな私の当惑を弁解するのに適当な言葉も見出せないまま、二人はさして意味のない想い出話で会話を繋ぎ、コーヒーショップの時間は過ぎていった。
長い沈黙があった後、彩音が新しい煙草に火を点け、微風を流すような吐息で煙を散らした。
「大学に行くんでしょう」

「うん。勉強したいことが見つかったからね」
「理系なの？」
「そうだね」
「真司君、数学が得意だった。高校受験に向けて、私はよく教えてもらった」
「彩音は数学だけが不得意で、あとの科目は上出来だった」
「そうかな。そんなに成績良かったのかな」
「きちんと危なげなく第一志望校に入学したじゃないか」
「もっともっと勉強して真司君が入学した高校に行きたかったんだけどね、本当は」
「うちは男女ともバスケットボール強豪校だからね」
「違う。バスケットボールが目的じゃなかったんだよ」
彩音がもう一口煙草を含んだ。煙草は暫く唇にあったが、煙を吸い込んだ様子はなかった。
「手紙をくれたよね」
「うん」
「今も宝物」
「僕は中学校の卒業アルバムと一緒にしてある」
「卒業アルバムか。今でも見ることあるのかな」
「高校に入学してからは一度も開いていない」
「そうなんだ。中学校での日々は全て整理したんだ」
彩音は灰皿に煙草を置き、冷めたコーヒーを一口含んだ。そしてゆっくりと顔を上げると、真っ直ぐに私の目を見た。
「二通目が何時来るのか、ずっと待っていた」
「えっ」
「知らなかったでしょう」
「ああ」
「私、頑張れば真司君ともう三年間一緒に学校生活を送ることが出来ると信じていた。だから、真司君に追い付きたくて一生懸命受験勉強したんだ」
「受験すれば良かったんだ。彩音の成績なら合格出来ただろう」
「かもしれない。でもね、担任も親も安全策を勧めたわけ。公立高校の選抜方法が大きく変わることになったので、結果については確かなことが言えないって。私は、そんな微妙な学力だったみたい。親は私の気持ちを理解しようなんて気配が全くなかった。でも、志望校を変更した時点で私の心の大切な部分に既に影が差していた。そして、高校入学と同時に空虚な毎日が始まった。私の高校生活は、こんなのじゃないって繰り返し思った。あんなに好きだったバスケットボールもやめちゃってね」
彩音は深く煙草を吸い込み、二人の間に薄紫色の煙が勢いよく広がった。
「煙草はやめた方がいい。彩音の身体に良くない」
「もう、完全に生活の一部。やめられないな、きっと。それにもう赤ちゃんはいないし」
再び煙草をくわえ、少しの間をおいて言った。

「亮太に会ったでしょう。あいつね、中学の部活の時、よく女の子たちに絡んできた。下らない話ばかりだった」
彩音は透明なガラス製の灰皿に煙草の灰を落とした。
「高校の正門前で待っていて、声を掛けてきた。驚いて適当に片付けようと思ったんだけれど、真司君の名前を出してきてね。あいつ、何度か真司君の試合を観に行っていたみたい。それで私、真司君の話が聞きたくて……」
彩音は深く息を吸い込み、一度止めたように見えた。それから静かに時間をかけて吐き出した。白い指に挟んだ細巻きの煙草が大きく揺れている。
「亮太、高校一年の夏に茨城に転居した。一家全員で。お祖父さんが経営していた水産物工場が傾いて、家族で手伝うことになった。ところが、結局は破綻して家族はこちらに戻ってきた。そして、お父さんが始めた事業の貴重な戦力になった。高校だってまともに行っていないんじゃないかな。したくもないことをさせられ続けて、他人の心を理解出来ない、あのどうしようもない性格が益々メッキを重ねた感じ。あんな男の衝動的な行為で私は人生を失うことになったなんて……心の痛みは決して消えることはない」
彩音は灰皿の中央の窪みに煙草を押し付けた。そしてその潰れた煙草を暫く見詰めていたが、煙草ケースを静かに持ち上げるとベージュの小さなバッグに丁寧に収めた。
「私ね、大人になるって順序良く並べられたステップをひとつひとつ慎重に上がっていくことだと思っていた。きちんと揃えられた箱のような段をひとつずつクリアーして、大人に辿り着くものだと思っていた。そのステップを無事にクリアーするための努力をコツコツと続ければ、希望は叶うものだと信じていた。夢を描いて生きていた私。私が何かを感じ、思えば、相手の人も何かを感じ、思ってくれるはず。だけど、それが全く同じことであるとは限らないんだよね」
穏やかな響きでそこまでを口にすると、彩音は窓ガラスの外に目を向けたが、それは光を失った空虚な瞳だった。瞬くことを忘れた瞳が透明な水に覆われていることを私は認めた。その時、私の心の中で痛切な悔恨が形を成した。
「ごめんね、今日は真司君に甘えちゃった」
中学校卒業後の彼女に何があったのか、それについて私はほとんどを知らない。しかし些細なことにも少しばかり幼い感覚で歓声を上げた日々の私たちは、完全に過去のものになった。私が好きだった屈託のない彼女の笑顔には二度と会えない。私は彩音の全てを失ったのだ。
無言で窓の外を見つめる彼女の横顔に頬紅だけが妙に印象的であった。やがて紅は彼女の顔一面に広がっていき、あたり一面を紅に染め始めた。彩音はその紅の中に溶けて消えていくように見えた。今日初めて姿を見せた太陽も既にビルの谷間にその身の半ばを埋め始めている。
その日を最後に彩音の音信は絶えた。

サイファー・ノーティス

鈴木健之

「えっ？　とがなく？」
「そう、咎なくて死す」
綾乃が親友だった裕子から、いろは歌に関する意外な話を聞いたのは、大学一年の年末だった。

いろはにほへと　ちりぬるを
わかよたれそ　つねならむ
うゐのおくやま　けふこえて
あさきゆめみし　ゑひもせす

この古くから手習いの手本として受容されてきた有名な歌に、別の意味があると教えてくれたのは、二人で忠臣蔵の映画を見た後だった。いろは歌は四十七文字、赤穂浪士も四十七人であるということは偶然ではなく、いろは歌を七文字毎に区切り、最後の文字を繋げると……。

いろはにほへと
ちりぬるをわか
よたれそつねな
らむうゐのおく
やまけふこえて
あさきゆめみし
ゑひもせす

「と・か・な・く・て・し・す」
「咎なくて死す」と読み取れる。
お上に向かって不服や不平を訴えることができなかった時代、吉良上野介を無罪放免にして、浅野内匠頭だけを切腹させたこと、また、見事主君の無念を晴らした赤穂浪士達に切腹を申し付けたことに対する批判を、容易に分からないように歌に込めたり、罪がないのに死ぬことになったと歌舞伎などで演じたりしているとの話だった。日頃あまり聡明な部分を感じることのない裕子の理路整然とした説明に、さすが歴女と感心した記憶があるのだが、何故急にそんな話を思い出したのか、綾乃は一人静かに考えていた。
綾乃と裕子は高校一年の時に知り合い意気投合した。大学に行っても社会人になっても、誰よりも一緒に過ごす時間が長い、密度の濃い付き合いをして来た。しかし、綾乃がそんな裕子を親友ではなく、親友だったと思うようになったのは、三年前裕子が結婚して以来、変貌してしまったことが大きな原因であることは間違いなかった。
電話は全く繋がらずいつも留守電、返信はメールかLｉ

ｎｅで、らしくない事務的な対応ばかり。綾乃の住む川越と裕子の住むふじみ野は、会おうと思えばいつでも会える距離なのに、結婚以来会うことがなくなったどころか、声すら聞いていない。結婚すると人は変わるとよく言うが、かつては何をするのもいつも一緒で、お互い彼氏との予定より二人の予定を優先していた日々があったことが嘘のように感じられ、悲しみと寂しさで涙した日もあった。しかし裕子には裕子の人生があるのだろうから、自分は自分の人生を謳歌しなければという思いに至り、次第に連絡することもなくなり、今は年に一度年賀状を交わすだけの付き合いになってしまっていた。

「そうだ、年賀状だ」

綾乃はふと思い出し、裕子から届いた年賀状を探した。

昨年もまた、待ちわびた和典さんとの
結婚式の手紙届かず
今年こそ待ってます。
ＰＳ・年末の忠臣蔵見ましたか？

（まったく……）

綾乃は裕子からの年賀状を読み返し、自分が結婚に踏み切れないのは、裕子の結婚後の豹変ぶりが少なからず影響しているのに、人の気も知らないで何を言ってるのかと思いつつも、急にいろは歌の話を思い出した理由に気が付いた。確かに昨年末、二人でいろは歌の話をした時に上映されていた忠臣蔵が、テレビで放映されていた。綾乃は見ることはなかったが、読み返した裕子の年賀状の言葉に懐かしさを感じ、久し振りに裕子にＬｉｎｅを送った。

お元気ですか？
年賀状を読み返して
一緒に見た忠臣蔵を懐かしく思い出しました
また一緒に映画を見に行けたらいいですね

学生時代は会話をしているかのように間髪入れずに交換し合ったＬｉｎｅも、今は裕子からの返信は直ぐには来ない。しかし綾乃は、久し振りに少しすっきりしたような不思議な気持ちになっている自分を、心地よく感じていた。

裕子からＬｉｎｅの返信が来たのは、綾乃の部屋で和典と二人で昼食を食べている時だった。綾乃がメッセージを送ってから二日が経過していた。

一緒に見た時、私が少しだけ
ふざけて言ったことに
綾乃が元気が出たと言ってくれたよね！

「えっ？」

綾乃はメッセージを読んで考え込んでしまった。

「どうした？」
「裕子からＬｉｎｅが届いたんだけど、何のことかさっぱり分からなくて」
綾乃はそう言うと、和典にスマホの画面を見せた。
「全然覚えてないの？」
「うん、いろは歌の話をしたのはよく覚えてるんだけど、ふざけて何か言ったことなんてあったかな？　毎年貰う年賀状もそうなんだけど、いつも文章の内容がもう一つピンと来ないんだよね」
「そうなんだ。で、いろは歌の話っていうのは？」
「いろは歌を七文字毎に区切って最後の言葉を繋げると、咎なくて死すって読めて、それは忠臣蔵のことを言ってるんだって話」
「へー、初めて聞いた」
「私も十年以上前に、初めて裕子から聞いたんだけど」
「そうなんだ」
和典はそう言いながらスマホの画面を暫く眺めていたが、急に立ち上がり紙とペンを手にすると、慌てた様子で文字を書き出した。
「どうしたの？」
「毎年貰う年賀状見せて」
不思議そうに尋ねる裕子に、和典は真剣な顔で言った。
綾乃は和典との結婚について書かれている内容の為、見せるのを一瞬躊躇したが、いつにない和典の真剣な表情に押され、今年届いた年賀状を手渡した。
「まさか……」
和典はそう言うと、年賀状を見ながら文字を書き出した。そして、綾乃が昨年と一昨年の年賀状を見つけて来て手渡すと、同じように文字を書いて行った。
昨年の年賀状には、

綾乃に教えて貰ったお寿司屋さんの
大間の鮪がＳＮＳで凄いことに！

と書かれていた。
一昨年の年賀状には、

毎日家事で、それはそれは忙しくて
気分転換をいつもしてます！

と書かれていた。
「マジかよ」
和典は頭を抱えた。
「どうしたの？」
綾乃は再び尋ねた。
「いろは歌だよ」
「いろは歌がどうしたの？」
「さっき来たＬｉｎｅのメッセージを、七文字毎に区切っ

て最後の言葉を繋げると……」

いっしょにみた
ときわたしがす
こしだけふざけ
ていったことに
あやのがげんき
がでたといって
くれたよね！

「助けに来てって読める」
「えっ？」
困惑する綾乃に、和典は言葉を書き込んだ紙を見せながら説明を続けた。
「今年の年賀状は……」

さくねんもまた
まちわびたかず
のりさんとのけ
っこんしきのて
がみとどかず

「助けて……」
「そう、で、去年のは……」

あやのにおしえ
てもらったおす
しやさんのおお
まのまぐろがえ
すえぬえすです
ごいことに！

「え・す・お・え・す、ＳＯＳ？」
「そう、で、一昨年のに、その理由が書いてある」

まいにちかじで
それはそれはい
そがしくてきぶ
んてんかんをい
つもしてます！

「ＤＶ！」
綾乃は両手で口元を覆いながら、絞り出すような声で言った。
「裕子ちゃん、旦那のＤＶに遭ってたんだ。だから結婚してから全然会えないし、きっと監視されてて、手紙やＬｉｎｅも内容をチェックされてるから、言いたいことも言えずに、綾乃にだけ分かる暗号でメッセージを送ってたん

だ」
「どうしよう……」
涙ぐむ綾乃に、和典はテキパキと出掛ける準備をしながら言った。
「行こう！」
「どこに？」
「裕子ちゃんの家だよ。この時間なら車より電車の方が早い、とにかく直ぐ行こう」
「うん」
綾乃も急いで支度をした。

二人は川越市駅から東武東上線に乗り、ふじみ野駅で降りると、一目散に裕子の家に向かった。和典は元々正義感が強く行動力のある男であったが、この迅速な対応は、綾乃の不安や後悔の気持ちを、少しだけ和らげることとなった。
「留守かな？」
和典は裕子の家に着くなり、躊躇することなく呼び鈴を押したが、反応はなかった。
「いや、エアコンの室外機は回ってるし、チャイムが鳴った時、物音が聞こえたような気がする。多分居留守だよ」
和典はそう言うと、門を開けて中に入ろうとしたが、大きな鉄の門は内側から鍵が掛かっていて、微動だにしなかった。
「あっ！」
和典が、家の中が見える場所はないか探っていると、綾乃が急に声を上げた。
「どうした？」
「さっき裕子から来たＬｉｎｅのメッセージが、削除されてる」
「それはまずいな、旦那に暗号がバレたのかも」
ガチャン！
その時、家の中で物が割れるような大きな音がした。
「クソ！　ＤＶか？」
「どうしよう、警察に連絡する？」
「いや、物音がした位じゃ、警察は直ぐには動いてくれない。緊急事態だ。火事だって一一九番しよう」
「えっ、全然燃えてないのに？」
「同じ通報内容の入電が複数あれば、間違いなく消防は直ぐ出動してくれる。二件じゃ弱いから、コンビニにあった公衆電話でも通報して来るから、綾乃も直ぐ通報して。黒煙、黒い煙が出てるって言って。名前とか聞かれたら適当に誤魔化して切っていいから」
和典はそう言うと、スマホで通報しながら、公衆電話のあるコンビニに向かって走って行った。彼は保険代理店を経営しているのだが、長年地元の消防団に所属していて、消防署の内情には明るい。綾乃は言われた通り直ちに通報した。彼の言った通り、十分も経たない内に、指令車一台、

ポンプ車二台、救急車一台が相次いで到着した。
「どこも燃えてませんよ！」
相次いで緊急車両が集まり、呼び鈴だけではなく、救急隊員らに大きな声で何度も呼び掛けられ、さすがに居留守は使えず、裕子の夫の金久保弘樹は、玄関の外に姿を現した。しかし、念の為の確認を求める隊員達に対しては、頑なに拒否する姿勢を見せ、門の鍵を開けることはなかった。
「大丈夫かな、裕子ちゃん重傷なんてことはないだろうな」
和典は一抹の不安を口にした。
間もなく原付バイクに乗った警察官も二名到着し、金久保の説得に加わったが、膠着状態はなおも続いた。
居ても立っても居られなくなった和典は、警察官に続いて到着したふじみ野市消防団の車両を見つけると、一目散に走って行った。川越と応援協定を結んでいるふじみ野は、日頃より消防団同士の交流もあり、顔見知りも何人かいた。
「悪いけど、ちょっと借りる」
和典はそう言うと、車両に積んであった予備の防火服を素早く着こみ、裏口の柵を乗り越えて中庭に侵入した。
「青木さん、まずいっすよ」
若い団員が慌てて後を追った。
和典が庭に面した窓のカーテンの隙間から中を覗くと、仰向けに倒れている裕子がいた。顔には出血が見られ、意識も混濁しているように見えた。
「クソ、やっぱりDVか」
和典はそう呟くと、大声で叫んだ。
「傷病者発見」
「失礼しますよ」
和典の声を聴いた救急隊員達は、門を乗り越えて庭に向かった。
「不法侵入で訴えるぞ」
金久保は声を荒げた。
「傷病者女性、出血あり、意識朦朧状態！」
すぐに戻って来た隊員がそう告げると、警察官も門を乗り越え、制止する金久保を力強く押し退けて、玄関から室内へ侵入した。その後は応援のパトカーも二台到着し、裕子は無事に救急搬送され、現場は慌ただしく動き続けた。
和典は安堵したものの、事情聴取等受け、なぜ川越の人間が、ふじみ野の団の装備品を身に着けて現場にいるのかと知れたら、それはそれで大問題になるなと、言い訳を必死に考えていた。
「青木さん、やるね」
喧噪の中、和典は肩を叩かれ振り返った。
「嶋田団長」
そこに立っていたのは、ふじみ野市消防団団長の嶋田だった。
「事情は彼女から聞いたよ。厄介なことになるから、今の内にすっと裏から抜けちゃって、後は上手くやっとくか

ら」
「あっ、ありがとうございます」
和典は、笑顔でそう言う嶋田に敬礼をした。
「でも、それはちゃんと返してよ」
嶋田は敬礼を返しながら、和典が着ている防火服を指さした。
「傷病者の第一発見者の方いますか？」
「はい、私です」
警察官の呼び掛けに嶋田は即答すると、振り返り走って行った。和典は嶋田の後ろ姿にもう一度敬礼をすると、そっと現場を後にした。
「綾乃なら気付いてくれると信じてた」
「ごめん、直ぐに気付かなくて」
裕子が救急搬送された病室で、二人は数年振りにハグをした。
金久保のＤＶが始まったのは、一緒に生活を始めて直ぐのことだった。束縛行為はどんどんエスカレートして行き、裕子の言動、行動は全て監視下に置かれ、意にそぐわなければ容赦なく暴力を受けた。単独での外出は許されず、金久保はテレワークで常に在宅の為、逃げ出すこともできなかった。月に数回ある出社日には、通信機器は全て取り上げられ、帰宅するまで鍵を掛けられた部屋に監禁状態にされる異常ぶりだった。
裕子は金久保に分からないように助けを求める手段として、綾乃といろは歌に賭けた。そして、数年振りに地獄のような生活から解放されることとなった。
「私はもう結婚は懲り懲りだけど、綾乃はそろそろいいんじゃない？　あんな頼りになる人中々いないと思う」
裕子は綾乃に言った。
「うん、今回のことで、彼への想いが改めて大きくなった気がする。でも……」
「でも？」
「結婚する前に、いろは歌に代わる私達二人の間だけで分かる暗号みたいなものを、念の為決めておいた方がいいのかなって」
「あっ、それ大事かも」
すっかり笑顔を取り戻した裕子と、友情を取り戻せたことに喜びで胸一杯な綾乃は、大きな声で笑い合った。
二人の友情は、有為の奥山を今日越えた。

川越文芸賞の選考にあたって

「川越文芸賞」が設けられて、今年で四回目になります。小説部門に掲載された八作品の中から、文芸賞一作品。準賞二作品を選ばせていただきました。いずれの小説も登場人物の心理が丁寧に描写された作品でした。以下、三作品についての選考内容です。

川越文芸賞

「栞をはさんで」　宮澤果奈

思春期の女子と彼女を見守る人たちの姿が描かれた作品である。中学二年生の主人公は、家族や学校での人間関係、今後の進路、さらには自分の容姿にまで日々イライラを募らせる。その様子は、臨場感あふれる言葉遣いに満ちた、家庭内での会話や部活動や授業中といった学校生活の描写をとおして克明に伝わってくる。ついに家出を敢行するが、叔母に出会って未遂に終わる。叔母の提案で母親の同意のもとに夏休みに叔母の家で過ごす時間を持った主人公は、家族と距離を置き、叔母と語らい彼女の蔵書を借りて読み、いつしか自らの大きな変化を感じていく。おそらく彼女は、自分の人生のこの場面に栞をはさむのだろう。

悩める子と母に向けた作者のエールであろうか。また、主人公、叔母、母の三人は、一人の女性のそれぞれの年齢の時の姿のようで、登場人物にむけられた作者の深い愛情が感じられる。

川越文芸賞準賞

「純然たる友情」　成本孝宏

コロナ禍の影響で会社が倒産した。二十六歳の主人公は職業と友人を失って引き籠もる。孤独で無気力な昼夜逆転の生活、大半をインターネットに費やす日々に共感を覚える読者も多いだろう。ある時日課の散歩中の公園で一匹の黒猫が彼の膝に飛び乗ってきた。主人公は黒猫との触れ合いをとおして新しい一歩を踏み出す気力を取り戻す。彼の心の状態は、彼の部屋や公園の描写に巧みに反映されている。コロナ禍が明らかにした現代人の心の問題とその解決のプロセスが個人の問題として丁寧に描かれている。

川越文芸賞準賞

「事実は小説より奇なり」　井原正人

一本の不審な電話から始まる事件。これが典型的な成り済まし詐欺であることは誰にでもわかる。しかし主人公だけは騙される。電話の主を励まし、不祥事については内密に示談金を送金することを承諾し決意する。主人公の心にあった、親としての強烈な切迫感が伝わってくる。それはほかの家族に指摘されても揺らぐことがない。主人公と詐欺師との会話や主人公の心の内の描写を読むうちに、いつしか「早く送金せねば」との思いにかられる。なぜこの手の犯罪が後を絶たないのか、心情的に十二分に理解させてくれる描写力である。

（河合・木ノ原・村上）

小説の編集を終えて

今年度の小説部門の応募数は十編で昨年度より二編多く喜ばしい限りである。しかし二編は左記の事情で掲載を見送らねばならず残念なことである。一編、努力と意欲は大いに評価するところだが、表現に読ませる工夫が欲しい。所謂ベタ書き、それ故に真意が伝わり難い。もう一編、児童文学と称する以上、子供にも理解でき、大人も感動できる作品に仕上げて欲しい。

〈掲載作品の寸評〉

○**栞をはさんで**　今回の一席の入選作。若年層を中心に、読書離れ或いは紙の文化が廃れそうと叫ばれている昨今、このような作品に出会えてほっとしているのは選者だけではなかろう。

○**純然たる友情**　今、犬猫ブームだそうだ。それに乗って読者の気を十分にそそる書きぶりは、よく計算されている。文章もしっかりと整い展開力もある。今回川越文芸賞準賞に選んだのは、そのような点を評価したからである。

○**事実は小説より奇なり**　昨今社会を賑わすオレオレ詐欺に騙されかけた家族の騒動を克明に描いた力作。欲を言えば妻以外の人を妊娠させる話はあまりにもありふれているので、もう少し現代社会にマッチした複雑な騙され方にしたらより深刻度が深まる作品になるのでは。タイトルについても、どのような内容にも当てはまるので一工夫を。川越文芸賞準賞作。

○**茶碗**　難しい時代小説に取り組んだ意欲作。自害の場面だが、これほど克明に書く必要があるだろうか。単に自害したの一言でいいと思う。克明過ぎると読者に不快な気持ちを抱かせるかもしれない。

○**ときめきに死す**　丸山健二作品のファンである主人公が、図書館で偶然亡き夫も丸山作品のファンだったという女性と出会うところから話が始まる。最後が阪神タイガースと楽天イーグルスとの交流戦で終わるのも面白い。

○**車イス**　描写が丁寧で、作者の思い入れの深さを感じる。しかし主人公が中学生という設定には不自然さがある。それと終わりの数行、ない方が余韻の残る作品になるのでは。

○**遠い記憶**　元彼女との再会と切ない別れ。これは誰にでも一つや二つあるもので共感を覚える。最後だが現在の自分の気持ちに引き寄せて終わらせたらと思わないでもない。

○**サイファー・ノーティス**　いろは歌を冒頭にもってきて読者を作品世界へ誘い込む書きぶりは巧妙。夫からＤＶを受けている親友を救い出すまでを克明に描いている。但し題名が分かりにくい。

〈最後に〉全応募作に創作意欲を感じるが、募集要項を守らなかったり、原稿用紙の書き方が決まりから大きく外れていたりする場合がある。この基本を守ってほしい。

（河合・木ノ原・村上）

市内文芸団体一覧

部門	団　体　名	会員数	氏　名
短歌	蘆笛短歌会	１６	曽根田　恵美子
	はつかり短歌教室	２１	井　尾　洋　海
俳句	霞ケ関俳句研究会	１０	益　子　　聰
	古谷俳句会	１１	佐　藤　俊　春
	霞俳句同好会	９	益　子　　聰
川柳	初雁川柳会	１３	矢　澤　俊　美
	六星川柳会	１１	平　柳　一　帆
	オアシス川柳同好会	９	島　田　精　一
	中央かがやき学園川柳クラブ	１３	三田地　輝　憶
詩	プリズムの会	１１	天　野　　英
随筆・詩	バクの会	５	遠　山　昭　雄
その他	かすみ古典文学サークル	２２	小　峰　貞　一
	川越ペンクラブ	１９３	小坂部　恵　子

文芸川越　第45号　資料

◎ 投稿数　　※カット　7人　20点

部　門	投稿者数（前年比）	投稿作品数（前年比）	掲載作品数（前年比）
詩	18人（－ 3）	18編（－ 3）	18編（－ 3）
短　歌	47人（ 13）	94首（ 26）	94首（ 26）
随　筆	18人（ 2）	18編（ 2）	17編（ 1）
俳　句	69人（ 11）	345句（ 58）	345句（ 58）
川　柳	31人（ 1）	155句（ 5）	155句（ 5）
小　説	10人（ 2）	10編（ 2）	8編（ 3）
計	193人（ 26）	640点（ 90）	637点（ 90）
カット	7人（ 1）	20点（ 0）	17点（ 5）

◎ 年齢層

15～19歳	11人	5.70%	60～69歳	16人	8.29%
20～29歳	0	0.00%	70～79歳	60人	31.09%
30～39歳	5人	2.59%	80～89歳	78人	40.41%
40～49歳	0	0.00%	90～99歳	15人	7.77%
50～59歳	8人	4.15%			
			計	193人	

最年長　99歳　　最年少　15歳

《文芸川越（第四十五号）作品掲載者名簿（掲載順・数字は掲載ページ）》

●詩

小野　浩　8
荻座利守　10
中山正夫　12
大嶋一恵　14
ウッドマン　16
浮橋透徹　18
大和友子　20
あいだ　澄　22
青柳謹一　24
伊藤彰一　26
平井正一　28
竹内京子　30
中島久美　32
中島幸男　34
中島　貴　36
曲山　茂　38
酒井真結子　40
志村　奏　42

●短歌

青木　潤　49
浅見章恵　49
荒木秀子　49
飯野喜代子　49
石澤昌子　49
今澤カヅ子　49
岩澤邦雄　50
牛田すみ　50
遠藤　洋　50
大島秀子　50
大野京子　50
小名木たか子　50
金子芙美子　51
叶　玲子　51
唐沢順子　51
北澤高子　51
倉持美香　51
黒須　恵　51
小出い子　52
古牧ゆき　52
小峯綾子　52
齋藤悦子　52
齊藤隆子　52
齊藤洋子　52
佐々木美千代　53
里村広美　53
佐野節子　53
鳴原音羽　53
篠崎より子　53
柴田恵子　53
曽根田恵美子　54
高見沢登美子　54
104hero　54
中川俊子　54
長澤八千代　54
中島勝子　54
中添三代子　55
野原喜代子　55
馬場成子　55
福田智江子　55
福田ふみ子　55
藤枝杏里　55
程島萬喜　56
町田あや子　56
溝呂木君子　56
宮崎朝子　56
山田厚子　56

●随筆

佐藤智子　60
豊田知枝子　63
橋本美恵子　66
村上トシ子　69
山口英次　71
土屋雪次郎　73
石川　勉　74
大滝進二　76

菅沼眞二 78
大森春美 81
山下克吉 82
小畔川霞 84
粕谷泰雄 84
鈴木高雄 87
校條清 89
夏川漠 90
恵比根蘭 91

●俳句

新井咲那 99
池田隆生 99
井上康子 99
榎本千枝子 99
大矢真紀子 99
岡本好央 99
小川房子 100
尾花順子 100
片木美津代 100
勝田仁恵 100
勝田雅夫 100

葛城さつき 100
金子隆司 101
金光舞 101
木内勝代 101
木村暖心 101
神山喜美代 101
小林勝子 101
小林ケイ子 102
小林幸二 102
齊藤栞 102
斉藤秀子 102
齊藤博 102
坂根陽子 102
佐藤俊春 103
塩野薫 103
清水次男 103
清水久枝 103
鈴木二郎 103
鈴木敏雄 103
高木茉利 104
高瀬チエ子 104
高野英次 104
瀧沢潤子 104

田中信子 104
對崎フミ 104
津田艶子 105
露崎榮三 105
土居かえな 105
土居雅美 105
長峯静子 105
中村和子 105
並木伸雄 106
新村洋子 106
忽滑谷春雪 106
野村桂子 106
長谷部澄香 106
葉月星子 106
平田記美代 107
深見眞貴子 107
福島花野 107
古畠美知子 107
星野直子 107
細野榮美子 107
益子さとし 108
舛田智哉 108
松本みち子 108

丸山靖子 108
三浦知栄子 108
水庭幸子 108
宮崎大 109
村田由紀子 109
森田有紀子 109
矢島時枝 109
矢島祥子 109
横沢和子 109
横山功 110
吉野一男 110
渡邊美智子 110

●川柳

新井しま子 115
伊藤南美 115
指宿恒子 115
榎本スミ子 115
沖田廣志 115
帯津素峰 115
笠原明光 116
栗原正歩 116

小杉佳伸 116
島田繁夫 116
島田精一 116
清水元気 116
関徳二 117
舘野弘子 117
田中耕平 117
寺本勝治 117
寺本甚太 117
時枝利幸 117
中村紀夫 118
中村久雄 118
新田弘子 118
野本一史 118
平柳一帆 118
古川正明 118
本間四郎 119
正木浩 119
三田地輝憶 119
武笠清治 119
矢澤俊美 119
我妻信子 119
渡辺健男 120

●小説

宮澤果奈 124
成本孝宏 131
井原正人 139
竹宮吉保 146
ジェームズ下山 151
関根トミ子 157
加山聡 164
鈴木健之 170

編集後記

「文芸川越」第四十五号が出来上がりました。創刊号が発行されたのは昭和五十六年三月のことで、当初は詩・短歌・俳句・川柳の四部門でしたが、その後随筆・小説も加えて六部門に改まりました。創刊以来一回も休むことなく発行を続けてこられたのは、市当局はもとより市民各位の熱心なご支持の賜物に他なりません。

川越市が「文芸川越」を発行する目的は、市民が創作する作品の発表の場を作ること、そしてさまざまなジャンルの作品を幅広い年代の市民から求めて文芸による市民相互の交流を図ることにあります。発表の場があること、そして共に書く仲間が近くにいて互いに切磋琢磨しあう気持ちを持つことは大事なことです。

最近のこと、さいたま文学館（桶川市）へ行く機会があり、館内の図書室にも立ち寄りました。埼玉ゆかりの文学者の作品や文学関係の資料が揃っていますし、県内自治体で発行する文芸誌コーナーもあります。寄贈されたものがあるだけとのことですが、県発行の「文芸埼玉」を含めて十五冊。埼玉県の市町村数は現在六十三と聞いていますから、その数からいくと少なく、「文芸川越」の背表紙を見ながら、川越市が文芸に力を入れているまちであることを誇らしく感じました。

今回の「文芸川越」の投稿者は百九十三人、全作品数は六百四十一点でした。これを前回と比べてみますと、投稿者は二十六人の増加、作品も百近く増えました。しかし若い方の投稿が伸び悩んでいます。これを増加に転じるのは容易なことではありませんが、編集委員会としても対策を講じることが喫緊の解決すべき課題です。

さて、今回は「川越文芸賞」を選出する年です。この賞は、川越市制施行九十周年記念行事の一つとして第三十三号の時に創設されたもので、その後第三十五号から五年ごとに選出することになり今回で四回目になります。各部門それぞれ正賞一名・準賞二名です。各部門の編集委員が限られた時間の中で熱心な討議を交わして、多数の投稿者の中から十八名を選出したものです。部門ごとの選出経過も今号に掲載してあります。正賞・準賞に選出された十八名の皆様、おめでとうございます。惜しくも今回は受賞を逸せられた方は次の目標にして、それぞれが文芸活動にご精進くださるよう期待しています。

川越市は、歴史的・文化的な伝統に育まれて発展して来ました。この先も魅力のあるまちとしてあり続けるためには新たな歴史や文化を育てて行かなければなりません。「文芸川越」がその役割の一端を担えるよう、編集委員一同努めて参ります。

末筆ですが、今号刊行にお力添えをいただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

（編集委員長　木ノ原小里）

文芸川越　第四十五号

発行日　令和七年二月三日

編集　文芸川越編集委員会

発行　川越市文化芸術振興課
川越市元町一－三－一

印刷　有限会社　東京工芸社
鶴ヶ島市脚折町一－一九－四〇

頒布価格　千円

本誌に関するご意見・ご感想をお寄せください。
〒350-8601　川越市元町1-3-1
川越市役所文化芸術振興課
TEL　049-224-8811（代）